

日本写真家協会会報

NO.168
(2018. Jun.)

- 座談会 創立70周年記念事業「日本の現代写真」編纂に向けて
- 展望「平昌オリンピックに見る報道現場の今」
- 第43回 2018JPS 展開催

JPS



Photo Ota Hiroaki

SIGMA

「超高画素時代」に最適化した
最高性能を実現。

A Art

**24-70mm F2.8
DG OS HSM**

希望小売価格(税別)190,000円 ケース、フード(LH876-04)付



シグマの新しいプロダクト・ラインについては、こちらへ。

sigma-global.com



At the heart of the image



その刹那に、かつてない精彩を。

I AM THE D850

D850



□D850ボディー 価格:オープンプライス ●記録媒体は別売りです。



ニコンカスタマーサポートセンター www.nikon-image.com
0570-02-8000

株式会社 ニコン・株式会社 ニコン イメージング ジャパン

一般電話からは市内通話料金でご利用いただけます。営業時間9:30~18:00(年末年始、
夏期休業等を除く毎日) ●ナビダイヤルがご利用いただけない場合は、(03)6702-0577
におかけください。●ファクシミリでのご相談は、(03)5977-7499へご送信ください。

■ <i>Gallery</i>	JPS ギャラリー 石引まさのり、吉永陽一、長野良市、阿部俊一 5 平寿夫、桜井秀
■ <i>First Message</i>	「JPS の今」と真摯に向きあう 熊切圭介 11
■ <i>Focus</i>	著作権法の改正について ~新しい著作権時代の幕開け~ 濑尾太一 12
■ <i>Telescope</i>	平昌オリンピックに見る報道現場の今 池田正一 14
■ <i>Opinion</i>	写真の力が自分を変える ~ノルウェーの刑務所での取り組み~ 渡邊英昭 16
■ <i>Wonder Land</i>	<座談会> 創立 70 周年記念事業「日本の現代写真」編纂に向けて 18 出席者: 飯沢耕太郎(評論家)、鳥原学(評論家)、多田亜生(編集者)、 田沼武能(常務理事)、司会: 松本徳彦(副会長)
■ <i>Award</i>	「笹本恒子写真賞」第2回 受賞者決定 足立君江さん 25
■ <i>Zooming</i>	写真×写真(連載 16) 記憶より記録 河野和典 26 ~最近の写真集に見る~
■ <i>Workshop</i>	著作権研究(連載 43) 「著作者人格権」の危機 齊藤博 28
■ <i>Archives</i>	「日本写真保存センター」調査活動報告(27) 松本徳彦 30 科学技術の進展する過程を記録する眼
■ <i>Exhibition</i>	第 43 回 2018JPS 展開催 32
■ <i>Topics</i>	賛助会員トピックス 36
■ <i>Topics</i>	初期の写真を通して日本の歴史を知る「写真発祥地の原風景 長崎」 38
■ <i>Digital Topics</i>	デジタルトピックス特別編「国産モノクロフィルムの誕生と終わり」 40 ~ロールフィルムの国産化から 90 年~
■ <i>New Face</i>	平成 30 年度 公益社団法人日本写真家協会 新入会員紹介 42
■ <i>General Meeting</i>	平成 30 年度(第 19 回)定時会員総会報告 45
■ <i>Message</i>	Message Board 46
■ <i>Books</i>	JPS ブックレビュー 48
■ <i>Comment</i>	写真解説 51
■ <i>Report</i>	セミナー研究会レポート CP+2018 セミナー報告、第 3 回技術研究会報告 52
■ <i>International</i>	日本写真家協会の沿革(英文) 53
■ <i>Information</i>	追悼 = 正会員・中尾たかし、南川三治郎、川村赳夫、河合肇、越間誠 ... 54 / 経過報告 / 編集後記
■ <i>Technical</i>	エプソンのデジタルプリント最前線 62 光沢プリントに適した染料プリント ~新開発の Colorio V-edition シリーズ~
■ <i>Gallery</i>	FUJIFILM X ギャラリー 小池キヨミチ、太田眞、夏目安男 64 表紙・太田宏昭、表 4 ・宅間國博

広告
案内

- (株)シグマ ■ (一社)日本写真著作権協会(JPCA) ■ (株)タムロン
- (株)ニコンイメージングジャパン ■ (株)堀内カラー ■ エプソン販売(株)
- オリンパスギャラリー ■ キヤノンマーケティングジャパン(株) ■ 富士フイルム(株)
- リコーイメージング(株)

OLYMPUS

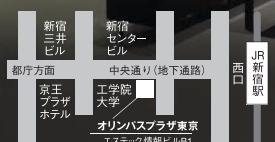
Your Vision, Our Future

**オリンパスギャラリーのご案内**

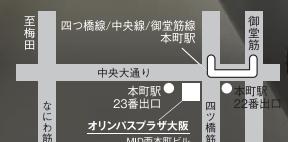
オリンパスギャラリーでは、写真文化の普及・向上に貢献することを目的に、さまざまな写真展を行っています。

オリンパスプラザ東京

営業時間 11:00~19:00
木曜定休
〒160-0023
新宿区西新宿1-24-1
エスティック情報ビルB1
Tel: 03-5909-0191

**オリンパスプラザ大阪**

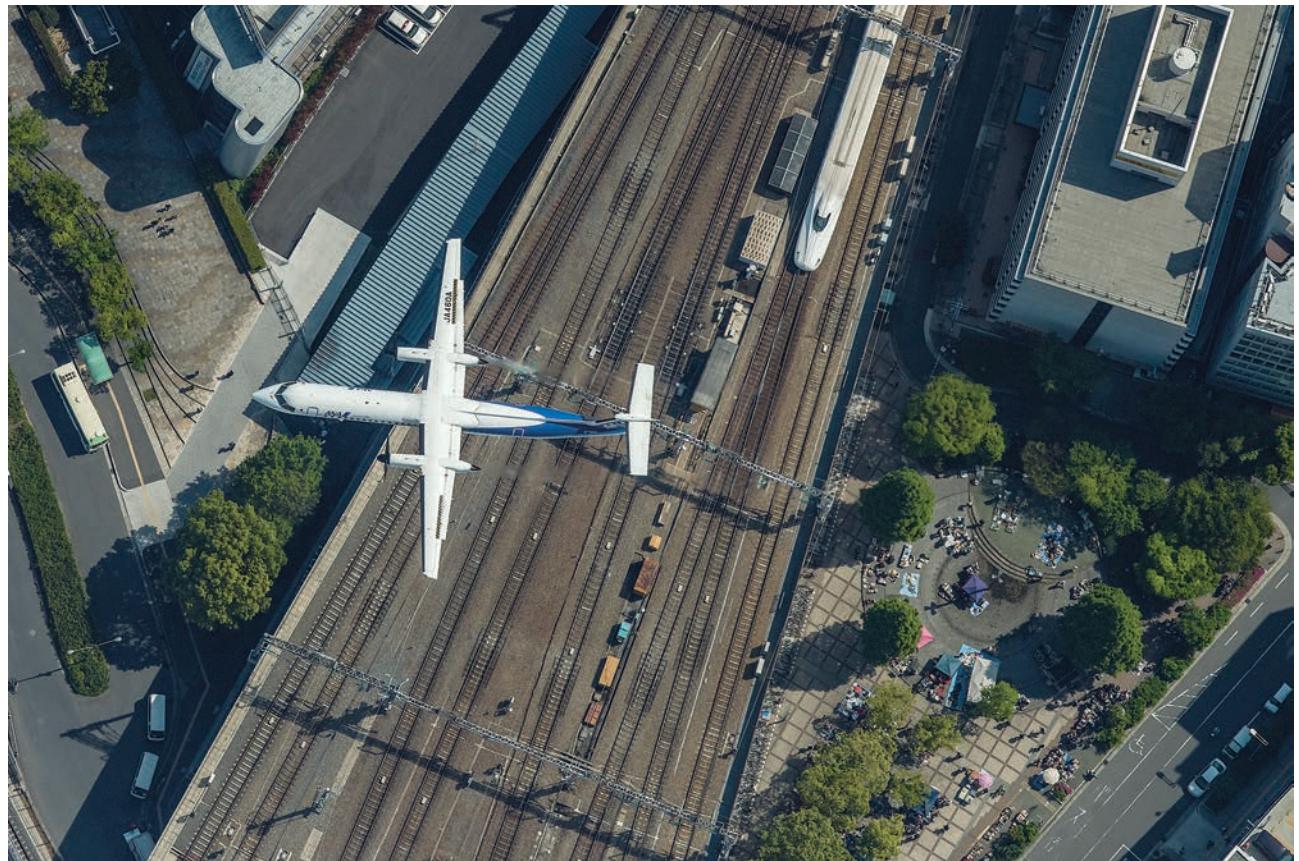
営業時間 10:00~18:00
日曜・祝日定休
〒550-0011
大阪市西区阿波座1-6-1
MID西本町ビル
Tel: 06-6535-7911





孤島の夫婦——石引まさのり

写真集『大東島 南と北のモノローグ うふあがり島』
写真展「絶海の孤島 うふあがり島」



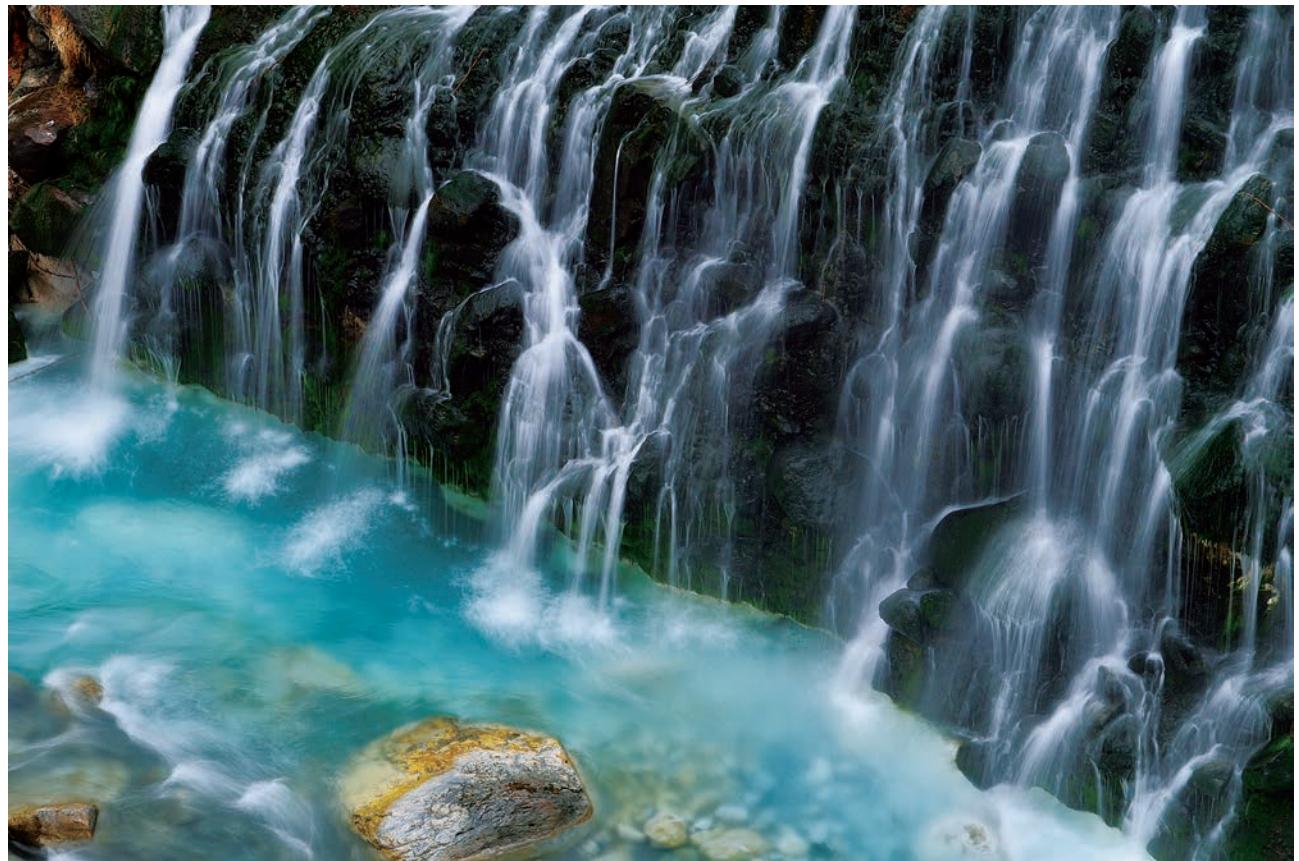
新大阪の日常——吉永陽一

写真集『空鉄の世界』

写真展「いきづかい - いつもの鉄路」



阿蘇大橋建設現場と再開した阿蘇長陽大橋——長野良市
写真集『ゼロの阿蘇 500 日の記録』



青い清流——阿部俊一
写真集『瞬光が描く美瑛の大地』



サビールに集う少女たち。——平 寿夫
写真展「サビール イエメンハダラマウトの水飲み場たち」



DRY EARTH——桜井 秀
写真展「DRY EARTH」

「JPS の今」と真摯に向きあう

会長 熊切 圭介

アメリカの雑誌『Newsweek』誌の表紙に掲載されたのは、満面に笑みを浮かべ、手を握り合っている北朝鮮の金正恩委員長と韓国の文在寅大統領が、カメラに向かってポーズをとっている写真だ。ついこの間まで敵対していた二人の姿とは大違いで、政治的立場が変化したとはいえ、両者の鮮やかな変化には驚かされた。

日本写真家協会は、今年5月に創立68年を迎えた。この間には様々な要因から糾余曲折があったが、会員の強い意志と、写真界のバックアップもあって、現在の形にまとまっている。

平成30年の定時会員総会は、8年ぶりに大阪で開催した。JPSは、これまでに会員同士の親睦を図るために、熱海や関西で総会を開催してきた。会員数が減り平均年齢も63歳近くになるなど、いわゆる高齢化が進んでいるのが実状で、今回は出席会員数が心配されたが、関西在住のベテラン会員や新入会員をはじめ、宮崎や北海道から遠路はるばる大勢の会員が出席した。「定款の一部変更」の議案などが承認され、無事総会を終えることが出来、終了後の懇親会でもそれぞれの会員が親交を深める様子がうかがえた。

写真界全体が厳しい状態にあるなかで、今年度、31名の新入会員を迎えることが出来たのは嬉しいニュースだ。新入会員の説明会では、新しい世界に参入することに対する期待と意欲、更には抱負などを、熱く語ってくれた。今年度の新入会員展の写真のテーマは「私の仕事」で、新入会員の皆さんのが現在関わっている仕事の内容や撮影状況などについて、時間をいっぱい使って熱心に伝えてくれた。その席で話題になったのは、写真家協会の名誉会員の笛本恒子さんことで、日本の報道写真界の草分けであり、女性の報道写真家として活躍したことが、高く評価されていた。

今年の様々な写真賞で女性受賞者が目立ったのが大変印象的だった。日本写真協会賞の潮田登久子氏を始め、土門拳賞、木村伊兵衛賞、林忠彦賞など、近年になく女性が多く、一人の人が二つの賞を受賞するなどW受賞も目立った。

また、今年は関西の写真界も活発だった。京都を中心にして多様な活動を行っている国際的なフォトフェスティバル「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」が開催され、世界で活躍する写真家の作品や、写真のコレクションを公開するなどの他、サテライトイベントのKG+としてJPS会員による「目撃者・五大展」を開催するなど、積極的な姿勢が目立った。

日本写真家協会は、2020年に創立70周年を迎える。協会は、2021年に創立70周年記念事業として「日本の現代写真」展と写真歴史書の発刊に向けての準備作業を行っている。写真展は1985年以降2015年までの現代写真を収集構成し、これまでに協会が編纂してきた歴史書に続くものと位置づけている。歴史書というと固定観念に捉われ、ややもすると教科書的な作りになり易いが、時代の動きや表現の変化が感じられるようにフレキシブルな作りにしたいのだ。今回の「日本の現代写真」を、より多くの人に見て欲しいので、我々の日常生活における「写真」というメディアの立ち位置について改めて考え、次の世代に伝え残したい。

最後にキヤノンは、フィルムカメラである「EOS-1v」の販売を終了すると発表した。また富士フィルムは、ネオパン100の販売を、2018年10月を目途に終了すると発表（モノクロ印画紙も同様に終了する）。誕生から100年を待たずに国産モノクロフィルムは、終わりの時を迎えることになった。フィルムからデジタルへ、時代は変わっていく。

～新しい著作権時代の幕開け～

focus

瀬尾太一（日本写真著作権協会常務理事）

2018年5月18日、参議院本会議において、大きな改正内容を含んだ著作権法の改正案が可決されました。これによって、著作権法をめぐる環境は大きく変わる、といつてよいでしょう。この改正は写真をはじめとする著作権者にとって、昭和46年に現著作権法が制定されて以来の最も大きな改正のひとつです。今回はこの改正に含まれる内容が、著作権者にとってどのような意味を持つのか、概要となりますが解説していきたいと思います。

今回の著作権法の改正は大きく分けて次の4つが挙げられます。

＜著作権法改正の概要（文化庁資料より）＞

- ①デジタル化・ネットワーク化の進展に対応した柔軟な権利制限規定の整備（第30条の4、第47条の4、第47条の5等関係）
- ②教育の情報化に対応した権利制限規定等の整備（第35条等関係）
- ③障害者の情報アクセス機会の充実に係る権利制限規定の整備（第37条関係）
- ④アーカイブの利活用促進に関する権利制限規定の整備等（第31条、第47条、第67条等関係）

1. AIと著作権

まず、この改正の背景から説明いたしましょう。今回の改正は全般的にAI時代への対応を基礎にしていると考えられます。AIは近年、ディープラーニング（深層学習）という新しい手法を取り入れて飛躍的に進歩しました。将棋はもちろん、碁でも世界的なプレイヤーがディープラーニングによって強化されたAIに負けたことは大きなニュースになりました。ではディープラーニングという手法はどのようなものなのでしょうか。ちょっと図を見てください。（図1）左がこれまでのAIですが、可能性のある選択肢を順次すべて検討し、回答に至ります。しかしディープラーニングで学習したAIは、たくさんある選択肢の中から、学習結果によって選択肢に優先順位をつけ、総当たり的ではない効率的な検討を行って回答に至ります。このため、これまでとは比較にならない速度と高度な内容で意思決定を行うことが出来るのです。このようなAIが一般化することで、自動運転などが実現しつつあります。まさに21世紀の社会基盤を構成する技術と言えるでしょう。

では、このAIは著作権にどのような影響を与えるのでしょうか？それには二つの方向性が考えられます。ひとつはAIが学習データを必要とするとの影響、次にAIがコンテンツを作り出す影響です。今回の著作権法の改正は前者に対応するのですが、今後は後者による影響がゆっくりと浸透してくると思われます。

2. 学習データとしての著作物

ディープラーニングは人間が数百年かかって学習することを数日で学習することもできます。そしてその結果、高度な判断を行うことが可能となります。しかしここで問題となるのは、その学習対象です。通常、学習対象はビッグデータであったり、著作物であったりします。例えば、次の図を見てください。（図2）このモノクロの写真をカラーに変換したのはAIです。AIがたくさんのカラー写真を学習して、モノクロに色を付けました。ここではたくさんのカラー写真がこのAIの学習用のデータとなっているのです。

今回の著作権法改正の最大の目玉は、このような学習対象としての著作物利用を、許諾なしに可能とする、ということです。前述の改正概要の①がこれにあたります。

この内容は著作権者に直接影響を及ぼしませんが、AIの発展にとっては極めて重要な改正であり、将来の日本のインフラ構築にとって必要なものです。また世界に先駆けたものとして注目を集めています。

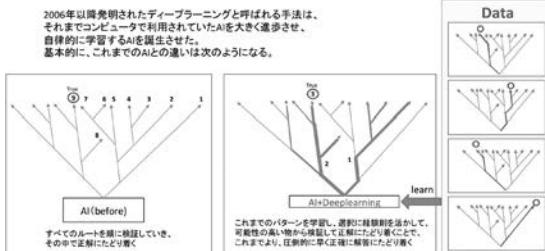
3. AIと教育

次に重要な改正点について説明しましょう。それは②の教育に関する改正です。実はこれもAIと切り離して考えることはできません。

今後AIが進んでいくと多くの職種がAIに置き代えられると考えられています。そして人が担わなければならぬ仕事に、人間の労働力を集中させなければならなくなるでしょう。つまり、AIによって、人が行う仕事の範囲は限定されてくる、ということです。良く将来的になくなるかもしれない仕事のリストが公表されていましたが、これはこのような未来予測に基づいて行われているものです。

しかしそのような就業構成に変わるためにには、教育から変わっていかなければなりません。これまでのように、知識を詰め込む教育では、AI時代の仕事に対応することは難しいと思われます。知識を蓄積したり、その知識から

(図1)AIとディープラーニングとは何か



の判断であれば、人間よりもAIの方が優れている場合が多くなると思われるからです。

このため、指導要領をはじめ、教育の方向も大きく変わってきます。アクティブ・ラーニングと言われる、相互的なより深い学習方法が提唱され、生徒の自主的な思考能力の開発が望まれています。そしてそのような学習方法においては、生徒は自主的に資料やデータを集め、学習していく必要があります。このために、より広い範囲で著作物を利用する環境が必要となるのです。

4. 教育に関する権利制限と補償金制度

まだ段階的ですが、このような学習環境の整備の一環として、著作権法の改正があります。今回の著作権法改正には、デジタル化した資料を授業で利用できる内容が含まれています。そして、さらに著作権者にとって最も大きな変更は、このような教育の権利制限に対して、補償金制度が導入されたことです。世界的に、教育の権利制限はかなり広い部分に認められている代わりに、著作権者への影響が小さくないことから、補償金制度が導入されています。しかし、日本においては、これまで教育関連で教科書以外の補償金制度は導入されておりませんでした。今回の改正を機に、日本においてもこのような制度が導入されたということになります。

ここで重要なことは、補償金制度は著作権者に一定のメリットがある半面、基本的には権利制限が拡大していくことになり、権利は切り下げられている、という現実を認識することでしょう。補償金制度はより広い範囲の権利制限を招く可能性があり、著作権者は慎重にその方向性を見つめていく必要がある、ということです。

この補償金制度について今後の予定を少し付け加えますと、改正法におけるこの部分のみは、来年の1月1日からではなく、3年以内の政令で定める時に施行されることとされています。それまでに補償金を管理する団体を設置し、補償金の金額について教育関係者から意見収集を行い、新しい制度を開始することが著作権者に求められています。現在、30を超える権利者団体が集まって、「教育利用に関する著作権等管理協議会」という団体を設立し、補償金協会の設置準備を行っています。これまで実現したことのない規模の、多くの著作権者が集まって、その意見を集約していくことはもちろん、教育関係者と



(図2)

も良い関係を築きながら、円滑な補償金制度を構築していくことが求められているのです。

5. その他の改正事項

③の障害者への対応については、マラケッシュ条約という世界的な障害者に対する条約を承認したことから、国内法の整備として設けられたものです。世界的にデジタル技術を利用して、障害のある方々の著作物へのアクセス機会の確保が提唱されています。

そして最後の項目④ですが、写真にとって、重要な内容が含まれておりますので、説明を加えましょう。

それはナショナル・デジタル・アーカイブを想定して設けられている各項目についてです。

まず、美術館等で収蔵作品のデジタル化を行ったものについて、館内での利用が可能となりました。これによって、各美術館等では収蔵作品のデジタル化が促進され、データベースへの登録を行う前段階の準備が整うこととなります。

次に著作権者不明の場合の裁判制度において、公的な機関が裁判制度を利用する場合に、補償金の供託を不要とする制度が導入されました。これによって財務的な負担がなくなり、各地方自治体の図書館などにおいて、その収蔵資料のデジタル化と公開の促進が期待されています。

6. 最後に

本当の意味で、21世紀の幕開けと呼べる時代に入ってきた。昭和の中頃に、SF漫画や小説で夢見ていた時代が、訪れようとしています。人間とは何か、が問われる時代になってきました。写真もまた、そのメディアとしての意味を問われようとしています。そして法律は時代を映す鏡だとも言えます。この著作権法改正を通じて、時代の変化を「感じる」ことが重要です。写真はどこへ行くのか。写真家は自ら、問い合わせなければならないかもしれません。

瀬尾太一(せお・たいいち)

写真家 2002年から文化審議会著作権分科会委員（現職）、文化庁各小委員会委員等を歴任して著作権行政にかかわる。（一社）日本写真著作権協会常務理事、（公社）日本複製権センター代表理事・副理事長、（公社）日本写真家協会著作権委員会委員。

平昌オリンピックに見る報道現場の今

池田正一（東京写真記者協会元事務局長、JPS会員）

第23回オリンピック冬季競技大会は、2018年2月9日～25日の17日間開催された。

■厳寒五輪

開会式会場「五輪スタジアム」の座席を利用した記者席に陣取ってからすでに4時間が経っていた。温もりを与えてくれた陽が落ち、空も群青色に変わってきた。気温も徐々に低下、客席最上部で各国旗が風速10メートル以上と思われる風にたなびいていた。この強風に加え、仮設スタンドはあちこちの隙間から風が吹き抜ける。この強風が後に競技日程を狂わせ、競技会場の仮設テントを吹き飛ばすことになるとは思いもつかなかった。

当日はマイナス10度が最高気温という寒さ。「なぜ開会の4時間も前から場所取りを」と思われるだろうが、五輪では取材用チケットが配布されるハイデマンド競技以外は、先着順で取材席の場所取りができるものの、カメラバックや機材を置くだけの占有は禁じられ、フォトグラファー自身がその場所にいなくてはならないからだった。新聞社、通信社が加盟する東京写真記者協会事務局長として、各社に五輪取材のルール遵守を何度も確認していたため、自らが現場で率先する立場だった。

入場する日本選手団もいい角度で見えた。IOCバッハ会長、韓国文大統領、安倍首相ほか各国の首脳や、大会直前に参加を決めた北朝鮮のVIPの姿も貴賓席に。最終聖火ランナーのフィギュアスケート金メダリストのキム・ヨナ選手も予想通りに聖火台わきに姿を見せた。記者席の中ではベストポジションと思われる場所だった。「極」が付くアパレルメーカーの防寒下着を2枚も着こみ、冬山用の装備で耐寒に自信があったものの、開会式もクライマックスになるころ、足指の感覚がなくなってきた。席についてからもう6時間が経とうとしていた。



完全防寒で開会式を撮影するフォトグラファー
(2月8日 五輪スタジアム)

「平昌冬季五輪」といわれるが、競技会場は3ヵ所に分散していた。スケート種目は東部の海岸部にある江陵。アルペンやスノーボードなどは西部の山岳地帯、そしてジャンプやクロスカントリーなどのノルディック系は平昌郊外のスノーリゾートを占有して行われ、メインプレスセンター（MPC）や国際放送センターは隣接する施設を利用した。

2月1日に現地入りした私は、江陵にあるメディア村で様々な手続きを済ませ、MPCへ向かった。標高差が約700メートルあり、江陵とは約5～7度気温が低い。山岳地でもあり大気の放射冷却があったと思われる7日朝、MPC内でスマホに表示された外気温はマイナス20度だった。

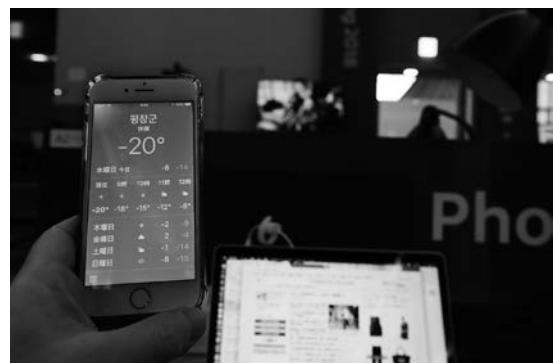
■政治力学

今回はドーピング問題でIOCはロシアが国家として参加することを認めなかった。潔白な有力アスリートは個人資格での参加が認められたものの、これまでの大会では考えられなかつことだ。また大会直前には北朝鮮が参加を表明して選手を派遣、開会式では韓国とともに統一旗を先頭に入場行進した。五輪は「平和の祭典」と形容されてきたが、今大会はどうしても関係国の「政治力学」に利用されてしまった感が強い。

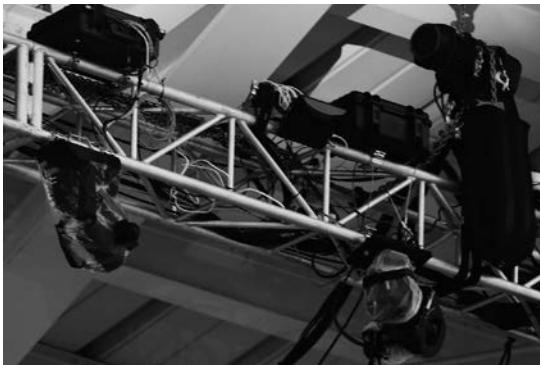
■強風

江陵からMPCへ向かうメディアバス車中からは、山の尾根に設置された多くの巨大な風力発電用のプロペラが目に入る。白く塗装されているためなおさらだ。ブーンブーンと音が聞こえそうな速い速度で回転しており、この地では特に風が強いことを証明していた。

好天ながら強風のため、アルペンやスノボなどの競技でしばしば日程が順延された。またスノボの公式練習中に強風の



外気温マイナス20度を示すスマホのアプリ画面
(2月7日 MPC)



開会式会場の屋根に設置されたロボティックカメラ
(2月7日 五輪スタジアム)

ためめ雪点がずれ、大けがをしたアスリートもいた。アスリートにとって、競技順延でコンディションを再調整するのはつらいはずだ。これほどまでの強風を韓国以外のアスリートが何人想定できただろうか。夜遅くに行われたスキージャンプの各種目決勝では、しばしば強風で中断、シートや毛布などをはおって寒さをしのぐアスリートの姿をテレビ中継画面でご覧になれたと思う。

強風は山岳地だけではなかった。スケート種目の競技場が集中する江陵では14日、海からの強風で仮設の警備テントがなぎ倒され、フィギュアなどが行われていたアイスアリーナでは、メディアセンターとして使用していたテニスコート2面分ほどの広さの仮設テントから退避するよう組織委から指示が出された。

■トラブル

大会開幕後、警備要員約250人がノロウイルスに感染、会場警備には韓国陸軍の兵士が急遽駆り出されていた。軍兵士のチェックはさらに厳しいと覚悟していたが、競技会場入場時に顔を確認するだけで終えていた会場もあったと聞く。現地特派員にはインフルエンザが流行るなど感染症対策の重要性も強く感じた大会でもあった。

限られた人員で多種目を取材する五輪は、移動手段の確保が重要だ。MPCを起点として、各競技会場との行き来は組織委が示していた移動時間よりも3割増しで想定すればよかつたが、韓国の旧正月を迎えた2月15日から3日間は、競技会場を結ぶ高速道路に車があふれた。

日本と同様の帰省ラッシュで、平昌で行われるメダルセレモニーに間に合わない写真記者も続出、特に16日には文大統領がMPCを訪問したため、周辺は厳戒態勢となり、高速道路は大統領が通過するまで1時間以上も封鎖されてしまうなど取材に大きな障害となった。

五輪の成功はボランティアの力をいかに結集するかによるだろう。今大会では宿舎や食事、移動手段など待遇への不満から、ボランティアが2,000人以上も開幕後に辞めたようだ。ほぼ10人に1人の割合だ。私は現地入り直後から、ボランティアのホスピタリティに感心していた。2016年リオ大会でもボラン



フィギュアスケート取材でリンクサイドの場所を抽選する各社フォトグラファー (2月14日 カンヌンアイスアリーナ)

ティアの働きに目を見張る場面が数多くあった。ボランティアを失望させたことが残念でならない。

■機材の進歩

日本のカメラは、五輪開催ごとに機能や画像処理技術が向上してきた。キヤノン、ニコン社製の最高級一眼レフは、画質やピントの精度など技術では最高水準を極めている。ソニーの最新一眼レフを使用する社もあった。あとはその機材をどのように取材に活かすかだ。

今大会では、遠隔操作のボディをこれまで撮影できない角度に設置する海外通信社や新聞社が目についた。高速通信回線が確保され、MPCはもとより本社でモニターを見ながらデスクが操作することも可能になった。「ロボティックカメラ」と表現されるが、撮影角度、ピントなど自由自在に操れるといった。

五輪は超高額の放映権料を支払って権利を得た米大手放送ネットワークNBCを中心としたオリンピック放送機構(OBS)が優先される。取材位置もまずはOBSの中継カメラありきで、残りの場所がスチールフォトグラファーに割り当てられる。フォトグラファーが立つ余裕がなくとも、遠隔操作でカメラを設置できれば、新たな角度やシャッターチャンスが増えることにつながる。今後のスポーツ取材では、さらに対応する社が増えしていくことだろう。

■東京 2020 大会

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会開幕まであと約2年となった。私自身1964年東京大会に始まり、72年札幌、98年長野に続く自國開催4回目の五輪だ。過去3大会は輝くアスリートの活躍が記憶に残る。2020年大会は、組織委員会で大会を成功させるための裏方の一員となった。全力で目標を達成したい。(3月23日記、写真・池田正一)

池田正一(いけだ・まさかず)

1956年5月生まれ。日大芸術学部写真学科卒。34年間の新聞社写真部勤務後、東京写真記者協会に転じ、政治、経済、社会、スポーツ、芸能など取材調整にあたる。2016年リオ五輪、18年平昌五輪では取材調整のため現地入りした。

写真の力が自分を変える

～ノルウェーの刑務所での取り組み～

レポート・撮影：渡邊英昭（JPS会員）



【テーマとなった写真】

(画像提供: Tenk Ut!)

この写真を見て、あなたは何を思うだろう。
それを語り合うミーティングが、ノルウェーの刑務所
では更正教育の一環として行われている。

◆ヴァルドレス刑務所

訪ねたのはノルウェーのヴァルドレス地方、オスロから北東に200kmほどのところだ。刑務所はヨーヴィークという町の中心にあった。

簡単なボディチェックを受け、携帯電話を預けると、すぐにミーティングの場となる図書室に通される。テーブルにはコーヒーとクッキーが用意されていた。

「最初はこれが目当てでミーティングに参加する人たちもいるんですよ」と社会福祉士であり、この刑務所の社会復帰アドバイザーを努めるハンネ・グローネングさんが笑う。

写真を使ってのミーティングは彼女の発案によるものだ。家族療法を専門にするハンネさんは、刑務所での仕事にあたったときも、即座に家族療法を試してみた。ところがそれがうまくいかない。そこで思い当たったのが、受刑者たちが自分の感情を語ることに慣れていないのではないかという可能性だ。

それで一步後退し、家族療法に参加できるだけの「語る力」の準備として、写真を見て思うことを素直に話し合う自



26 の独房から成る 1860 年代に建設されたヨーヴィーク刑務所。向かいは託児所だ。

由参加型のミーティングを始めることにした。

◆テンク・ウート・カード

ミーティングは6～8人で構成され、ミーティングに使うのは30枚ほどのカード。カードそれぞれが1枚の写真から成り、参加者の一人が好きなものを選び出し、それをテーマにそれぞれが語り合う。

選ばれた写真は、私には安心を感じさせた。部屋に帰ってノブを握る。あるいはそこに鍵をかける。そのほっとした感じを思い出させたのだが、受刑者たちはまったく違った。

「独房の鍵を開けてくれると思いたいけど、閉めに来たんだと思うな」

「クリスマスだから外へどうぞ、と今年は思えるよ。ちょうどその知らせを受けたところなんだ」

話がちょっと停滞すると、ハンネさんが促すように、クリスマスのイメージはどんなもの?と質問する。するとまた話が始まる。過去の体験、やってみたいこと、そんな会話が続いている。聞いていると、それだけで参加者みんなの人生の一片が見えるような気がする。専門家からすれば、何らかの治療の必要があるかないかもわかるだろうし、場合によっては別件の犯罪をおわすようなものもあるかもしれない。

しかしそれが情報としてこのミーティングに参加していない医師や刑務官に伝わることははない。ここで話されたことは基本的にここだけでおしまい。話したことはすべてそこに置いていく、というのがルールだ。

だから自由に話せる。そして外で他の受刑者と「語られたこと」を話題にすることもできないから、自分だけで思い返し、自分だけで考える。



ミーティングの場所となる図書室。



カードあれこれ。

それがこのミーティングの最終的な目的でもある。だからカードはこう名付けられている。「テンク・ウート(Tenk ut)」—考え抜く、という意味だ。

◆受刑者たちが自ら作成

このテンク・ウート・カードには二つのバージョンがある。第一バージョンは精神医療での治療ミーティングで使用されていたもので、ハンネさんたちも最初はこれを使用していた。

しかしそのうち、収監者たちから、もっと自分たちの語りたいテーマを題材にしたカードが欲しいという声があがってきた。そうしてできたのが第二バージョンだ。第二バージョンは同じヴァルドレス地方の島にある開放型刑務所の収監者たちが独自に作成した。

キックオフ・ミーティングを立ち上げ、話し合い、どんなテーマ、どんな図柄が欲しいかを大方決め、その中から4人が選ばれて、写真撮影を行った。写真は次にコンピュータで処理され、カードとして使用できるレベルに編集された。すべて収監者たちが自分で行い、地域の専門学校がカメラ機材などを貸し出し、その学校の教師が技術的に必要な指導はしたが、内容については介入していない。

第一バージョンのカードにも写真が使われているが、第二バージョンは写真である必要も特になかったはずだ。開放型刑務所とは言っても、通常活動できる場所は小さな島の中に限られ、そこに収監されている人数も24人に過ぎない。写真を撮ろうとしてもモチーフが限定されてしまうだろう。そこでハンネさんが当時の状況を説明してくれた。

「まずお金がなかったのです。予算はカードを印刷するのがぎりぎりぐらい。カメラも学校から借りられるということだったし、自分たちで撮影するデジタル写真がいちばん安価に作成できるものでした。そして何セットも印刷する必要があったので、それが簡単にできるもの、著作権にも抵触しないもの、という条件を満たしてもいましたしね」

フィルムでの「写真」が頭に強く残っていると見逃しがちだが、デジタル写真になってからは、機材さえあればだが、写真は安価な表現メディアになっている。そのため、限られた予算のプロジェクトであっても、写真を



ミーティングにはハンネさんのほかに、元受刑者のクリスチャンさんがいつも参加する。受刑者たちの感情の動きを見て、不穏を敏感に察知するためだ。経験者でなければわからないことがある。

用いることで実現できることが多々あるわけだ。

またデジタル写真だからこそ、撮影者以外も案を出すだけにとどまらず、編集作業や調整などでも関わることができる。絵やイラストでは描く人が限定される上、その人のタッチや色使いまでを他人が変えるのは行き過ぎた介入・侵害と作成者本人が受け取りやすい。共同作業という面でも、デジタル写真が適切だということを、改めて教えられた感じだ。

◆写真でなければできること

カードの利用者である収監者たちに聞いてみると、「写真だから現実感があるんだ。絵やイラストではそうはいかない」「絵やイラストだと、何か別のことが考えに入ってしまう。写真だとストレートだ」と、写真でなければ話のきっかけとなるような感情の呼び起しがないことを強調していた。

しかしテンク・ウート・カードの写真を見てみると、ちょっと複雑な思いに駆られる。

写真家であれば誰もが、自分の作品が思わぬ方向に解釈された経験はあると思う。ただほとんどの写真家は、自分で感じたことをそのまま見た人に感じてほしいと思って作品を作るだろう。だがこのカードに使われる写真は、逆にそうであってはならないのだ。「結論の限定されないオープンなもの」と感じさせることが決定的不可欠な要素。誰もがそれぞれの感じ方ができるようなものでなくてはならず、ましてや一方に向くようないいところを抱かせるものも少なくない。

キックオフ・ミーティングでは、話してみたいテーマがさまざまに挙げられたそうだ。愛、繋がり、恐れ、孤独…そんなテーマを写真にしたこれらのカードを見ると、モチーフの中には陳腐とか、ありがち、という感想を抱かせるものも少なくない。

しかしそれを見て生まれる感情が実にさまざまということを、ミーティング 参加者や、それを率いるハンネさんたちは知っている。

「ひとつの写真から、どれだけ思いもよらない感想や体験が出て来るかということに、毎回驚かされます。ほとんどの人には懐かしさとか、良い時だったと思わせるような題材でも、人によっては苦しさの象徴だったり、初めての悲しい体験だったりもする。それが受刑者たちに、人はそれなのだ、自分の言葉が通じないことだってあるのだということを体験させることにもなるのです」

このミーティングによる効果は「成功」と評されている。ミーティングに参加した人たちは、この3年間で再犯率ゼロだ。

【プロジェクトについては：

<https://www.fylkesmannen.no/Documents/Dokument%20FMHE/04%20Helse%20og%20omsorg/Rus/310117%20TENK%20UT%20-%20R%C3%98ROSKONFERANSEN.pdf>

<座談会>

創立70周年記念事業 「日本の現代写真」編纂に向けて



出席者：飯沢耕太郎（評論家、「日本の現代写真」編纂委員）、鳥原 学（評論家、「日本の現代写真」編纂委員）、多田亜生（編集者、「日本の現代写真」編纂委員）、田沼武能（常務理事、「日本の現代写真」監修）
司 会：松本徳彦（副会長、「日本の現代写真」編纂委員） 進行：JPS 出版広報委員会

2018年4月27日（金）於：ホテルグランドアーク半蔵門

■ 写真が大きく変貌する時代に 歴史書を出す意義

松本 2020年に日本写真家協会は70周年を迎えます。展覧会そのものは2021年3月から5月にかけて東京都写真美術館で行うことに決まりました。できればそれに先んじて、2020年末に写真史図録を出すことを考えています。まずはその件につき、田沼さんからお願いします。

田沼 日本写真家協会創立70周年を期して協会で刊行する著作物として、1985年以降の日本の写真現代史になる写真集を出版することを理事会で決定し、それに沿って企画を進めているところです。この時代はフィルムからデジタルデータへと、写真が大きく変化していく時期です。そのため歴史的観点から同時に、協会員の観点も合わせて編集していくかと考えておりますので、皆さんのお知恵を借りて進めていきたいと思います。

松本 写真家協会はもともと、写真家の権利を守り、地位を確立することが基本命題でした。これに沿ったさまざまな事業を展開してきましたが、なかでも大きかったのが、1968年の「写真100年 日本人による写真表現の歴史展」です。これは日本に写真が渡来てから敗戦までが約100年というところから、先輩方が撮ってこられた写真を現役の私たちが検証してみようではないか。先輩たちの仕事はなんだったのかを考

える展覧会でした。それまでは、そうした展覧会はなかったので、大変な話題になったと同時に、写真の力、写真の記録性というものに対して大変関心が高まったと、当時の記録に残されています。

その後、45年から70年までの25年間を取り上げた「日本現代写真史展」、さらにその後、第2弾として70年から95年までを「現代写真史Ⅱ」として、展覧会を開催し、写真集を作りました。ですから今回は、第4弾となるわけです。つまり70年の間に4冊の写真史が出来ることになる。そういうものを写真家自らが編纂して表に出していくという意味では、非常に稀有な出版であり、企画であると自負しています。

今回も、歴史を紐解くような恰好で、85年から2015年までの集大成をしようとしています。協会内で編集、調査を手伝っていただける方を声掛けしましたところ、15人近くから申し出がありました。さらに、今日お集まりいただいた編集に長けた外部の方にも積極的に参加ご協力をいただき、開かれた意味での写真史を構築したいというのが協会の考えです。本日は、展覧会と出版に関して、どういうところに視点を置けばいいのか、ざっくばらんに御意見を伺いたいと思います。

飯沢 まず、なぜ歴史展、歴史書なのか。個人的に思い出深いのは、「写真100年展」に際して出版された『日本写真史』です。僕が大学に入学したのが1973年なので、この本が出たのはその前です。大学で写真の歴

史を研究しようと思っても、日本の写真史に関しては、それほど資料がない。唯一頼りにしたのが、『写真100年展』の本でした。そして大学から大学院に行く間に、『日本現代写真史』が出た。この2冊が、当時の日本写真史に興味を持ち勉強していた人たちにとって、導きの書の役割を果たしていたと思います。ということは、これから出る「日本現代写真史1985～2015」は、今の20代、30代、もしかしたら10代で、これから日本の写真史を考えていく人にとっての、大きな手がかりになっていくべきだ、と。今の時代にそういう写真展や本があることで、次の世代につながっていき、循環が生まれる。そういう意味で、非常に大きな意義があると思っています。

また80年代半ばから90年代というのは、写真の200年近い歴史の中で、最も大きな変動があった時代ではないか。端的に言えば、デジタル化ということです。デジタル化が及ぼす影響は、日本の写真史にとどまらず世界の写真史に非常に大きな意味があることなので、それをどう捉えるのか。そして写真家はそれにどう反応して、どのような作品を発表していくかとしていたのか。いろいろな意味でエポックメイキングな出来事の記述になっていくわけですから、責任も重いし、やりがいのある仕事と思っています。

多田 私はほぼ50年前に岩波書店に入り、主に美術書や写真展の図録などの編集を通して写真表現とかかわってきました。いわば井の中の蛙なので、大所高所から写真史の流れなどを語る立場ではありません。ただ、自分のわずかな経験から語ることはあります。

岩波書店では60年代の後半から、奈良の文化財を克明に記録していこうという『奈良六大寺大観』のプロジェクトが立ち上がり、私もそれにかかわりました。そういう形で写真表現と学術的な調査研究がセットになって動き出した。撮影が始まったのが65年で、実際に本が出るのは68年からです。引き続き、旧大和地方の21ヶ寺に平等院と醍醐寺を加えて同じようなプロジェクトを行い、『大和古寺大観』が刊行されました。いずれも指定文化財の建築、彫刻、絵画、書蹟などを撮影したわけですが、ただ記録するというよりは、たとえば仏像の場合は正面、側面、背面、あるいは内部など、人体の解剖所見のような撮り方でした。



1968年 「写真100年展」 池袋西武百貨店

すべてあわせると40年がかりの仕事になったのですが、その間、当然印刷技法も変わっていきます。

プロジェクトが始まった60年代末、カラー印刷に関しては4色分解したものを銅版で1色ずつ刷り重ねる「原色版印刷」、モノクロは平台の「グラビア印刷」が、当時は最高の印刷技術でした。用紙も、その印刷

技法に合うものを選ばなくてはいけない。たとえばグラビア用紙にはエスパルトというお札の原料にもなるという高価な北アフリカ産のパルプ原料で、輸入規制もあり一般にはなかなか入手できないものを一部に滲み込みました。出版界が上向きの時代で、そういうことも可能でした。

原色版印刷は、『奈良六大寺大観』を出し終えた頃にはすでに終焉を迎え、ほとんどがオフセットに切り替わりました。印刷機が残っていても動かす職人がいないという状況でしたので、『大和古寺大観』などを継続して出すためには、すでに退職した人を呼び戻し、機械を動かすこともありました。そうやって世の中がオフセットに切り替わるなか、原色版とグラビアをなんとか維持しながら文化財写真の印刷を進めました。

ちなみに岩波で出版したグラビア印刷の最後は、『田沼武能写真集カタルニア・ロマネスク』(1987年)です。このときグラビア印刷はすでに一般的には行われなくなっていたので、平台の機械を動かすためにOBを呼び戻しました。

飯沢 製版技術も、この20年、30年で大きく変化しましたね。

■ 写真家の営みと 写真を巡る状況の2つの柱

鳥原 僕は65年生まれなので、「写真100年展」の頃はまだ3歳です(笑)。思春期くらいに印刷技術が大きく代わり、たくさんの写真集や雑誌が出た。しかもカラーの高精細の印刷が当たり前の時代に育ちました。ですから写真是新しい世界をどんどん教えてくれるものでもあったけれど、それを意識することなく育っていました。僕自身が本当に写真とかかわるのは、社会人になり写真弘社という会社に入り、そのギャラリーを担当するようになってからです。24歳くらいでしたので、89年でしょうか。

飯沢 ちょうど写真の歴史150年くらいの頃ですね。

鳥原 翌年、東京都写真美術館の一時施設ができるなど、写真シーンにすごく活気があった。そうした動きのなかで、自分が知っていたよりもずっと広い写真の世界があることに気づかされていました。同時に写真弘社は古い会社でしたから、展覧会を担当させてい



多田亜生 氏

ただくなかで、古い写真や古い写真家の方など、広く写真を見るようになった。そのうちデジタルカメラの登場で、写真の世界が大きく変わってきます。

ところが写真美術館の写真史的なまとめを見ても、断片的な感じがして、よくわからないというのが正直なところでした。やればやるほど、わからない。ある時代までは、写真雑誌に掲載されていた作品が写真史として語られることが多かったように思いますが、しかしそれは自分が知っている世界とはかなり違う。たとえば多田さんがかかわっておられたような文化財を記録する写真なども、実は自分の生活や社会的な視野に大きな影響を与えていたということが、だんだんわかってくるわけです。そうすると、もう少し広い視点でものを見たいというふうになってきた。そこから、写真の現代史的なことにかかわり始めたというのが自分の経緯です。

自分としては、記念写真的なものや、研究資料的なもの、医療的なものなども含めて、写真史というものを考えて、流れをみつけていきたいと思っています。ただ、これはなかなか難しいだろうな、という実感はあります。東京都写真美術館でコレクション展が最初に開催されたとき、4章に分けていましたが、最終章が現代の写真で、タイトルが「混沌」でした。でも、はたして混沌なのか。そうではなく、いろいろな流れがあってそれが縦横に結びついているけれど、複数のラインを見つければ戦後史というものがある程度わかるのではないか。そんな思いがあります。ですから皆さんの考えを伺ながら、もう一回、考え方を直したいと思っています。

飯沢 再構築ということですね。

鳥原 そうです。これまで中公新書で『日本の写真史』上下巻を出すなど、そういう仕事はさせていただいたので、なんとかその成果を活かしたい。皆さん同じだと思いますが、若い世代にもっと今の時代の写真を残しておきたいと。昨今、美術館で展覧会を開いたりアートフェアに出すといったことが若い写真家の目標になっていますが、もう少し足元を掘るとすごく役に立つことがたくさんあることを、ここで示せたら、という思いがあります。

松本 私は「写真100年展」もその後の展覧会にも、かかわってきました。なぜかというと、「今」を考えるためにには、我々は先輩たちの仕事をもう少し知る必要がある。先輩たちの仕事を下敷きにさせてもらうのも大事なことではないか、と考えたからです。それをやっている間に、美術館を作らなくてはいけないという方向にも向かった。また、写真保存センターで、写真原板も集めています。

一つ一つの事業は、断片的に見えるけれど、ある線上に乗っている。なぜかといふと、日本写真家協会といふのはプロの写真家の団体ですから、撮るのが本筋です。この本筋の部分に関して、先輩たちも含めてやってきたことは著作権の確立です。ところがデジタル化によって、この問題はさらに複雑化しています。膨

大な量の撮影が可能になったことで、写真家自身が自分の著作物を把握しきれないし、整理ができない。これは、写真本来の使命である記録というものを考えたときに、せっかくの財産を喪失しかねないことです。ここで一寸足を止めて、考えてみることも大事ではないかと思っています。

飯沢 確かにそれも大事な問題です。ただ、今回のプロジェクトの場合は、ある時代を区切って写真の歴史を振り返ることによって、そこからいろいろな人がいろいろな材料を引き出していく、ということはいいのではないか。なぜなら、今は「この時代の写真はこんな形だ」と、統一した見解を打ち出せるような時代ではないからです。

さきほど『混沌』という言葉が出ましたが、混沌というよりは多層化。つまりレイヤーが錯綜している状態ではないか。一つのレイヤーを見ればそれなりの流れがあるし、別なレイヤーには別の流れがある。それが複雑に絡み合いながら多層化している状態だと思います。ということは、今回、歴史を編むにしても、「こういう人がいて、こうなって」という直線的な歴史書はほぼ不可能だろうと思います。だから材料の塊を作るというふうに、ある程度割り切ってもいいと思います。

写真家協会が事業を展開するからには、写真家の営みは絶対はずせません。写真家が実際に写真を使って表現していくとしている表現の営みは、写真のなかでも最も密度とクオリティーが高いものであることは間違いない。その業績を80年代半ばから現代までしっかりと跡づけていくのが一つの柱ではないか。もう一つは、現代における写真の広がりは写真家の枠を超えて大きくなっている。みんなスマホで写真を撮ってインスタグラムやツイッターに出していく時代のなかで、写真を取り巻く環境は大きく変わっていました。これにも目配りをしなくてはいけない。

この二つの要素をどう統一するのかを考えたときに、大雑把に、口絵と年表という方法があるのではないか。口絵では写真家たちの作品を取り上げて、しっかりとその人の作品の世界を紹介する。年表のほうは、複層化し多層化している状況になるべく救い上げていく。いくつかのラインが含まれる年表を作り、その時



飯沢耕太郎 氏



鳥原 學 氏

代、その時代を見していくと、流れがつながっていくのではないか。もちろんそれらを総論的にまとめる文章も必要ですが、大きいうとこの2本の柱がしっかりと固まれば、意味のある本になっていくと考えています。

松本 我々にできることは、資料の提供ですよね。

飯沢 実際、写真家協会から出ているこれまでの本もそうだったと思います。僕らそれらを見た世代は、そこから発見をして、各々がそれなりに深く掘り下げていった。いざれにせよ、すべてを解き明かすことは無理でしょう。

■ 「誰でも撮れる」時代における写真家の営みとは

鳥原 昭和11年に「アサヒカメラ」が100年後に写真はどうなるか、多くの人にインタビューした際、安井伸治は「写真家という呼称はなくなる」と答えています。カメラがものすごく小型化され、焦点の問題も解決され、現像は気体か何かを利用するようになる。すなわち、誰でも写真が撮れるようになる。芸術は100年でさほど進歩はないかもしれないけれど、ただ楽しみなのは、天才みたいな人が出てきて、その人が自分たちの見方を教えてくれることだ、と。昭和11年にこういうことを書く人がいたのが驚きました。

それから80年あまりたちますが、今回の出版物は、安井伸治に対する一つの回答になるのかなと、個人的にはその思いもあります。誰もが写真を撮れる時代になって、それが新しいメディアを産んだ。そういう意味では安井伸治が言っていることは当たっているけれど、本当にそれだけなのか、と。

松本 この時代はデジタル化も含めてカメラの進歩も大きいですね。

飯沢 カメラの進歩というより、カメラの変貌と言つてもいいかもしれません。とにかく電話とカメラが一体化するなんて、それこそ安井伸治の時代には想像もつかなかつたはずです。

鳥原 調べて面白いなと思ったのですが、プリクラが登場したのが84年。女子高生がシールを集めたり、写真をコンパクトカメラで撮っている状況があり、こ

れを合体させようという発想からプリクラができた、と。2000年にボーダフォンが最初のカメラつき携帯を発表しますが、その発想の原点は、持ち歩けるプリクラだった。そのボーダフォンのカメラには小さな鏡がついているので、自撮りもできる。だから極論すれば、女子高生がカメラの歴史を変えるきっかけにもなったとも言える(笑)。サブカルチャーが本道になっていく、という流れかもしれません。

飯沢 そういう部分も、論文としてしっかり書いた方がいいですよね。「被写体としての私」というのも、大きなテーマなので。

田沼 今や、皆さんなんでも記録するようになりました。僕らが写真を撮りに行くと、年配者の方々も前にバッと出てきてスマホで写真を撮る。ですからカメラの前に林のごとくスマホが並ぶ(笑)。今、新聞の投稿写真の7割がスマホによるものです。最初の頃は、スマホで撮影したものは、印刷する場合せいぜいカビネサイズくらいまでしか引き延ばせませんでしたが……。

鳥原 今は1200万画素くらいあるから、普通に印刷に使えます。

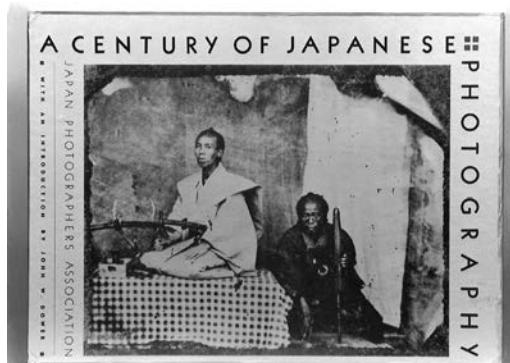
田沼 スマホの普及とともに、もう一つ、今の時代の特徴があります。写真は大きく言えば、実用的なものとアート的なものと二手に割れてきています。いまや窓変時代。窓変した焼き物がそうであるように、写真も窓変が珍重されている。やっぱり僕は、写真というのは生活に根差したものであり、最後に残るのはそこだろう、と考えています。あとは時代とともに変化していく。そのときはすばらしいと持ちあげられても、時代が変われば違うものが持ちあげられる。これは致し方のことです。

写真家が考えるのは、時代の流れでいくのか、写真そのものの価値観でいくのか、その二通りがある。変わっていくところだけを取り上げると、写真の大変なことがわからなくなる。やはり写真は時代を撮っているという部分を、きちんと残していくかなくてはいけないと思います。

飯沢 根っここの部分ですね。



1971年 『日本写真史 1840~1945』



1980年 『a Century of Japanese Photography』 PANTHEON N.Y.

田沼 これは時代が変わっても、一番大事なところです。写真は『今』は撮れるけれど、過去は撮れないわけです。今、撮ったものを、きちんと残していく。そこを大事にしていくことも考えなくてはいけない。時代の流れだけで追っていくと、肝心なところがなくなりかねない。すると、写真そのものが消えかねない。安井伸治の言葉ではないですが、時代とともに消えていき、何もなくなるのでは、やっぱり悲しいですね。写真家は一生、写真に思いとエネルギーを注ぎこんでがんばっているわけです。写真家協会の会員は、スターもいるけれど、スターでなくともがんばっている人たちもいて、その人たちが協会を支えていると僕は思っています。そこも、ないがしろにしてはいけない。そういう観点でこの本を作りあげていくことが大事ではないかと僕は思っています。

飯沢 まさにその通りで、地味だけどいい仕事をしている人はたくさんいる。一握りのスターだけの写真史にしてはいけないと思います。

■ 多元化する『記録』の意味や展覧会のスタイル

松本 70周年よりも早めに本ができるほうがいいと考えているのは、それに合わせて展覧会ができるからです。かたや著作物にし、かたや展示物にしよう。そういうことです。

飯沢 写真家のリストを見ても、この20年、30年でいかに写真の世界が多元化してきたのか。それくらい差がある人たちの写真のあり方が含まれている。田沼先生がおっしゃったように、根っここの部分はなんなのか、こういう本を作るときに一番考えなくてはいけないと思います。その根っここの部分は、最初の写真史のときは『記録』という言葉で表したけれど、それがそのまま今の時代に適応できるかというと、ちょっと難しいところがある気がします。

もちろん当時も、『記録』にはいろいろな意味があったと思います。一つはドキュメンタリー、つまり社会をドキュメントする。もう一つ、『日本写真史』の

なかに東松照明さんや内藤正敏さん、中平卓馬さんなどが登場しますが、彼らが考えている記録はちょっと違っている。もう少し私的な記録が、あの時期にクローズアップされたと思います。その二つの記録のあり方も、今の時代、どんなふうに変化して、どういうふうに今も続いているのか。あるいは変質したのか。記録という言葉は確かに写真の表現の根源的な部分ではあるけれど、それも1968年の時点で考えられていた記録のあり方と、2018年の段階で考える記録のあり方は違ってきているから、それらも含めて考えながら、むしろこの作業を通じて浮かび上がる必要がある。

田沼 記録するにしても、表現の仕方が変わってきます。なぜかというと、デジタル化のおかげで誰が撮つてもある程度よく写るようになってきた。だから、そこで個性を出しながら表現していくという形に変わらざるをえない。

鳥原 一つには、画像から情報として読み取れる記憶がある。もう一つは、その情報を誰がどういった視点から記録したのか。1968年の『写真100年』のときは、まだ戦争の記憶がある時代です。そのなかで、一方では高度成長があり、企業の資本で写真がそちらに傾いていくことや、政治的な意図で記録性がゆがめられていくことに対する反発があった。それが私的な記録という、どちらかといえば記録性をもう一回自分の手に取り戻すための歴史のまとめ、としても読めます。今の時代だと、#Me Too運動のように、女性から見た記録という視点もあるかもしれません。

飯沢 今はあまりにも個人的な記録が肥大化してしまい、ある意味平均化したことによって、インパクトを失っている。そこで東日本大震災以降、もう一回、パブリックな記録のあり方に戻ろうという搖れ戻しもありながら『記録』の意味そのものが変化しつつある。

田沼 紛余曲折しながらも、どこに進んでいくかということを大事にしなくてはいけないでしょうね。目の変化だけに捉われてしまうと、目標を失ってしまいます。



1975年 「日本現代写真史展」 池袋西武美術館



1977年 『日本現代写真史』



2000年 『日本現代写真史 1945~1995』

飯沢 生活、あるいは性に根差した提言も、大きな意味を持ってくるようになる。そこは基本的なこととして記録の根源として考えつつ、さっき言われたような窓変みたいな部分も広げていく。今の若い子たちも、リアルな面は持っているので。

鳥原 最近、富岡畦草さんの記録写真などが再び注目されているのが興味深いですね。富岡さんは、3台のカメラで同じところを撮ったりしている。また、小川光三さんの本で印象的だったのが、仏像などの修復に参加してその記録を撮ったことが、自分の仏像の理解を変えた、と。そういうことに参加することで、昔の人の視点を今の感覚に活かすこともできる。

そういうえば最近流行っているのが、蚤の市で売っているような古い写真を組み直して自分の表現として提示していくファウンド・フォトの手法。今の人も、過去から必死で何かを探そうとしているように思います。

松本 先ほど、展覧会の前に本を出版したいと言いましたが、展覧会についても工夫が必要でしょう。かつては写真の展覧会と言えば、ただ壁にパネルを並べるだけだった。しかし今の時代に、はたしてそれでいいのか。本である程度、概要を知ってもらい、時と場合によってはインスタレーションも含めた展示を考える必要があるのではないか。

田沼 一部、そういうものがあってもいい。全体としてのバランスを考慮しつつ、インスタレーションなどの展示方法も排除しない、という考え方でいいのではないか。

飯沢 展覧会の形式そのものが時代とともに変わってきたのは、まさにその通りです。インスタレーションが一般的になったのも、90年代以降でしょう。空間全体を活かして、壁だけではなく、ときには床や天井も含めて展示をする。また、最近の写真美術館の展示などを見ていると、たとえばアルバムを紹介する際、複写してプロジェクトションして、ページをめくるように見せる方法なども取り入れられています。

今は複写の技術が進み、フェーズワンの1億画素機を使うと、写真雑誌に掲載されたものを複写して引き延ばしても、プリントと遜色ないような状況になってきています。ですから、必ずしもプリントをフレームに入れて並べるやり方に固執する必要はないし、もう少し立体的な展示も充分考えられます。かといって立体的なものだけにしてしまうのもどうか、と。オリジナルプリントを前にした時の初発的な感動も大事ですから。

いずれにせよ展覧会はスペースが限られているから大変ですね。それに、本を作つてみるとわからない部

分もある。本はおそらく、カタログ的な役目も果たすことになると思いますから。

田沼 展示方法に関しては、作品を見てから考えたほうがいいと思います。やはり時代の流れもあるし、作家によっては見せ方も変わってくる。それを排除しないという考え方で、最終的にどういうふうにまとめるか、徐々に詰めていけばいいのではないか。



松本徳彦 副会長

■ メディアの変化と国際化の流れ

松本 90年以降は、国内でなく海外への広がりも無視できません。取材対象という意味だけではなく、作品として海外に広がっていく。今までにない動きが生まれています。

鳥原 74年にニューヨークのMoMAで開催された「ニュー・ジャパンーズ・フォトグラフィー展」から始まり、日本の写真家がまとまって展覧会をするケースも増えているので、その動きも押さえておいたほうがいい。

飯沢 昨今、日本の写真家に対する海外の興味は高まっています。外国から日本に来て、「この写真家」とピンポイントで指す人の数が増え、しかもかなりマニアックです。ひとつには、インターネットによる情報のせいもあるでしょう。また、研究者も増えました。日本の写真の歴史について、大学院レベルで研究する人が少なくない。たとえば、イギリスのテート・モダン美術館の写真部門のキュレーター、レーナ・フリッキュの下にいた女性が、日本の戦後写真史に関する研究をしている。我々日本人が取り上げていなかった面白い視点で、写真も集めています。

鳥原 海外の大学や美術館は、かなりお金をかけて資料を集めますからね。相当、持ち出されている。最近は日本の写真に関して、かつての浮世絵みたいなことが起きています。

飯沢 70周年展で扱う時代の写真表現に関して、われわれがどう考えて、どうメッセージを打ち出すのか。海外の目も、意識せざるをえない。

松本 世界を見回しても、大学や研究者などではなく、写真家たち自身が写真史の本を作るるのは、稀有なことだと思います。それを海外の人たちがどうご覧になるかも、知りたいところです。

飯沢 そのためには、著作物に関しては、バイリンガルとまではいかなくても、最低限の英語情報は必要ですね。作品のタイトルも、いい翻訳家が出てきているので、心配ないでしょう。また最近は欧米だけではなく、アジアも重要です。僕もかかわっている「写真集

食堂めぐたま」に関する取材も、圧倒的にアジア各国が多い。香港のクルーが来たり、韓国の写真家が訪ねてきたり、中国、台湾、韓国の人たちの日本の写真に対する関心はかなり高まっています。

鳥原 今回のプロジェクトを手伝ってくれる候鵬暉さんは、日大の博士課程で日本の戦後の写真展をテーマに博士論文を書いています。

飯沢 そういう人が増えることで、いい意味で日本の写真の歴史が客観化されていく。それは、ポジティブに捉えたほうがいいと思います。

鳥原 日本にも、たとえばアンリ・カルティエ＝ブレッソンの研究家などがいるわけですから。お互い、学び合うことが大切ですね。

飯沢 そういう時代になってきましたね。

■ 印刷メディアは今後どうなるか

鳥原 時代の変貌のなかで、カメラ会社が儲からなくなっことも、この時期の大きな流れだと考えています。カメラ会社の広告があつてこそ、写真雑誌が成立していた。そこにはアマチュアの投稿もあれば、プロの連載もあり、カメラの情報もあった。いわば写真の結節点でもあったわけです。しかしカメラ会社の広告費が下がったことで、2005年頃から、その構造が崩れつつある。今回のプロジェクトのようなまとめ方ができるのも、今まででは、一つには写真雑誌があったからという面もあるかと思いますが、これからそういうことがどうなっていくのか心配になります。

松本 言ってみれば、今後の写真発表の媒体がどうなるか、ということです。

多田 出版社をとりまく状況も大きく変わり、本がなかなか売れなくなっている。そこに我々も直面しています。

鳥原 雑誌全体を見た時、97年がピークで、それから落ちていった。今はピーク時の3分の1くらいしか雑誌が出ていません。

飯沢 印刷媒体としての写真雑誌ということでいうと、なかなか厳しい状況にあるのは事実です。しかし僕の実感としては、印刷物としての写真は残っていくと考えています。というのも、写真集という形が持っているメッセージを伝える力はすごく大きなものがある、ほかの媒体では取って代わることができない。写真集というジャンルに関しては、多様な大きさや形があり、いろいろな情報が詰め込まれている。仮にデジタル化したところで、その代替物にはならない。まったく意味が違います。その面白さは、僕らの世代は充分知っています。では、次の世代まで伝わっていくのか。その点に関して、実は僕はけっこう楽観的です。

実際、写真集は若い人たちにかなり広がっています。

鳥原 DTP化して以降、印刷の製作費の低減化が相当進んでいますからね。昔は何年もかけてお金を溜めて写真集を自主製作する人がいたけれど、今は半年くらいのアルバイト代でも作れますから。

飯沢 手軽な自己表現のメディアとして、いわゆる自主出版写真集というものが残っていく。このジャンルは世界的に見ても成立するはずです。

鳥原 尾中浩二さんという写真家に訊いたら、インターネットでかなり写真集が売れる、と。今、出版社で写真集を出すとなると、刷り部数は300部くらいです。ところがインターネットを通じて販売すると、各国に200名ずつくらいディストリビューターやファンがいて、全体で3,000部くらいは行くそうです。

飯沢 インターネット時代になり、写真集流通のあり方も変わってきています。昔は国内市場だけでしたからね。60年、70年代に日本人がすばらしい写真集を作りましたが、かなり古書価格が高騰しています。

鳥原 海外で復刻版が出ているものもありますね。

飯沢 そういうことも含めて、この先、印刷媒体がどう変化していくのか。まだ見えないことはたくさんあります。しかしこの時点で、多様化している写真の状況がどうなっているのか、跡付けておくことは重要です。それが希望につながる可能性もあります。

鳥原 もう一つの流れとして、印刷媒体が衰退していくのに反比例するかのように、個人のイベントを撮る写真家が増えた。いわゆる子供向けスタジオをはじめ、ウェディング写真、生前遺影などを生業とする小さなスタジオが、すごく増えています。ですからマタニティフォトも含め、人生の営みはプロの写真家が記録するような新しい写真館の時代が来ているような気がします。

飯沢 そういう時代における写真表現の位置づけは、おのずと変わってくるでしょう。しかし、新しい面だけを追ってもしょうがないので、ある程度、正統的に写真を表現手段としている写真家をきちんとフォローし、それを柱にすべきかと思います。

田沼 それをやらないと、写真家協会で本を出す意味がなくなりますから。

飯沢 柱を据えて、枝葉の部分を広げていけばいいのではないかでしょうか。

田沼 大変な作業になると思いますが、我々がやらなくてはいけない大事な事業です。普通の出版社ではなかなかできないものを作り残していくというのと、写真家協会の考え方なので、皆さんのお力を借りしながら進めていきたいと思います。

松本 本日はどうもありがとうございました。

(構成／篠藤ゆり、撮影／出版広報委員：小城崇史)



笹本恒子写真賞 Tsuneko Sasamoto Photography Award

第2回受賞者決定

18年間カンボジアの子どもたちを撮り続けた足立君江さん

平成28年に「笹本恒子写真賞」を創設し、有識者の推薦により実績のある写真家を推薦いただき、その活動を支援する賞の第2回「笹本恒子写真賞」は、4月16日、JCII会議室で椎名誠（作家）、大石芳野（写真家）、熊切圭介会長の3氏により選考を行い受賞者を決定しました。

受賞者の足立君江さんは「18年余にわたって、カンボジアの農村地帯を訪ね、戦乱で荒廃した村々で目を輝かしながら働く子どもたちの、未来に希望を託す姿に感動してまとめた一連の写真集や写真展での優れた表現に対して」高く評価し贈ることになりました。

授賞式は12月12日（水）、アルカディア市ヶ谷で行い、受賞記念写真展を12月20日（木）～26日（水）、アイデムフォトギャラリー「シリウス」で催します。



「魚とり 60号道路」 2006年



「アンコール小児病院待合室」 2005年



受賞の言葉

何かの写真の賞に縁遠い私でしたので、「笹本恒子賞」という偉大な賞のお知らせに本当に驚き嬉しかったです。笹本さんは写真界の偉大な先輩であり、女性としても素敵なお生き方に魅力を感じ、勇気をいただいてきました。カンボジアは私にとっては瞬く間に18年間で、子どもたちと共に人生の一時期を生きてきた気がします。どうしてという疑問と数々の出会いが、当たり前のようにカンボジアに通う原動力になりました。同時に私は何ができるか、写真とは何かを考えさせられた日々でした。今改めて、お世話をなった皆様に感謝し、決して一人の力ではなかったことを感じています。これからは笹本さんの賞に恥じぬように、一層努力をしていきたいと思います。

足立君江（あだち・きみえ）：1996年フォトクラブ「MEW」に参加。伊奈喜久雄氏に師事。2000年より18年間カンボジアを撮影。毎年「カンボジアローカルNGOスナーダイ・クマエ孤児院の絵画展＆写真展」で写真を展示、さまざまな形式でトークを行う。その他 講演活動、カンボジア撮影ツアーなどを実施。



「ジャノー10歳
コローサン村」
2006年

第2回「笹本恒子写真賞」選評

創設されたばかりのこの賞について、選考委員の間で最初にしばらくの論議があった。主題となったのは、簡単にいえば、この賞がどういう性格を持ち、将来どういう方向の写真および写真家を評価していくのか??ということであった。はつきりした強硬な意見も出ないままに、なんとなく論議の中でそれらのテーマを模索して行こうという気配となり、そこから頭を切り替えて今回の候補作の中から、どこにその焦点を当てるのかという論議になって、次々に具体的な論評が交わされ、最終的に本作品、および作者が、さしたる離隔もなく選考委員一致した受賞作となった。

足立さんの本作品はカンボジアの子どもたちが主人公であるから、ところどころに出てくる大人がそこから語っていることはあまり聞こえてこない。したがって両作品に横溢しているのは、まさしくカンボジアの今現在の子どもたちのありのままの日常であり、そこから語りかけてくる様々な表情である。特に届託のない子どもたちの笑顔は、この国の悲惨な歴史をついうつかり忘れてしまうような愛らしさで、あっけらかんと明るい生きた表情に満ちていて、なんどかうらやましいほどだ。どの顔、どの場面を見ても、共通した懐かし

さを感じるのは、おそらく昔の日本もみんなこんなふうだったのだろうなと思わせる、郷愁に溢れあどけなさに満ちた群像である。よく言われるのは、途上国の写真ルポなどで、忘れられた日本を想起させられるような??という、まあ単純に共通した見る者を刺激する感情である。

この作品のすばらしいところは、子どもたちのまことにあっけらかんとした群像や笑顔の背景に、やはりあまりにも重いボルボト時代の残酷な虐政の傷跡が、注意して見ていくと、じわじわとそれらの写真から語りかけてくることに気がつくことであり、写真は文章などでなにもそういう感情を匂わせるようなことはしていないけれど、作者のレンズを通したまなざしの集積は、まぎれもなく傷ついで泥だらけになったこの国を、新しい力で立て直していく、という子どもの息吹の集大成になっている。

私たちは意識する、しないに関わらず、みんなそれぞれそのことを胸に重く噛みしめ、ひとつひとつのこの国の歴史の健全な復興を担う大勢の子どもたちの熱情を、知らず知らずのうちに感じているのだろう。すばらしい作家とその作品が第二回目の受賞作になったことに安堵している。

記憶より記録

～最近の写真集に見る～

河野和典 KOUNO Kazunori (編集者)

近年、インターネットの急速な発展に押されてほとんどの印刷物の売れ行きが良くない。もちろん、そこそこに発行部数を伸ばすものもあるいは突出してベストセラーになるものもあるけれど、今号では「記憶よりも記録」と題して、部数をとやかくいう前に写真の原点とも言える写真の記録性を發揮した貴重な写真集を探り上げてみたい。

4点セットのアーカイブ

印刷物は写真同様に貴重な記録媒体である。特に写真集は世の中を、いや森羅万象を記録するうえで貴重な存在である。昨年、写真評論家の飯沢耕太郎さんと写真史家の金子隆一さんが植田正治のこれまで発表されながら写真集に収録されてこなかった作品を写真集に収録しようとしたら原板フィルムが見つからず、やむなく写真雑誌をはじめとする印刷物をスキャンして編集し出版したという。これからも分かるように、印刷物は写真をアーカイブするうえで、写真の原板(フィルム)、プリント、デジタルデータについて、その4点目のセットとして欠かせないものである。

写真の貴重な記録性を重んじて、フランスやアメリカをはじめとする多くは、国をあげてアーカイブ(保存記録)に取り組んでいる。2年前に来日したメキシコの国立写真美術館館長のフォワン・カルロス氏は講演で、現在写真美術館では100万点のアーカイブに取り組んでいると発言されていた。また、やはり2年前埼玉県立近代美術館で開催されたジャック=アンリ・ラルティエ「幸せの瞬間をつかまえて」展では、コーディネートした佐藤正子さんによれば、フランス政府の肝いりでできたラルティエ財団が一切の作品を管理していて、本邦初公開となつた多くのカラー作品も財団の協力で展示することができた、と言われていた。それに比べると、日本では残念ながら、写真を国の貴重な文化財として、システムチックにアーカイブに取り組む姿勢はいっこうに見えてこない。わずかに見えるのは、本協会の「写真保存センター」をはじめ、東京都写真美術館や、全国各地の美術館、博物館の独自の取り組みによるものだけである。

ちょっと前置きが長くなつたが、今号の本題に入ろう。スペースの関係もあるので、3冊の写真集に的を絞って

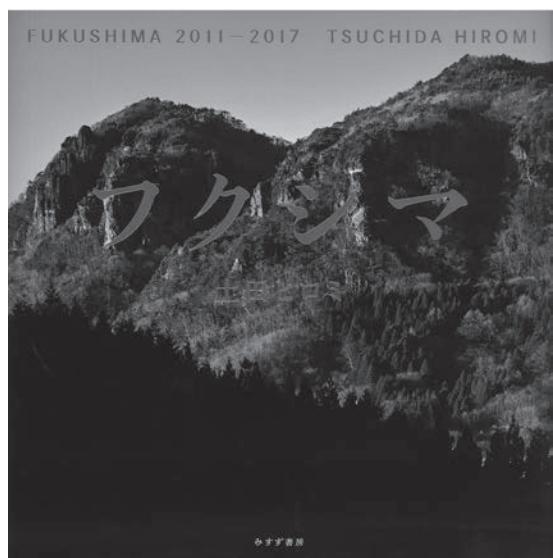
紹介させていただく。

◎原発事故の現場を淡々と記録

土田ヒロミ『フクシマ』

(2018年1月、みすゞ書房、定価12,000円+税)

土田ヒロミ写真展「フクシマ」が、2014年ニコンサロン特別企画展 Remembrance3.11として開催されたとき、この写真展の思いを作者に尋ねたところ、即座に「フェイクだよ」という答えが返ってきて驚いたことを思い出す。そして今回の表紙タイトルに金文字をあしらった大判豪華写真集を手にとって再び、「何だこれは、不謹慎な」とまず思ったのだが、2011年春から2017年秋までの福島第一原子力発電所を中心に据え、定点撮影を交えた大部(だいぶ)の写真集から見えてきたものは、2020年の東京へのオリンピック誘致で安倍総理大臣が海外メディアを前に福島の原発事故の処理を聞かれて、「アンダー・コントロール」と言い放ったこととは対局を示すものであるということだ。「自然と人間の共生が崩壊していく現場の記録」(写真集帯)とあるように、ここには事故の悲惨さとか酷たらしさを通り越して、静かだがじわじわと浸食していくような「これまで味わったことのない恐怖」と言った



ものを感じさせずにはおかしい写真の数々がある。それはまさに作者の言う「(問題ないは) フェイク」であり、原発を痛烈に風刺するものである。

タイトルの金文字は、現状にたっぷりと皮肉を込めた「バベルの塔」と言えるかも知れない。

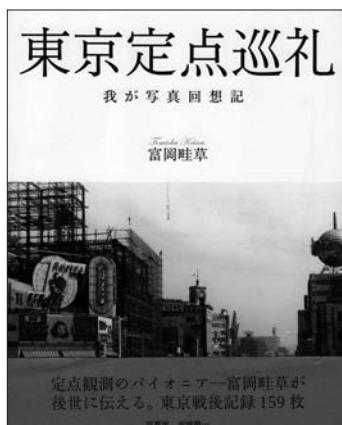
◎定点撮影による記録写文集

富岡畦草『東京定点巡礼 我が写真回想記』

(2018年4月、日本カメラ社、定価2,200円+税)

1926年生まれの富岡畦草(とみおか けいそう)は、雑誌『サライ』2017年のインタビューに答えて、1951年、人事院広報写真室勤務時代に作家の新田次郎から定点観測による気象観測の話を聞き、それをヒントに定点撮影をはじめたという。1958年には誕生した長女の成長記録を毎日撮りつけ、雑誌『太陽』に「母と子の1000日」として掲載され第1回日本写真協会賞新人賞を受賞している。いわば定点撮影のパイオニアとも言える人である。

今回上梓された『東京定点巡礼 我が写真回想記』には、「新宿・代々木・池袋」「渋谷・赤坂・六本木」「日比谷・皇居」「日本橋・東京駅」「銀座・築地・佃」「新橋・霞が関」「秋葉原・神田」「上野・浅草」「羽田・田町・蒲田・品川」といった東京の街の交叉点、駅前を中心とした定点が1954年から2016年まで時間差を置いて克明に写真と文章で記録されている。「定点写真は撮り繋いでこそ、その意味に価値を重ねていきます」(『日本カメラ』2018年5月号)と語り、「富岡畦草」は次女・三智子が二代目、その娘で孫の碧美が三代目を襲名し、現在は3人の富岡畦草によって定点撮影がつづけられている。



◎生き生きとした時代を生き生きと伝える

石黒健治『青春1968』

(2018年5月、彩流社、定価3,200円+税)

1968年というと、2013年に東京都写真美術館で開催の「日本写真の1968」展があった。その企画概要には「1960年代後半は、(略)近代的写真が構築した『写真』の独自性とそれを正当化する『写真史』への問いかけが始まりました。(略)日本では『写真』という枠組みがどのように変容し、世界を変容させていったかをたどり、『写真とは』『日本とは』『近代とは』をさぐります。」とあり、出品作家として東松照明、柳沢信、森山大道、中平卓馬、高梨豊、篠山

紀信、桑原甲子雄などがいて、出品資料として『カメラ毎日』『アサヒカメラ』『朝日ジャーナル』『デザイン』、当協会の「写真100年—日本人による写真表現の歴史展」関係資料などが展示された。いわゆる多くの写真家の眼を通して多面



的にある種、俯瞰的に見た「1968」だったが、これに対して、石黒健治『青春1968』は当然ながら石黒個人の眼による「1968」である。ここに登場する人物は、寺山修司にはじまって唐十郎、根津甚八、カルメンマキ、戸川昌子、川端康成、吉永小百合、太地喜和子、水上勉、北杜夫、井上光晴、生島治郎、大岡昇平、岸田今日子、福田恒存、遠藤周作、安部公房、千田是也、岩城宏之、中村絃子、永六輔、萩本晴彦、野末陳平、坂本九、藤圭子、緑魔子、釜本邦茂、五木寛之、小沢昭一、野坂昭如、篠田正浩、羽仁進、大島渚、高倉健、藤純子、第十七代目中村勘三郎、岡本太郎、今村昌平、川久保玲、コシノジュンコ、つけ義春、横尾忠則、小澤征爾、石元泰博、三島由紀夫、丸山明宏など、約130名。いずれもこの時代にその名を刻む人たちだが、ページをめくる度にジャンルを超えた次元へ飛び、見る人それぞれの思い出へ誘う——その“ごった煮”状態の写真による時代のアリティがすごい。

本書は1968年『アサヒカメラ』に連載された「若者のシンボル——クール時代の若き獅子たち——」を主軸にまとめられ、連載時の作者コメントも併記されている。

五木寛之による帯と巻頭の寄稿文には、「ここに切り取られたどの人物も、時代の漂流者、デラシネたちである。マスコミの表皮を疾走しつづけの一瞬の光芒にきらめいた群像だ。その一瞬に永遠がある。石黒健治さんは、'60年代の人びとの写真と共に、それをみずからからの墓標として上梓した、と言っていい。」とある。

* * * *

以上の3冊をはじめ多くの写真集を見ていてまず頭に浮かぶのは、最近の国会答弁の傾聴に値しないことである。「記憶にありません」からメモも日報も「記録はありません」、果ては「記録は改ざんされました」では、一体何を信用するのか。国とは何かを考えてしまう。やはり、ここはただただ、写真を撮りまくって、あらゆる記録写真を増やしていくしかすべはない。

「著作者人格権」の危機

齊藤 博（弁護士）

最近、契約書やネット上の利用規約、写真コンテストの応募要項等に「著作者人格権不行使特約」への合意を強要するものが急速に目立つようになっています。この特約は予め著作者の人格権（公表権・氏名表示権・同一性保持権等）の行使を禁じ、著作物を自由に利用しようという大変身勝手な意図に基づいており、著作権法の根幹にも関わる重大な問題であり、当協会としても看過することはできません。ただ、不行使特約の有効性については、法律家による賛否両論がネット上で渦巻く状況で、裁判例がないため結論が出ていない問題でもあります。

今回の著作権研究は、著作者の権利を放棄させるような契約が本当に有効なのかを考え、緊急企画として「危機に瀕している著作者人格権」について弁護士・齊藤博氏に執筆をお願いしたものです。（著作権委員会）

1. はじめに

「著作者人格権の危機」について書くようにご依頼を受け、その際、写真コンテストの際に示される募集要項をお送りいただいた。その要項の一つを見た途端唖然としてしまった。そこでは、「著作者人格権」に限らず、「著作権」も危機にさらされていた。文化的にも先進国であるはずの日本で、このようなひどいことが今の時代に行われているとは大きな驚きであった。お送りいただいたその他の募集要項はどうかと覗いてみると、そのひどさに濃淡はあるものの、乱暴さ、無知においては同様であった。強い憤りを覚えるとともに、長年著作権制度の研究に携わり、法改正にも関わってきた者として何とも空しい思いにかられた。

気を取り直して、現に行われている応募要項を参考しつつ、若干のコメントを述べよう。

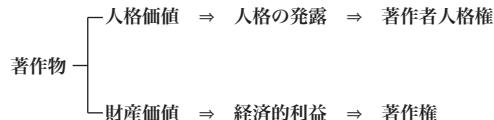
総じて、著作権制度への認識の浅さがある。そのような状況を許しているのは、募集する側と応募する側の力の差が歴然とあるからであろう。応募要項には、募集する側の上から目線が顕著に表れている。「あなたの作品が展示されます」「書籍になります」と、自らの著作物が何らかの形で世に出されることを望む意識に巧みに付け入っている。

具体的な話に入る前に、まずは、写真などの著作物の特性、著作物のクリエーター（創作者）に与えられている著作者人格権について概観しよう。

2. 著作物は人格の発露

著作物は、商業目的にも利用されるものである一方、著作者の人格の発露であり分身でもある。著作物には財産価値のみならず、人格価値もある。著作物と、その創作者とを結びつける鞄帯は、古くより尊重されていた。印刷等の著作物を利用する技術が開発され、普及す

著者は、著作者人格権と著作権を享有する。17条1項



るまでは、著作物は人格価値を表彰する旨の認識のほうが、財産価値の面よりも強かった。やがて、著作物の大量複製の技術は、著作物をビジネスとしても利用できることを知らせ、著作物の財産価値に思いを至らせるようになる。著作物の商業的利用への関心が強くなるにつれ、著作物の人格価値を尊重する思いは次第に希薄になる。近年のように、デジタル技術、ネットによる送信技術、ソーシャルメディアの普及する中では、ますます、人格価値の尊重よりもビジネスのほうに重きが移ってしまっている。

3. 著作者人格権の再確認

そのような著作物が不本意に公表されたり、著作者の氏名が削除されたり、著作物が改変される際には、著者は毅然と対応すべきこと、今の時代でも変わりがない。わが国の著作権法は、その18条から20条において、公表権、氏名表示権、同一性保持権という、三つの著作者人格権を定めている。

生命、身体、氏名、肖像、名誉、プライバシーなどには、それぞれ生命権、身体権、自由権、名誉権、氏名権、肖像権、プライバシー権など、個別的人格権が認められているが、著作物についても、個別的人格権のひとつである著作者人格権が認められている。これらの権利は、人格

権法の体系の中に位置付けられる。

この著作者人格権も、権利者自身の人格と分離することができないという意味で、一身専属性を備えている。その「帰属」においても、「行使」においても一身専属性がある。著作者人格権は、その担い手のみに帰属し、その担い手のみによって行使される。著作権法59条は、著作者人格権は、著作者の一身に専属し、譲渡することができない、と定めている。

著作者人格権は、著作物とその創作者の結び付きを前提とするものであるから、その鞄帯を他人が安易に切り離すことはできない。著作者自身も、自らの著作者人格権を放棄することはできない。著作者はその権利を肌身から切り離すことはできない。それならば、著作者人格権の「帰属」ではなく、著作者人格権の「行使」を放棄することはどうか。著作者人格権そのものは手放さないにしても、その行使を放棄することはできるのではないかと思われるかもしれないが、行使も放棄することができない。

お送りいただいた応募要項の中にも、「著作者人格権を行使しないことを前提とします。」(主催：山田養蜂場、共催：朝日学生新聞社)の文言を見る。応募要項に限らず、一般的の契約に際しても、著作者人格権の不行使特約を定めることがなされるが、そのような定めは人格権の法理に反することになる。後述のように、著作者が自らの意思で同意する余地は残る。

4. 著作者本人の同意が前提

応募要項の中には「著作人格権については許諾無く、無償で複製できるものとします。」(京都・梅小路フォトコンテスト運営事務局)【※1】と、意味不明の記述にも出会う。そもそも著作者人格権は許諾の対象でなく、しかし、本人の「同意」を論ずる余地はある。

他の人格価値を表彰している身体、氏名、肖像等についても、本人の同意を論ずることはできる。手術は本人の身体を傷つけることであり、氏名、肖像の商業的利用にしても、本人の同意を得て行われる。個人情報や私的生活などのプライバシーも同様である。

著作権法20条1項は「著作者は、その著作物及びその題号の同一性を保持する権利を有し、その意に反してこれらの変更、切除その他の改変を受けないものとする。」と定めている。この「意に反して」については主観的だと批判もされてきた。しかし、「意に反する」行為は古くより論じられてきたことであり、そもそも著作者本人の意思を尊重することは当然である。

その同意は具体的な行為についてなされなければならない。抽象的一般的に同意することは著作者人格権の不行使を特約することと変わらないことになる。具体的な場面を前提に同意することになる。その同意の効力は第三者には及ばない。債権的効力があるのみで

ある。

募集する側は、第三者の権利を侵害しないよう、肖像本人の同意を求める一方で、応募作品については応募者の著作者人格権を無造作に扱う様はいかにも乱暴であり、手前勝手である。

5. 結び

著作者人格権が軽んじられている状況を述べたが、お送りいただいた応募要項以外に他の例をも参照してみると、冒頭述べたような唖然とするものではないことが分かり、ホッとしている。お送りいただいたものは極度にひどい例であり、特異な例であるようだ。しかし、そのような特異な事例においても、名立たる企業が関係し、写真家が審査に関与している場合もあり、事の重大さを覚える。

今回は、著作者人格権の危機を述べたが、お送りいただいた応募要項には、著作権についても目を疑うようなひどいものもあった。「ご応募された作品につきましては、以降、山田養蜂場、ミツバチサミット実行委員会、パナソニック及びそれらの関連会社のWEBサイト、SNS、雑誌、新聞、番組、カタログ、ポスター、店頭販促物や写真展、イベント等で永続的に使用(掲載、展示、上映等)することに同意したものといたします。」である。

一昔前には、「入選した著作物」の著作権は募集する側に帰属する例はよく見かけたが、ここに挙げた例は、なんと「応募した作品」の利用まで支配しようとしている。仮に特異な例であるとしても、今の時代、このようなことが文明先進国家で行われていることには驚くばかりである。

かつて、パロディ事件【※2】の際に写真家の団体が敢然と著作物の無傷性を主張した情景を、今、改めて思い起こしている。芸術家の集団があのように団結して自らの権利の保護を主張した姿は壯觀であった。

【※1】京都・梅小路フォトコンテストの応募要項では「著作人格権」と「者」が抜けており、権利の名称についても不正確なものとなっている。(著作権委員会)

【※2】昭和46年に写真家・白川義員氏から提訴されたマッドアマノ氏による著作者人格権の侵害事件で、別名「合成写真裁判」事件。詳しくは、会報別冊・著作権関連記事一覧をご参照ください。(出版広報委員会)

齊藤 博(さいとう・ひろし)



1965年京都大学大学院法学研究科修了、新潟大学、筑波大学、専修大学の教授、放送大学客員教授、早稲田大学非常勤講師、文化審議会委員、著作権法学会会長などを経て、現在、法学博士、新潟大学名誉教授、国際著作権法学会日本支部(ALAI Japan)会長、虎ノ門総合法律事務所・弁護士、著書は、「人格権法の研究」1979年一粒社、「著作権法[第3版]」2008年有斐閣、「著作権法概論」2014年勁草書房など。

「日本写真保存センター」調査活動報告(27)

科学技術の進展する過程を記録する眼

松本 徳彦（副会長）

写真は事物を記録してきた。古くから伝わる技術を受け継いで、今日の科学技術の発展過程を記録してきた二人の眼。人類は人の暮らしを如何により良くするかを常に考え工夫してきた。とくに近代においてはその発展する速度が速く、次々と新技術が生まれ、ものの価値観が変化していった。明治以降、西欧技術の導入が進み、日本人のたゆまぬ努力と勤勉さが、今日の産業立国を生みだした。山口直は全国各地の産業遺跡や技術的な記念物を写真で残した。石松健男は科学の粋を集めて発展する完成された新幹線の新技術を、人間工学の視点で映像的に捉え、産業写真に新風を吹き込んだ。保存センターではこうした新しい時代の記録も収集している。

■先人の伝統と現代の科学技術を記録する 山口 直（1937～）

高度な技術力の背後には、先人たちが嘗々と築き上げてきた技術の歴史がある。その積み上げられた遺産を後世に残し顕彰しようという動きが、世界遺産という形で次々と紹介されている。

会員の山口直（1937～）が撮り続けてきた著作の中には『技術史の旅』（産業考古学者の飯塚一雄、1985年）がある。琵琶湖の疎水から箱根用水、筑後川の揚水車、錦帯橋のアーチ式橋梁技術などを、多年にわたって捉えてきた写真原板が写真保存センターに寄贈された。

琵琶湖と京都を結ぶ疎水

琵琶湖と京都を水路で結ぶ構想は、江戸時代からあった。これは京都の経済を支える大動脈だが、途中に逢坂山や日岡峠があって難しかった。1881（明治14）年に着任した京都府知事北垣国道は、琵琶湖の豊富な水力を活用し水路だけでなく水車動力による工業を振興する計画を練り上げた。85（明治18）年隣接する府県との利害関係の調整を終え、疎水工事に着手。大津の湖岸三保ヶ崎の取水口から當時一定の水量を確保するための制水閘門を設け、三井寺観音堂下から2,436メートル



琵琶湖疎水 1978年 山口直

の隧道など3つの隧道を掘り進め、4年半かけて南禅寺脇舟溜まり、岡崎公園前の掘割りまでの疎水を完成する。ここには舟を運ぶインクラインや水路途中にベルトン式水車による水力発電所を設けるなど、京都の近代工業化を推進した。

現在は南禅寺脇のレンガ造りの2重アーチ構造の水路橋や山科運河の遊歩道、インクライン跡などが観光名所として知られている。

筑後川の揚水車

大分と福岡県境を流れる筑後川。九州の穀倉地帯である筑後平野は、古くから大雨のたびに氾濫が起こり農民を困らせていた。日照りが続ければ干ばつもあって、安定的な水利用は夢であった。福岡県朝倉郡朝倉町には田植えの終わった水田の向こうに、揚水用の木製の二連、三連式の水車がゆっくりと回っている。この堀川取水口付近には、灌漑用の揚水車がいまも活動している。水車は太い松丸太で造られた胴木と日ノ脚と呼ばれるスポークと、そこに水を受ける羽根板と柄杓を渡し、水を次々と流す仕組みになっている。その水車を二連、三連に繋ぎ、水を無駄なく利用するという工夫がされている独特の構造が、なんとも日本の発想と形態的にも美しい構造になっている。木と竹で造られた水



揚水車 1978年 山口直



錦帯橋 1981年 山口直

車は金属製のものに比べ強度も強いが、これを造る水車大工の後継者不足で、近年は金属製の水車に取って代わろうとしているが、どことなくユーモラスな動きときしむ作動音を惜しむ声も聞かれる。

錦帯橋のダイナミックな美しさ

橋梁の構造で特異なものに、刎木(はねぎ)構造という特徴的な橋がある。なかでも良く知られているのが、岩国市の錦帯橋と大月市の猿橋ではなかろうか。

猿橋は中央本線猿橋駅から国道20号線を行った桂川(相模川上流)に架かる木造橋である。この橋の創建は鎌倉時代とも言われているが確証はない。

切り立った両岸の30メートルほどの間を結ぶ桁木を得るのは難しい。そこで考えられたのが刎木構造であった。両岸から約15メートルの刎木を3列4段重ねにして岸から突き出し、それを重ね合わせながら中央部で連結し、荷重を分散させながら橋を造るといった特殊な工法である。

錦帯橋は岩国藩三代藩主、吉川広嘉の時代に造られたという。錦川は大変な暴れ川で何度も増水で橋が流されてきた。洪水に耐える堅固な橋として構想されたのが、長崎の石造アーチ式の眼鏡橋から、橋脚の石積みや河床の敷石技術を学び、強固な橋脚と刎木構造によ



高圧装置による人体実験 1969年 石松健男

るアーチ橋を完成させた。橋を河床から見上げると、橋のダイナミックな弧線の力強さ、複雑な木組みが美しく、木造建築の粋を見ることができる。

参考文献:『技術史の旅』(産業考古学者・飯塚一雄、1985年)

■現代の人間工学の発展過程を捉える写真

石松健男 (1936~2008)

1964年12月に設立された日本人間工学会の学会誌『人間工学』を多年にわたって撮り続けた石松健男の写真が、学会50回記念大会(2009年つくば市)で展示され、「バーチャル・ギャラリー」で「石松健男がとらえた人間工学—学会設立初期の写真」として公開されていた。

『人間工学』の創刊号(65年1月)に掲載された写真は、夢の超特急と呼ばれた東海道新幹線の設計から運用システムに、人間がどのように係ってきたかを写真で表現したものであった。3月号では道路標識について、首都高速道路の急なカーブの怖さや案内標識の見にくさを捉え、第3巻では航空医学実験隊のダミー人形を使った、衝撃実験の様子が生々しく捉えられ、航空機事故のもの凄さを捉え、第5巻では人間工学的観点からみたクレーン操作、高圧装置による人体実験シミュレーション、第6巻で都市における騒音公害を捉えるなど、人間と機械との関係を逆光やシルエット、極端な仰角的アングル、プレなどを駆使した表現で新時代の映像が溢れていた。収集している石松の写真には、経済成長の最中における人間と機械の葛藤など産業発展過程における不安や矛盾をかかえる状況を記録した貴重な写真が含まれている。

参考文献:日本人間工学会の学会誌『人間工学』より



東京駅出札窓口 1965年 石松健男

第43回2018JPS展開催

副会長 松本徳彦

デジタルカメラもミラーレスの時代へと進化している。カメラが小型軽量化することで、女性や高齢の写真爱好者にとっては、持ち運びや操作が楽になり行動範囲が広がったことだろう。それだけにコンテストに応募される方も年少者から高齢者まで幅広くなり、今年は昨年を超える応募数があった。ネイチャーから動物、風景、スナップ、さらにはファンタジーなイメージやドキュメンタリーなど多彩になっている。これも人々の暮らしや趣向が、新鮮なもの斬新さを求める傾向へと変化している現れだろう。

審査は例年通り、机上に並べられた応募作品を慎重に選んで、絞り込まれた作品について審査員が合議を繰り返しながら入賞作を決めていく。ある程度決まった段階で、他のコンテストでの入選や類似など、応募規定に違反していないかを点検し最終決定する。

今年度の文部科学大臣賞は、田中容之さんの「里の生活」が選ばれた。常陸太田市の上高倉持方集落で牛を飼う農家の生活ぶりを捉えた作品で、牛を手放す時にお婆ちゃんが言っていた「牛も別れる時には涙を流すんだよ」ということを思い出したと、感傷気味に語っていた田中さんの言葉通り、内面的な印象を表出した作品だった。東京都知事賞は河田和子さんの「竹林のにぎわい」。日毎に成長する竹が、脱皮するように衣替えする。その竹の皮が小鳥であったり動物のようであったりする様を造型的に捉えた秀作である。金賞はミャンマーの電車の中で祈る老婆を車窓から差し込む光りの中にシルエットで捉えた、藤野治雄さんの「暮らしの中の祈り」。銀賞には現代を象徴するかのようなスマホで、高校入試の合格発表を捉

える女学生を3枚で構成した國安里香さん「15の春」と、ベトナムの少数民族の肌を捉えた眞館忠嗣さんの「肢体」が選ばれた。18歳以下の最優秀賞は、平塚学園高等学校の高校生、星 啓人さんの「雨上がりの後に」。露出を明るいところに合わせて校庭の生徒たちが薄暗く見える、そのコントラストが表現されて効果を上げている。

ヤングアイの日本写真家協会会长賞は、学校法人 Adachi 学園ビジュアルアーツ専門学校「Street beyond Border」、奨励賞は九州産業大学芸術学部写真映像学科「向こうの向こうまで」に贈ることになった。

これからの時代を切り開く若い方たちは、もっと基礎的技術の完成度のほかに、先進的なイメージと斬新な表現を確立して欲しい。

応募者総数	1,841名	6,104枚
入賞・入選者数	269名	491枚
会員作品参加数	53名	106枚
ヤングアイ参加数	10校	10枚



公募作品審査風景
撮影：小林みのる
審査員（左から）、『日本カメラ』編集長の佐々木秀人氏、水谷章人氏、熊切圭介会長（審査長）、ハービー・山口氏、今森光彦氏

東京展

東京都写真美術館／5月19日(土)～6月3日(日)
(B1F) 10:00～18:00(木・金は20:00まで)
月曜休館

共 催／東京都写真美術館 後 援／文化庁、東京都
表彰式／5月19日(土) 13:00～14:30
東京都写真美術館 1Fホール
講演会／5月19日(土) 15:00～16:30
東京都写真美術館 1Fホール
「写真的著作権がわかれば肖像権なんか怖くない！」
定員：190名（無料、当日10時より1Fホール受付にて整理券配布）
イベント／5月26日(土) 10:30～15:00、東京都写真美術館 1Fスタジオ、恵比寿ガーデンプレイス
テーマ：「大三元ズームレンズを体験しよう！」
定員：30名（要事前申込） 料金：500円

名古屋展

名古屋市民ギャラリー矢田／6月19日(火)～6月24日(日)
(第1～3展示室) 9:30～19:00
(最終日 17:00閉館)

後 援／文化庁、愛知県、愛知県教育委員会、
名古屋市、名古屋市教育委員会
作品講評会・講演会／6月23日(土)
名城大学ナゴヤドーム前キャンパス南館 DSホール
12:30～14:00 作品講評会（東海地区入選者紹介）
14:15～16:30 講演会
「写真的著作権がわかれば肖像権なんか怖くない！」
定員：250名（無料、申し込み不要、先着順）

文部科学 大臣賞

田中 容之 (栃木県)

賞状・楯・副賞
賞金 50万円

「里の生活」 カラー 5枚組



東京都 知事賞

賞状・楯・副賞
賞金 30万円

河田 和子 (滋賀県)

「竹林のにぎわい」

カラー 5枚組



関西展

京都市美術館別館／7月10日(火)～7月15日(日)

9:00～17:00

後援／文化庁、京都市、京都府教育委員会、

京都市、京都市教育委員会

作品講評会・講演会／7月14日(土)

京都市国際交流会館イベントホール

13:00～14:00 作品講評会(関西地区入選者紹介)、

14:15～16:30 講演会「写真の著作権がわかれれば肖像権なんか怖くない！」

定員：221名（無料、申し込み不要、先着順）

■講演会3会場共通■

「写真の著作権がわかれれば肖像権なんか怖くない！」

共催：日本写真著作権協会 講師：佐々木広人（『アサヒカメラ』編集長）、近藤美智子（弁護士・虎ノ門総合法律事務所）、加藤雅昭（日本写真家協会著作権担当理事、日本写真著作権協会理事）

金賞

賞状・楯・副賞
賞金 15万円

藤野 治雄 (千葉県)

「暮らしの中の祈り」

カラー単写真



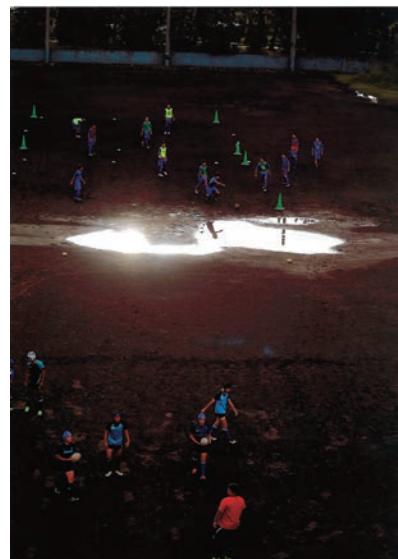
18歳以下部門

最優秀賞

星 啓人 (神奈川県)

「雨上がりの後に」

カラー単写真



銀賞

賞状・楯・副賞
賞金 10万円

國安 里香 (岩手県)

「15の春」 カラー 3枚組

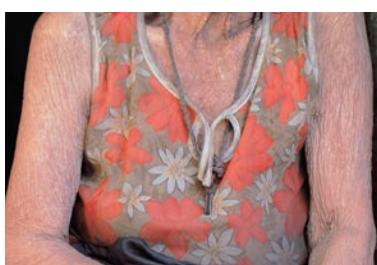


銀賞

賞状・楯・副賞
賞金 10万円

眞館 忠嗣 (石川県)

「肢体」 カラー 3枚組



銅賞

賞状・楯・副賞
賞金 5万円

立花 久光 (東京都)

「祈願」 モノクロ 5枚組



銅賞

賞状・楯・副賞
賞金 5万円

小野 賢治 (千葉県)

「大地とアスリート」

モノクロ単写真

銅賞

賞状・楯・副賞
賞金 5万円

吉田 雅宏 (茨城県)

「最後の春」 カラー単写真



【ヤングアイ部門】

日本写真家協会

会長賞

賞状・楯・副賞

学校法人
Adachi 学園

ビジュアルアーツ
専門学校

タイトル

「Street beyond
Borders」

鈴木 拓也、陳 捷甄、
内田 斗磨



ヤングアイ

奨励賞

賞状・楯・副賞

九州産業大学 芸術学部

写真映像学科

タイトル 「向こうの向こうまで」

豊永 茜、鎌田 拳伍



ニコンイメージング ジャパン

「Red Dot Award : Product Design 2018」をデジタル一眼レフカメラ「ニコン D850」「ニコン D7500」が受賞



デジタル一眼レフカメラ「ニコン D850」と「ニコン D7500」が、ドイツのノルトライン・ヴェストファーレン・デザインセンターが主催する「Red Dot Award: Product Design 2018」を受賞しました。「Red Dot Design Award」は、60年以上続く、世界最大級のデザイン賞で、「Red Dot Award: Product Design 2018」では、世界 59 カ国から 6,300 点以上の応募があり、国際的に活躍するデザインの専門家によって、デザインの革新性や機能性、耐久性などを基準に審査されました。受賞作品はドイツ・エッセンにある「レッドドット・デザイン・ミュージアム」で行われる特別展（会期：2018 年 7 月 10 日～8 月 5 日）で展示されます。

株式会社ニコンイメージングジャパン

【製品に関するお問合せ先】

ニコンカスタマーサポートセンター ナビダイヤル

TEL : 0570-02-8000

<http://www.nikon-image.com>

ケンコー・トキナー

ケンコー・トキナーは DNP 写真額縁商品に関し、株式会社 DNP フォトイメージングジャパンと販売代理店契約を締結いたしました。平成 30 年 4 月度より、DNP 写真額縁につきましては、全ての商品を株式会社ケンコー・トキナーより販売しています

DNP の写真額縁製品は、歴史あるコニカの写真額の流れを汲むもので、作品展示用の額として、一流の評価を受けているラインナップもあります。ハイエンドモデルの「NEW 画廊」（価格は税別 5,355 円～12,569 円）は、国産のアル

ミ額縁。「シンプルなフレームとワイド幅の厚手 V カット台紙が作品を引き立てます。1 枚からお好みのオーダーメイド仕様変更が可能です。」とカタログで紹介していますが、作品に合わせて、全紙、半切、四切、ワイド四切、六切、A3 ノビ、A3、A4 計 8 サイズをラインナップ。フレームの色が、ホワイト、ブラック、シルバーとあり、マット紙は同色のもの（ホワイト・シルバーが白、ブラックが黒）です。さらにガラスが標準装備、というところから、マット紙交換、ガラスをガラスなしやアクリルに変更、フレームの特寸などの仕様変更に対応します。ぜひ、写真展の際には NEW 画廊をご用命ください。

株式会社ケンコー・トキナー

【製品に関するお問合せ先】

広報・宣伝課 田原 栄一

TEL : 03-6840-2970

FAX : 03-6840-2962

メール : etahara@kenko-tokina.co.jp

<http://www.kenko-tokina.co.jp/>



ライカカメラジャパン

ライカ SL 用広角ズーム「ライカ スーパー・バリオ・エルマー SL f3.5-4.5/16-35mm ASPH.」の登場によりシステムをさらに拡充

この度、プロフェッショナル仕様のミラーレス一眼「ライカ SL」用の広角ズームレンズ「ライカ スーパー・バリオ・エルマー SL f3.5-4.5/16-35mm ASPH.」が発売されました。これは、すでに発売されている「ライカ バリオ・エルマリート SL f2.8-4/24-90mm ASPH.」と「ライカ アポ・バリオ・エルマリート SL f2.8-4/90-280mm」に続くズームレンズで、この 3 本で 16 ～ 280mm の幅広い焦点距離をカバーし、あらゆるジャンルの撮影ニーズを満たすことができるため、高度な柔軟性を求めるフォ



トグラファーにもご満足いただけます。ライカならではの高い品質と描写性能に加え、堅牢性の優れた構造、そして特殊なアクアデュラ® コーティングを採用。また、ほぼ無音のきわめて速い高速オートフォーカス性能も実現しています。したがいまして、風景や建物の撮影はもちろんのこと、結婚式、イベント、コンサート、さらにルポルタージュやドキュメンタリーの撮影まで幅広い用途にご利用いただけます。

各地のライカストア、ライカブティックにて、ぜひお手に取ってご覧ください。

ライカカメラジャパン株式会社

【製品に関するお問合せ先】

ライカサポートセンター

TEL : 0120-03-5508

メール : info@leica-camera.co.jp

<http://www.leica-camera.co.jp>

富士フィルムイメージング システムズ

富士フィルムのイメージング製品の魅力を体験できるブランド発信拠点

「FUJIFILM Imaging Plaza」

オープン 2018 年 4 月 28 日



目の前に広がる皇居を眺望できる絶好の立地に、ミラーレスデジタルカメラ「X シリーズ」「GFX シリーズ」や交換レンズを手にとって体験できる「タッチ＆トライコーナー」をはじめ、当社の高画質な大サイズプリントで展示ができる写真展会場「FUJIFILM Imaging Plaza Gallery」などで皆様の写真ライフを広げるお手伝いをする「FUJIFILM Imaging Plaza」を 2018 年 4 月 28 日にオープンいたしました。

「X シリーズ」「GFX シリーズ」をご利用い

ただいている多くのプロ写真家のための会員制サポートサービス「FUJIFILM Professional Service(FPS)」の拠点も設置、機材の点検などをを行うオンラインメンテナンスを初めて実施し、プロ写真家の皆様へのサービス充実を図ります。この他、拠点内に設置したスタジオでは、各種ライティングやテザーフレーム撮影をテストできるなど、プロ写真家の幅広いニーズに対応いたします。

4月26日に実施したマスコミ・プロ写真家向け内覧会は、熊切会長をはじめとして多数のJPS会員にお越しいただき盛大な会となりました。

所在地：東京都千代田区丸の内2-1-1 丸ノ内MY PLAZA 3階

アクセス：JR「東京駅」「有楽町駅」より徒歩5分
地下鉄千代田線「二重橋前駅」3番出口直結

営業時間：平日：11:00～20:00

土日祝祭日：10:00～19:00 ※年中無休(年末年始除く)

【お問合せ先】

TEL：050-3786-7880

メール：imagingplaza@fujifilm.com

<http://imagingplaza.fujifilm.com>

フレームマン

フレームマンの新サロン『FM エキシビションサロン銀座』がオープンをいたしました。小さな小さなギャラリーではございますが、アーティストの聖地となるサロン、写真作品発表のギャラリー、写真愛好家の皆様が沢山集まる憩いの場所を目指しております

平成30年4月より移転という形で銀座6丁目・電通り沿いの1階フロアと2階フロアにて、サロン『FM エキシビションサロン銀座』をオープンさせていただきました。こちらまりとしたアットホームなサロンではございますが、引き続き写真業界の皆様の想いの場・聖地に成り得るギャラリーを目指して参ります。

1Fと2Fは、サロン内でもつながっております。
所在地：東京都中央区銀座6-4-7

開館時間：10:00～19:00

休館日：特定日及び年末年始



【お問合せ先】

TEL：03-3574-1036

メール：ginzasalon@frameman.co.jp
<http://frameman.co.jp>

東京工芸大学

広川泰士写真展

2018年6月18日(月)～8月12日(日)

写大ギャラリーでは、東京工芸大学で教授も務めた写真家・広川泰士の写真展を開催いたします。

広川泰士は、1950年に神奈川県で生まれ、1974年よりフォトグラファーとして活動を開始しました。以降、ファッション・広告の写真や動画の仕事を手がける一方、「BABEL」「TIMESCAPES」「STILLCRAZY」など数多くの作品を制作してきました。また世界各地で展覧会を開催し、文部科学大臣賞や日本写真協会賞の受賞など、その幅広い活動が評価されています。

今回は、広川泰士の作品の中から、ポートレイトに焦点を当て展示いたします。日本の田舎を巡りながら出会った人々にその場でデザイナーズファッションに着替えてもらい撮影した「sonomama sonomama」1980年代より撮影を続けてきた芸能人・文化人の家族を捉えたシリーズや、東日本大震災で被災者となった相馬市の家族を撮影したシリーズなど、これまでに撮影してきたポートレイト作品を集約し展覧する試みです。広川の人々に向ける眼差しを体感いただければ幸いです。

(10:00～20:00 開館 会期中無休・入場無料)

東京工芸大学 写大ギャラリー

担当：吉野・深尾

東京都中野区本町2-4-7 芸術情報館2F

TEL：03-3372-1321(代)

FAX：03-5388-7996

<http://www.shadai.t-kougei.ac.jp>

キヤノンマーケティングジャパン

【第25回 写真甲子園 2018 開催】

キヤノンマーケティングジャパン株式会社が、特別協賛を行う『第25回 写真甲子園』を今年も開催いたします。

1994年に始まった全国高等学校写真選手権大会「写真甲子園」は全国の高校写真部・サークルに新しい活動の場や目標、そして出会い・交流の機会を提供し、高校生らしい創造性や感受性の育成と活動の向上をもって、学校生活の充実と特別活動の振興に寄与することを目的とした大会です。

全国の高校写真部・サークルなどから、共同制作による作品(組写真)を募集し、作品審査及びプレゼンテーション審査によって全国11ブロックから優秀校18校を選抜し、本戦大会開催地である東川町にて、同一条件下、高校写真部の全国一を目指します。

来る5月24日(木)に初戦審査会(非公開)を行い、全国の高校写真部・サークルなどから、応募いただいた共同制作による作品を審査し、ブロック審査会進出校80校を選抜します。

7月31日(火)～8月3日(金)の期間、東川町で行われる本戦大会に向け、高校生の熱い、夏が始まります。

<http://canon.jp/event/photo/koshien2018/index.html>

ハッセルブラッド・ジャパン

新賛助メンバーご挨拶

ハッセルブラッド・ジャパンは2012年に設立され2013年にはハッセルブラッドで初めてのストア拠点となる Hasselblad Tokyo が東京の原宿にオープンいたしました。中判カメラメーカーとしては1941年より事業を開始し世界中のフォトグラファーに愛され続けているブランドです。現在では月面に初めて上陸したと言われているVシステムの系譜を引くHシステム、世界初の中判ミラーレスカメラと言われるXシステム、世界最高峰の性能を誇るフィルムスキャナー Flextight シリーズなど幅広く製品をラインナップしております。本年よりご縁をいただき JPS の賛助会員の仲間入りをさせていただきましたが、今後は世界で有数の高いレベルを誇る日本の写真家の活動を微力ながら支援させていただき、またより有益なご意見など拝聴させてもらい日本写真家協会のさらなる繁栄に貢献できればと考えています。

ハッセル・ブラッド株式会社

【製品に関するお問合せ先】

ハッセルブラッド ストア 東京

TEL：03-6434-9567

メール：info@hasselblad.jp

<http://www.hasselblad.com/jp>



※(構成 / 出版広報委員：川上卓也)

初期の写真を通して日本の歴史を知る 「写真発祥地の原風景 長崎」

東京都写真美術館では、毎年春に幕末から明治の初期写真にスポットを当てた「写真発祥地の原風景」の展示を行っている。本年は3月6日(火)～5月6日(日)の期間、「写真発祥地の原風景 長崎」を開催した。写真展とともに開催されたギャラリートークとワークショップを合わせて紹介する。

■幕末の長崎に伝来し発展した写真技術と当時の風俗を今に伝える展示

鎖国をしていた日本で、海外に開かれた港町として栄えた“異域”長崎。そこでは、開国よりも早い時期から写真制作が開始され、日本の写真発祥地として数多くの写真が撮影され、残されている。

当時の長崎には、ピエール・ロシエやフェリーチェ・ペアトといった外国人写真師が訪れて写真制作を行っただけでなく、上野彦馬、内田九一をはじめ、薛信二郎、清河武安、為政虎三などの日本人写真師も次々と誕生し、日本の写真文化が開花する中核の地となつたことが知られている。

展覧会「写真発祥地の原風景 長崎」は、長崎学に造詣の深い姫野順一博士（長崎外国语大学特任教授・長崎大学名誉教授）監修のもと、幕末・明治の長崎を展示室に再構築したもの。全4章で構成された「写真発祥地の原風景 長崎」は、現存する幕末・明治の写真作品を中心に、多くの周辺資料を加えた多元的な展示となっていたのが大きな特徴だ。

東京都写真美術館が収蔵する上野彦馬『長崎市郷之撮影』、内田九一『西国巡幸写真帖』、伝・堀江鉄二郎（ほりえくわじろう）《上野彦馬像》（日本大学藝術学部蔵）、さらに日下部金兵衛が頒布した『長崎パノラマ』、フェリーチェ・ペアトによる『幕末アルバム』や『ボードイン・アルバム』（長崎大学附属図書館蔵）といった数多くの写真作品が紹介されていた。これに加え、写真を原図にして製作された青貝細工の《長崎風物図箱》や長崎版画、稀覯本など



上野彦馬『高島炭坑・北渓井坑』『上野彦馬手控えアルバム』より 明治初期 鶏卵紙 日本大学藝術学部

300点を超える作品が、会期中に一部展示替えを行って展示されていた。

当時の時代を物語る写真作品はもちろんだが、台紙や写真帳の表紙、さらに古地図や絵画・工芸品なども興味深く、見応えのあるものとなっていた。

■ギャラリートークやワークショップなど充実した関連イベントも開催

東京都写真美術館では、本展に合わせて様々な関連イベントを企画し開催している。

「写真発祥地の原風景 長崎」では、会期中に7回の担当学芸員によるギャラリートークと2回の英語のギャラリートーク、高橋則英氏（日本大学藝術学部写真学科教授）ほか5人のパネリストを迎えて「長崎をめぐる初期写真シンポジウム－オリジナルとデジタルアーカイブ－」を開催。さらにコロディオン湿板の制作プロセスを見学し、当時の写真技術を知ることのできる「古典技法ワークショップ：コロディオン湿板制作デモンストレーション」など、興味深い内容の関連イベントが開催されていた。

●古典技法ワークショップ：コロディオン湿板制作デモンストレーション

田村政実氏（田村写真代表）を講師に迎え、写真美術



ピエール・ロシエ《(雨の日の日本人たち〔出島〕)》万延元(1860)年 鶏卵紙 長崎大学附属図書館(中央図書館)



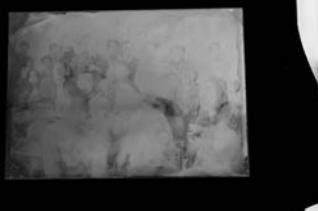
プロジェクターで投影される暗室作業を真剣に見つめる参加者たち。



コロディオン湿板制作デモンストレーション講師の田村政実氏(田村写真代表)。



「写真発祥地の原風景 長崎」の担当学芸員の三井圭司氏。



製作されたコロディオン湿板のネガ。現像を何度か繰り返してコントラストを高めていく。



コロディオン湿板から鶏卵紙にプリントしたもの。デジタル画像とは違う風合いがある。



プリントを水洗する田村氏。使う薬品や作業工程を細かく説明しながら作業を進めていく。

館1階のスタジオで開催された「古典技法ワークショップ」のデモンストレーションは、50名の定員が満席になる盛況ぶりで、湿板写真に対する関心の高さが伺えた。女性の参加者や親子での参加も目立ち、写真文化の広がりが感じられる。

参加者の集合写真が大判カメラで撮影されたのち、コロディオン湿板のネガが作成され、鶏卵紙にプリントするまでの工程が田村氏と担当学芸員の三井圭司氏による軽妙な解説を交えながら紹介されていく。ガラス面の研磨や乳剤の塗布など、見ることの少なくなった暗室作業以上に貴重な湿板の製作過程に、参加者は興味津々。プロジェクターで投影される手元の暗室作業を見つめる参加者の真剣な眼差しが印象的だった。

●Gallery Talk in English

英語によるギャラリートーク「Gallery Talk in English」は、主に海外からの来場者を対象にした関連イベント。日本文化に対する興味関心の高さもあって、外国人の来場者は増える傾向にある。そういった点からも英語によるギャラリートークは好評なのだろう。レクチャラーは多くのメディアで活躍しているアリス・ゴーデンカー氏(インバウンドマーケティングコンサルタント)。今回の Gallery Talk in English で

は、担当学芸員の三井氏も加わって、専門的な質問にも答えていた。

2回の「Gallery Talk in English」は、いずれも開催が金曜日の夜ということもあって、通常よりも参加者が多いのだという。取材した日の参加者は30人ほどで、欧米人が多かった。

長年日本で活動しているゴーデンカー氏は初期写真に関する知識も深く、日本人にも聞き取りやすい英語を話す。レクチャーを聞きながら、こういう表現をするのかと思うことも何度もあった。外国人限定というわけではないので、英語で写真の知識を広げたいという人は、参加してみるのもありかもしれない。

~~~~~

写真展「写真発祥地の原風景 長崎」は、「明治150年」を記念するとともに、長崎大学附属図書館の幕末・明治期日本の写真データベース公開20周年を記念して、同大学と共同で開催された。また巡回展として、長崎歴史文化博物館において5月22日(火)～6月24日(日)まで開催されている。

また「写真発祥地の原風景」はシリーズとして展開され、今後は北海道や東京をテーマにした展示が予定されている。

(写真提供／東京都写真美術館 文・撮影／柴田 誠)



英語ギャラリートーク前のレクチャー風景。2階ロビーには今昔の長崎パノラマが設けられた。



女性の姿が目立っていた Gallery Talk in English。アリス・ゴーデンカー氏の解説も分かりやすく好評だった。



Gallery Talk in English でレクチャラーを務めるアリス・ゴーデンカー氏。



製作者不詳《長崎風物図箱》江戸末期頃  
長崎歴史文化博物館



貴重な資料と写真を興味深く見つめる  
Gallery Talk in English の参加者。



ロビーに展示されている移動暗室の前で図録の解説をするアリス・ゴーデンカー氏。

## デジタルトピックス特別編

# 「国産モノクロフィルムの誕生と終わり」

～ロールフィルムの国産化から90年～

写真のデジタル化が進んだ現在、銀塩フィルムの需要は大幅に減少しており、メーカーにとっても安定的な供給が難しくなっている中、ついに2018年をもって国産モノクロフィルムが姿を消すことになりました。そこでデジタルトピックス特別編として、国産モノクロフィルムの歴史をまとめておきます。

2018年4月6日、富士フィルムは、「長年ご愛用いただきました黑白フィルムにつきまして、需要の継続的な減少により安定的な供給が困難となりましたので、販売を終了させていただきます。」との一文を添えて、「ネオパン100 ACROS」フィルムの販売を2018年10月頃をメドに終了するとアナウンスしました（モノクロ印画紙類の販売も同時に終了）。

かつて「PAN 100」や「PAN 400」などのモノクロフィルムを展開していた旧コニカ（コニカミノルタ）が2006年3月31日に写真関連事業から撤退したあと、国内で唯一頑張っていた富士フィルムでしたが、今回の「ネオパン100 ACROS」の終了をもって国産のモノクロフィルムは市場から姿を消すことになります。

日本で乾板が初めて商品化されたのは大正10年（1921年）、ロールフィルムは昭和3年（1928年）といわれていますから、それぞれの誕生から100年を待たずして国産モノクロフィルムは終わりの時を迎えることになりました。

フィルムからデジタルへの置き換えが進んだ現状を考えれば、遠くない将来にこの日が来るであろうことは予想されていましたが、いざ現実になるとなんともいえない寂しさを感じます。

このタイミングで、国産のモノクロフィルムがどのように生まれたのか、記録の意味も込めて文献などから紐解いておきたいと思います。

### ◆乾板の国産化は大正10年

世界初となる写真がフランス人のジョセフ・ニエプスによって1820年代に撮影されたのち、ダゲレオタイプ（1839年）、カルタイプ（1841年）、湿式とも呼ばれるコロジオン（1851年）などの発明を経て、取り扱いが容易な乾式写真が1871年に発明・実用化されました。

日本では下岡蓮杖や上野彦馬といったごく限られた写真技師が湿式で撮影を行っていましたが、明治16年（1883年）に乾板がイギリスから初めて持ち込まれたことで、日本においても「寫眞」は一般にも少しずつ広がりを見せていきます。

当時、輸入に頼っていた乾板をなんとか国産化でき

ないものかと、小西六本店の工場である六櫻社のほか、新たに設立された東京乾板や日本乾板などで研究開発が進められました。いずれも手作業による少量の試作までは成功したようですが、量産技術を確立できずに製品化を断念しています。

日本で乾板の量産に初めて成功したのは、撮影技師でもあった高橋慎二郎を技術者とする東洋乾板でした。設立から2年後となる今から97年前の大正10年（1921年）1月に、国産初の「ST乾板」の発売に漕ぎ着けます。

### ◆ロールフィルムの国産化は昭和3年

日本の技術者が乾板の国産化に苦労していた1880年代に、ロールフィルムと専用カメラの開発がアメリカで進められていました。1888年6月にEastman Dry Plate and Film社（後のイーストマン・コダック）が世界初のロールフィルムを使った「Kodak No. 1 Camera」を発売。ベースは紙で、直径2.5インチ（約64mm）の円形の写真を100枚撮影できたそうです。翌1889年秋にはナイトレート・セルロース（セルロイド）ベースに切り替えられています。

日本でのロールフィルムの研究は、大正7年（1918年）頃に、小島写真化学研究所の小島正治と六櫻社の江頭春樹の両氏がセルロイドへの乳剤塗布を行ったのが最初という説があります。また、大日本セルロイドも、のち



最後の国産モノクロフィルムとなった富士フィルムの「ネオパン100 ACROS」（画像提供：富士フィルムイメージングシステムズ）

に富士写真フィルムの常務取締役となる作間政介を技術者として、セルロイドベースを含む国産化に挑みます。限られた文献や設備しかなかった当時の開発は苦労の連続だったであろうことは容易に推察されます。

小島はその後、知己のあった氷糖会社経営の堀内勝治郎に出資を要請。堀内は旭日写真工業を大正14年(1925年)に設立し、小島を技師長に据えて現・浜松市中区浅田町に工場を構えました。

同社は大正15年(1926年)に国産印画紙を製品化したのち、昭和3年(1928年)2月に、国産初のロールフィルムとして、ベスト版(4×6.5cm)を8枚撮影できる「菊フキルム」を発売しました。ただしベースとしたセルロイドは輸入品だったようです(のちに大日本セルロイドから国産のフィルム生地を調達)。昭和6年(1931年)の資料によれば菊フキルムの定価は45銭。カタログには「超高感光度」の文字が見られますが、調査した範囲では感度は不詳です。

翌昭和4年(1929年)には小西六本店が「さくらフキルム」を発売。さらに昭和6年(1931年)には、大日本セルロイドがベースとなるセルロイドまでを国産化したいわば「純国産」のモノクロフィルム「大日本フキルム」を発売しました。ちなみに、板橋区小豆沢にあった同社の研究施設跡地には、「純国産写真フィルム発祥の地」という石碑が置かれています。

その後は、小西六本店から改称した小西六が国産初のカラー・リバーサルフィルム「さくら天然色フキルム」を昭和16年(1941年)に発売するなど、輸入品に負けない性能と品質を持ったフィルムの開発が本格化していきます。

### ◆モノクロフィルムの海外品は存続

国産フィルムの黎明期を飾った3社のうち、旭日写真工業は、トーゴーカメラ(東郷堂)へのフィルム供給などで成長を遂げたものの、後年は設備投資に伴う資金繰りに苦しんだようです。企業規模が小さかったため、戦時下の企業整備令によって、昭和19年(1944年)に解散させられています。

小西六は小西六写真工業に改称ののち1987年にコニカになりました。2003年にミノルタと経営統合してコニカミノルタになりますが、2006年に写真関連事業から撤退しています。

大日本セルロイドからは写真フィルム事業が分離されて、昭和9年(1934年)1月に富士写真フィルムが設立されます(同年6月には東洋乾板を吸収合併)。2006年に持ち株会社化によって富士フィルムとなり現在に至ります。なお、大日本セルロイド自体は現在はダイセルになっています。

以上、国産モノクロフィルムの販売終了アナウンスを機に、国産化の黎明期を簡単にまとめてみました。

| 西暦年    | 写真やフィルムにまつわる主な動き                                                    |
|--------|---------------------------------------------------------------------|
| 1820年代 | フランス人のジョセフ・ニエプスが初めて写真を撮影                                            |
| 1839年  | フランスでダゲレオタイプが発明                                                     |
| 1841年  | イギリスでカロタイプが発明                                                       |
| 1851年  | イギリスでコロジオン方式(湿式)が発明                                                 |
| 1857年  | 宇宿彦植右衛門が日本人として初めて写真撮影に成功                                            |
| 1860年代 | 上野彦馬や下岡蓮杖らが写真館を開業                                                   |
| 1871年  | イギリスで乾式が発明                                                          |
| 1883年  | 日本に乾式写真が輸入、乾板の国産化に向けた研究が始まる                                         |
| 1888年  | 米 Eastman Dry Plate and Film社が世界初のロールフィルムカメラ「Kodak No. 1 Camera」を発売 |
| 1918年頃 | 小島正治らがロールフィルムの研究を開始                                                 |
| 1921年  | 高橋慎二郎らの東洋乾板が国産初の「ST乾板」を製品化                                          |
| 1925年  | ライツ社が初の35mmカメラ「Leica I」を発売                                          |
| 1928年  | 小島正治を技師長とする旭日写真工業が国産初のモノクロ・ロールフィルム「菊フキルム」を発売                        |
| 1929年  | 小西六本店が「さくらフキルム」を発売                                                  |
| 1931年  | 大日本セルロイドが純国産の「大日本フキルム」を発売                                           |
| 1934年  | 富士写真フィルムが設立                                                         |
| 1936年  | 米イーストマン・コダック社が「Kodachrome」を発売(映画用は前年)                               |
| 1941年  | 小西六が国産初のカラー・リバーサルフィルム「さくら天然色フキルム」を発売                                |
| 1953年  | オリエンタル写真工業が国産初のカラー・ネガフィルム「オリエンタルカラーフィルム」を発売                         |
| 2018年  | 富士フィルムがモノクロフィルムの販売を終了                                               |

現在、モノクロフィルムはコダックやイルフォードなどで生産が続けられており、供給がすぐにゼロになるような状況ではありませんが、奇しくも本稿執筆中の2018年5月30日にキヤノンから同社最後のフィルムカメラ「EOS-1v」の販売終了がアナウンスされるなど、銀塩ユーザーにとっては厳しい状況が続いている。

デジタル技術が進化する中で、モノクロの銀塩写真が、写真の文化として、また、楽しみ方のひとつとして、これからも末永く続いて欲しいと願うばかりです。

(文責／出版広報委員会・関 行宏)

注：本稿は日本写真学会の初期の会誌ほかさまざまな史料やウェブサイトを参考にしながら、もっとも妥当と思われる情報に基づいて執筆しました。年代や世界初／日本初については諸説ある場合があります。個人名の敬称および株式会社等の会社形態表記は省略しています。

## 平成 30 年度（第 19 回） 公益社団法人日本写真家協会定時会員総会報告

日時：平成 30 年 5 月 28 日(月)午後 2 時 30 分～4 時  
 場所：大阪国際交流センター・2 階大会議室「さくら東」  
 議決権のある正会員総数：1,496 名 定足数 749 名  
 出席正会員数：1,099 名(内訳・本人出席 103 名、代理委任 0 名、議決権行使書 996 名)

平成 30 年度の定時会員総会は、5 月 28 日(月)8 年ぶりに大阪で開催した。定刻、進行の小川泰祐常務理事から平成 29 年度の正会員物故者 13 名と今年度に入ってきたからの 1 名の氏名が読み上げられ、黙祷し冥福を祈る。続いて 30 年度の新入会員 31 名が紹介され、山口勝廣専務理事が監事 1 名と出席の正会員理事 13 名を紹介した。熊切圭介会長より「協会は今年、創立 68 年目を迎え、公益社団法人として 8 年目の総会開催となりました。昨今の思わしくない経済状況の影響ですが事業は年々拡大し、会員の協力もあって計画した事業はそれぞれ成果を上げています。職能団体として、今後も事業活動等の一層の発展に尽くしたいと思います」と挨拶があった。



定款により議長を代表理事の熊切会長が務め、定足数を超える正会員が出席していると報告され会議に入った。

### 【決議事項】

**第 1 号議案：「平成 29 年度事業報告及び決算承認の件」**は、松本徳彦副会長が公益事業と収益事業その他共益事業について説明。続いて山口専務理事が貸借対照表と正味財産増減計算書をもとに、「当期の経常収益総額は 145,603,030 円、経常費用は 146,600,014 円で、当期の収支差額は 996,984 円の赤字決算となった。主な理由は企業による写真学習プログラムの事業協力の減少。事務局員の新規採用に伴う経費及び人件費が増えたこと」等の説明があった。さらに、監事を代表して栗原安夫監事が監査報告をした。その後、議長が質問、意見を求めたが無く、第 1 号議案について承認を諮ったところ、賛成多数で原案通り承認可決された。

**第 2 号議案：「公益社団法人日本写真家協会定款一部変更の件」**は、山口専務理事が第 19 条で定める総会議事録署名人の変更と、第 26 条における非常勤の外部理事及び外部監事に対する報酬の支払いの新設について、資料を基に説明した。質問、意見は特になく、議長が第 2 号議案の決議は定款第 18 条第 2 項により総正会員の議決権の 3 分の 2 以上に当たる多数をもって行うと説明し、承認を諮った。正会員総数は 1,496 名、決議は正会員総数の 3 分の 2 以上となる 998 名が必要となる。採決の結果、挙手による賛成は会場出席 103 名で反対は 0 名、議決権行使書による賛成は 995 名で反対が 1 名あり、併せて賛成 1,098 名で反対が 1 名という結果で、正会員総数の 3 分の 2 以上の賛成のため可決承認された。

**第 3 号議案：「役員の報酬並びに費用に関する規程」の一部変更の件は、山口専務理事が第 2 号議案「公益社団法人日本写真家協会定款一部変更」の承認に伴い、以後非常勤の外部理事及び外部監事に対して報酬の支払いを行うため「役員の報酬並びに費用に関する規程」の一部を変更すると説明をした。質問では、江口友一正会員から「報酬として手取り 1 万円にすることで、経費の増加にならないか」とあり、山口専務理事から「会員外理事は 7 名で、理事会は年 2 回の開催であることから、大きな経費の増加にはならない」と回答し、採決の結果、賛成多数で可決承認された。**

**第 4 号議案：名譽会員推举承認の件**では、山口専務理事より「定款」第 6 条第 1 項第 3 号、第 7 条第 3 号及び「細則」第 9 条第 1 項第 4 号により藤本俊一正会員を、「細則」第 9 条第 2 項により富岡畦草正会員と常盤とよ子正会員を名譽会員に推举する旨の説明があった。採決の結果、賛成多数で可決承認された。

### 【報告事項】

統いて報告事項に入り、議長より「平成 30 年度の事業計画、収支予算書及び資金調達及び設備投資の見込みを記載した書類は、定款第 34 条に基づき、3 月 5 日の第 40 回理事会で承認し、3 月 28 日内閣府に提出した」との報告があった。

**報告事項 1：「平成 30 年度事業計画書」**について松本副会長から本年度に行う事業について概略の説明があった。

**報告事項 2：「平成 30 年度収支予算書」**について山口専務理事から正味財産増減計算書ベースによる「収支予算書」を基に「平成 30 年度の経常予算は収入が 143,380,000 円、支出は 144,880,000 円で、収支差額は 1,500,000 円超過とした。これは平成 32 年に催す創立 70 周年記念事業の準備活動費が含まれており、周年事業積立金の取崩しにより充当する」との報告があった。

**報告事項 3：第 44 回「日本写真家協会賞」**の件について、野町副会長が「ソニーイメージングプロダクツ＆ソリューションズ(株)に贈ることが理事会で承認された」と報告があった。

**報告事項 4：第 2 回「笹本恒子写真賞」**の件は、松本副会長より「受賞者は足立君江さんに決定した」と報告があった。

**報告事項 5：会費滞納による正会員資格の喪失の件**について、小川常務理事が「平成 29 年度の会費滞納者 14 名については、4 月 23 日の第 41 回理事会で正会員資格の喪失者として承認しており、当総会終了後、正会員資格の喪失手続きを行うことになった」と報告した。

**報告事項 6：その他の事項**として山口専務理事から、今年度より関西方面で催す写真展について業務執行理事会で承認した旨を説明し、詳細について関西地区委員会生原良幸委員長より「JPS 関西写真展(仮称)は平成 31 年 1 月 4 日から 10 日まで富士フィルムフォトサロン大阪での開催が決まった」との報告があり、今後は実行委員会を組織し、写真展への参加者を募る。

以上の報告の後、報告事項 1～6 については特になく、別件として芥川仁正会員が事業協同組合日本写真家ユニオンの説明と、九州地域在住会員の親睦会への役員出席の要望を行った。その後、小川常務理事より総会出席の贊助会員の紹介と、名譽会員となった藤本俊一会員の挨拶があった。最後に野町和嘉副会長より閉会の辞のあと、記念写真の撮影をして大阪総会の幕を閉じた。

総会終了後、17 時より総会会場の隣り「さくら西」にて懇親会が開かれた。司会は関西地区委員会の柴田明蘭会員がを行い、田沼武能常務理事の挨拶に続き、贊助会員のニコンイメージングジャパン(株)執行役員の森真次様から「JPS 創立 70 周年を迎えるにあたり、様々な活動の準備をされているとのことで、是非それらの事業に参加させていただきた



いと思っています」の挨拶と、乾杯のご発声をいただき懇親会がスタートした。和やかな雰囲気の中、多数の参加があった新入会員の自己紹介や贊助会員の方々の挨拶もあり、会員同士の会話の和が広がり会場は盛り上がった。最後は、松本副会長の挨拶に続き、藤本俊一新名譽会員による一丁締めで終了した。

(記／小池良幸、撮影／後藤剛、二村海)

# Message Board

## ◆伊藤雅章（2010年入会）

### 「文化交流写真展サハリン」

昨年3月に、ロシア・サハリン州から写真を通じたロシアと日本の文化交流の提案があり、在ユジノサハリンスク日本総領事館と日露青年交流センターが間に立ち、まず昨年5月に日本人写真家5名がサハリンに派遣され、現地で撮影をしました。その作品は秋にサハリンで展示されました。そして今年はサハリン在住の写真家9人を東京に招き、今の日本を撮影してもらうと同時に、日本とロシアによる文化交流写真「サハリン」を新宿御苑のシリウスで開催しました。私は日本側の団長として若手写真家4人と共に昨年、雄大な自然の残るサハリンを撮影する幸運に恵まれました。この機会に少しでも両国の方々に貢献できればと思います。



（神奈川県横浜市在住）

## ◆吉野雄輔（2001年入会）

ミクロネシア連邦のチューク州には、200以上の島々がある。その中の1つ、無人島で、ファンナンと呼ばれている小さな島の撮影をずっとしてきた。1~2分で横断できるような小さな島で、白い砂地にヤシの木が数本生えて、フォトジェニックな島である。その後その島には、小さなコテージが建って、ジープ島という名前に変わった。その美しい小さな島を中心、いくつか本を作りたいなあ~と思っているが未だに作れていない。世界広しと言っても、こういう天国みたいな絵になる島なんて他にない僕は思っている。

出版の世界も厳しいご時世ではありますが、ぜひこの本を完成させたいと思っている今日この頃です。（東京都世田谷区在住）

## ◆高尾啓介（1995年入会）

仕事は完全にデジタルに浸かる日々。フィルム撮影の行程に思いを託した頃は昔話、多くの若者はその時代に関心は無く、苦労話で当時を楽しむのも化石話か？

いや、そんな苦労の蓄積を蘇らせようと、発掘作業をする。昭和57年大学ボクシングの撮影から始まり36年、撮り貯めたネガをデジタル化し、まとめて写真集に残そと、選手達のその後を追う。「リングが教えてくれた」の新たな撮影を1年以上かけ全国へ100名



以上の取材を重ねた。過去~現在からその先へ続くよう、時代はどう変わろうが一瞬を切り取る時の証人としての役目は何時も写真で在った様に。写真家業を楽しみ、選手達の成長を楽しむ。（東京都葛飾区在住）

## ◆小橋健一（1979年入会）

外国からの観光客が増加の一途をたどっているが、度々利用する地下鉄でもスーツケースを押し込んで乗車して来る観光客にも出会う。新年に入って浅草の撮影を終えて銀座線に乗った。発車寸前の電車だったので座る事もなかった。

間もなく前に座っているヨーロッパ系の娘さんがスックと立ち上がり緊張気味にどうぞというゼスチャー！ええ！私に、僕に、俺に、なぜ席を譲ってくれるのか。日本のオヤジだからか。イヤだよ～！譲っても譲られた行為がない事にとまどった。そこは丁重にありがとうを言い、その娘さんには座り直してもらった。一分ほどの国際交流物語です。（東京都江戸川区在住）

## ◆木村正博（2014年入会）

新宿副都心の東側にある新宿御苑は大名屋敷、農学校、皇室庭園という歴史を経て昭和24年に「国民公園新宿御苑」として一般公開されました。

この公園の魅力はアクセスのよさと植生の豊富さで、春の桜の時期には新宿門からJR新宿駅南口方面へ延々と入場者の列が続きます。園内は武蔵野の自然を残した母と子の森、日本庭園、イギリス風景式庭園、フランス式整形庭園、玉藻池に大別され、それぞれ趣の異なる被写体を提供してくれ、秋11月には皇室所縁の菊花展も一見の価値があります。

撮影を始めておよそ20年になりますが、植生や四季折々に見られる変化に魅惑されて通い続け、今回3冊目の本を上梓することができました。今後も引き続き足を運び、大都会のオアシスの魅力を発信し続けたいと思っています。

（神奈川県綾瀬市在住）

## ◆福田俊司（1998年入会）

オシドリは万葉の時代から“をしどり（愛おしい鳥）”と呼ばれ、日本人に愛されてきた。東洋において、オシドリは夫婦愛や貞節を象徴し、大切にされてきた。仏教の經典（ジャータカ）では、お釈迦様は前世でオシドリだったと説かれている。歐米でもオシドリ人気は高く、the most beautiful of all ducks

と称賛されている。

ところが近年、オシドリ最大の生息地、日本では、オシ

ドリと言えば枕詞のように“浮氣者”“雄の子育て放棄”と称される。実は、この通説は実証されていない。そして私は疑問を抱いている。いずれにしろ、生と死が隣り合わせのワイルドライフの真摯な生き様を、安易に擬人化し、揶揄するのはいかがなものか…。これぞ日本人のchildish！



いっぽう、メーテルリンクの童話「青い鳥」の如く、約三十年にわたるシベリア取材を経て、再発見した私の「青い鳥」がオシドリ。このアジアの至宝を、日本の美しい四季のなかで生から死まで、この写真集におさめた。この旅はまだ終わらない…シベリア、中国、台湾、蒙古へと続くだろう。

（栃木県宇都宮市在住）

## ◆奥山淳志（2016年入会）

他者の人生にカメラを向けることで「生きること」に近づけるのではないか。そう思っていた25歳の頃の僕が出会ったのは、北海道に暮らす井上弁造さんだった。

当時、78歳だった弁造さんは、がむしゃらに経済発展をし続けた戦後の日本社会に疑問符を投げかけるかたちで、自給自足の生活を営んでいた。「今経済社会が行き詰ったときに、立ち帰れる場所としての自給自足生活のモデル」というのが、弁造さんが「庭」と呼ぶ、森であり畠だった。

そして、そうした社会的なメッセージとは全く無縁なものとして、絵を描いていた。絵は、そのほとんどが裸婦や母娘などの女性像で、描き出される世界觀はずっと独身で生きてきた弁造さんの世界からはほど遠いものばかりだった。



通い始めた当初は、弁造さんの自給自足をテーマにして写真を撮っていた。しかし、弁造さんの絵に込められた思い

に触れるにつれ、絵を描くという行為が、弁造さんの「生きること」に深く関わっていることを知った僕は、いつしか、弁造さん、庭、絵という三つを見つめるようになった。

撮影は、2012年に弁造さんが亡くなった後も続いた。目の前から弁造さんはいなくなってしまったが、弁造さんの不在の時間と、庭、エスキース（絵の下絵）を主とする遺品



# J P S ブック レビュー

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。  
(2017・12月～2018・3月)  
 ①発行所 ②発行年月  
 ③サイズ (タテ×ヨコ)、頁数  
 ④定価 ⑤寄贈者  
 ⑥電子書籍ストア



**瞬光が描く美瑛の大地**  
阿部俊一

① Photo Stage ACE ② 2017年10月  
 ③ 22.7 × 30.3cm、96頁 ④ 3,500円  
 ⑤ 阿部氏



**多摩川 1970-74**  
江成常夫

① JCII フォトサロン  
 ② 2018年1月 ③ 24 × 25cm、31頁  
 ④ 800円 ⑤ 発行所



**クライアントワーク  
Part1**  
青木紘二

① アフロ ② 2017年12月  
 ③ 21 × 26.5cm、62頁 ④ 1,400円  
 ⑤ 青木氏



**うまたび**  
清水哲朗

① 玄光社 ② 2017年11月  
 ③ 18.8 × 13.3cm、194頁  
 ④ 2,000円 ⑤ 清水氏



**生涯一度は行きたい  
春夏秋冬の絶景駅 100選**  
越 信行

① 山と溪谷社 ② 2017年11月  
 ③ 21 × 15cm、130頁 ④ 1,600円  
 ⑤ 越氏



**写真で辿る折口信夫の古代**  
芳賀日出男

① KADOKAWA ② 2017年12月  
 ③ 14.9 × 10.5cm、272頁  
 ④ 1,560円 ⑤ 芳賀氏



**あした、どこかで。3**  
写真・うえだこうじ  
文・さえぐさはなえ

① alive ② 2017年10月  
 ③ 18.2 × 12.8cm、124頁  
 ④ 1,400円 ⑤ うえだ氏



**ペンキのキセキ**  
タクマクニヒロ

① 雷鳥社 ② 2017年11月  
 ③ 21.6 × 19cm、96頁 ④ 1,600円  
 ⑤ 宅間氏



**極夜**  
中村征夫

① 新潮社 ② 2017年12月  
 ③ 17.7 × 18.8cm、84頁  
 ④ 1,600円 ⑤ 発行所



**冬季オリンピック報道の世界  
～1984 サラエボから 2014 ソチまで～**  
青木紘二

① アフロ ② 2017年  
 ③ 20 × 22cm、114頁 ④ -  
 ⑤ 青木氏



**DOES IT  
WORK?! 2017**  
関西・11人の作家展

生原良幸・小林正典・平寿夫・森田敏隆  
 吉川謙・井上隆雄・井上博道、他4名  
 ① 写真家 11人 ② 2017年12月  
 ③ 29.7 × 21cm、29頁 ④ -  
 ⑤ 平氏

|                                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                      |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  <p><b>ETHIOPIA 伝説の聖櫃</b><br/>野町和嘉</p> <p>①クレヴィス ②2018年1月<br/>③24.7×26.5cm、156頁<br/>④3,700円 ⑤発行所</p>       |  <p><b>DVD ゼロの阿蘇<br/>500日の記録</b><br/>撮影・長野良市、長野梢人</p> <p>①九州学び舎 ②2018年<br/>③18.8×13.5cm ④2,000円<br/>⑤長野氏</p> |  <p><b>海上の巨大クレーン<br/>これが起重機船だ</b><br/>出水伯明</p> <p>①洋泉社 ②2017年11月<br/>③21×15cm、160頁 ④1,600円<br/>⑤出水氏</p>                                                                                                                                                                      |  <p><b>弁造 Benzo</b><br/>奥山淳志</p> <p>①奥山淳志 ②2018年1月<br/>③29×23cm、352頁 ④-<br/>⑤奥山氏</p>                              |
|  <p><b>フクシマ 2011-2017</b><br/>土田ヒロミ</p> <p>①みすゞ書房 ②2018年1月<br/>③30.2×30.2cm、196頁<br/>④12,000円 ⑤土田氏</p>     |  <p><b>岁月中国 1965</b><br/>斎藤康一</p> <p>①山東画報出版社 ②2018年1月<br/>③37.7×29.8cm、230頁<br/>④1200元 ⑤斎藤氏</p>            |  <p><b>おとこと女</b><br/>細江英公</p> <p>①JCII フォトサロン ②2018年2月<br/>③24×25cm、39頁 ④1,000円<br/>⑤発行所</p>                                                                                                                                                                                 |  <p><b>月刊「たくさんのがしき」<br/>394号 地蔵さまと私<br/>文・写真・田沼武能</b></p> <p>①福音館書店 ②2018年1月<br/>③25×19cm、44頁 ④667円<br/>⑤田沼氏</p> |
|  <p><b>ゼロの阿蘇 500日の記録</b><br/>長野良市</p> <p>①シーズ・プランニング ②2018年1月<br/>③25.7×18.2cm、144頁 ④2,000円<br/>⑤長野氏</p> |  <p><b>Design Scape</b><br/>林 明輝</p> <p>①山と溪谷社 ②2018年3月<br/>③29.7×29.7cm、128頁<br/>④3,700円 ⑤林氏</p>          |  <p><b>富山写真語 万華鏡</b><br/>291《高志の群像》川瀬映子 292国指定 重要有形民俗文化財 砥波の生活・生産用具<br/>293伏木測候所の百余年—塔屋復原 294《高志の群像》奥野達夫 295小水力発電<br/>296国登録有形文化財 小矢部市大谷博物館 297国登録有形文化財 清川市立田中小学校旧本館<br/>撮影・風間耕司</p> <p>①ふるさと開発研究所<br/>②2017年1月、3月、5月、7月、9月、11月、2018年2月<br/>③25×25.5cm、14頁 ④500円 ⑤風間氏</p> |                                                                                                                                                                                                      |

|                                                                                                           |                                                                                                              |                                                                                                  |                                                                                                |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                                                                                           |                                                                                                              |                                                                                                  |                                                                                                |
| <p><b>新宿御苑の四季<br/>撮影・散策ガイド</b><br/>木村正博</p> <p>①日本カメラ社 ②2018年4月<br/>③25.7×18.2cm、96頁<br/>④1,500円 ⑤木村氏</p> | <p><b>神饌 供えるこころ<br/>奈良大和路の祭りと人</b><br/>写真・野本暉房</p> <p>①淡交社 ②2018年3月<br/>③21×14.8cm、136頁<br/>④1,800円 ⑤野本氏</p> | <p><b>とっさ JAPAN!</b><br/>もちだあきとし</p> <p>①小峰書店 ②2018年3月<br/>③26.4×18.8cm、46頁<br/>④1,200円 ⑤発行所</p> | <p><b>ばんえい競馬 砂の軌跡</b><br/>太田宏昭</p> <p>①小学館 ②2018年3月<br/>③29.2×21.7cm、128頁<br/>④3,241円 ⑤太田氏</p> |

## 寄 贈 図 書

若林 傳殿 ..... 信州の四季 自然と生命への賛歌  
 風間耕司殿 ..... 富山写真語 万華鏡  
 276 七福神、277 NPO 法人つむぎ つむぎ俱楽部、  
 278 富山市民俗民芸村、279 とやまの絵手紙、  
 280 平和への祈り、281 『高志の群像』高柳謙治、  
 282 農家レストラン大門、283 古利・辻徳法寺 法宝物、  
 284 栃屋の森のギャラリー＆カフェ、  
 285 大伴二三彌ステンドグラス記念館、286 昭和レトロ体感、  
 287 『高志の群像』西宮正直、288 八尾の歌碑・句碑・文学碑、  
 289 富山の観音靈場と千社札、290 アートでまちづくり  
 石引まさのり殿 ..... 大東島 南と北のモノローグ うふあがり鳥 2006～2017  
 光村雅古書院殿 ..... 藤田一咲・CUBA ★ CUBA  
 幻冬舎殿 ..... 下村一喜・黒木瞳『タイムレス』  
 信濃毎日新聞社殿 ..... 塚原琢哉・60年前の記憶 遥かなる遠山郷  
 日本カメラ社殿 ..... 田嶋晴美・我野ニッコールクラブ殿 ..... ニッコール年鑑 2017-2018

交通新聞社殿 ..... 小林克己・JR 乗り放題きっぷの最強攻略術  
 ……白川保友・和田洋・JR 東日本はこうして車両をつくってきた  
 ……佐藤良介・なぜ京急は愛されるのか、田中正恭・プロ野球と鉄道  
 富士フィルムイメージングシステムズ殿 ..... 2017 富士フィルム営業写真コンテスト作品集  
 シュピーゲル写真家協会殿 ..... SPIEGEL 2017 65周年シュピーゲル写真集  
 JCII フォトサロン殿 ..... 井桜直美・明治 150 年記念 幕末・明治の古写真展「明治を築いた人々」  
 東京写真記者協会殿 ..... 第 58 回 2017 年報道写真展 記念写真集  
 東京都写真美術館殿 ..... 「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol.14」展  
 ……アジェのインスピレーション ひきつがれる精神  
 ……写真発祥地の原風景 長崎  
 ……第 10 回恵比寿映像祭 インヴィジブル [公式パンフレット]  
 ……『光画』と新興写真 -モダニズムの日本  
 ……W.ユージン・スミス・ユージン・スミス写真集

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。(50 音順)

### ■ 「2018年日本写真協会賞新人賞」受賞 平成30年6月1日



受賞者：奥山淳志（2016年入会）

写真集・写真展「弁造 Benzo」は、北海道の原野にひとり暮らす開拓農民弁造さんの控えめで濃密な日常空間をめくりながら、写真表現の新たな地平を開いた。その確かな手応えを感じさせる作品に対して。

### ■ 「第34回写真の町東川賞 飛彈野数右衛門賞」受賞 平成30年8月4日

受賞者：富岡畦草（1971年入会）

写真集『変貌する都市の記録』（白揚社、2017年）ほか、東京を定点観測で撮影し続けてきた活動に対して。

## 写 真 解 説

イーストウィン（表紙写真）—— 太田宏昭

2006年の暮れ、ばんえい競馬は存続の危機にありました。

私は消えてしまうかも知れない輶馬の姿を残しておきたい想いにかられ北の大地、帯広に向かいました。

それから10年、ばんえい競馬は続いています。この10年間撮り続けた集大成として2017年10月から2018年の1月末まで4ヵ月間、輶馬の古里フランス・ペルシユで開催。

3月に写真集『ばんえい競馬 砂の軌跡』を上梓しました。

（写真集『ばんえい競馬 砂の軌跡』）

ベンキのキセキ（表4写真）—— 宅間國博

「ほんの少し視点を変えれば、街中が美術館になる！」日本を始め、世界各地の街で見つけたベンキの軌跡を撮り溜めて、出版した写真集中の一枚です。タイトルの「キセキ」は、風雨にさらされたベンキが織りなす偶然の美を、軌跡と奇跡のどちらの意味にもとれるようにカタカナにしました。写真は、サイパンに撮影に行ったときにサーカス会場に停まっていたトレーラーの側面です。あまりの美しさに夢中になって撮っていると、「そんなもの撮らないで自分たちを撮れ」とサーカスの団員が次々と集まってきた。（写真集『ベンキのキセキ』）

◆ JPS ギャラリー

孤島の夫婦—— 石引まさのり

那覇から東へ360kmの洋上に浮かぶ南大東島は1900年まで無人島であった。不思議なことに、大東諸島は今でも沖縄本島に向かって年間10cmも移動している。いわば現代の「ひょっこりひょうたん島」なのである。こんな島に魅せられ撮影を始めて11年が経った。台風の時しか耳にしない大東島だが、この絶海の孤島にも逞しく生きる人々がいる。このご夫婦はサトウキビ作りを糧として50年。築100年を超える住まいと共に長い歴史を感じる。

新大阪の日常—— 吉永陽一

新大阪駅は東海道山陽新幹線と在来線の要衝であるとともに、伊丹空港へ着陸する旅客機が飛行する。私は新幹線と旅客機、ライバル同士を1枚の空撮写真に収めるべく、セスナ機で新大阪駅の上空へ飛んだ。

着陸間際の旅客機は低空で駅の真上を通過する。しばし待つと、ANAのDHC-8型機が飛来。さらに新幹線N700系も減速して現れた。千載一遇のチャンスだ。DHC-8型機とセスナ機は約2000mの高度差。400mm(35mm換算600mm)レンズで一瞬を狙う。地上の人々から新幹線とDHC-8型機まで、圧縮した世界を作り上げた。

阿蘇大橋建設現場と再開した阿蘇長陽大橋—— 長野良市

2016年4月16日、震度7.3を記録した熊本地震本震は阿蘇地域を孤立させた。そして地震発生からほぼ500日にあたる2017年8月下旬、橋本体が奇跡的に残った阿蘇長陽大橋が再開、阿蘇への動線の一部が復活した。見通しがきかないJR豊肥本線を除けば、3年後には復活する南阿蘇鉄道と阿蘇大橋の完成が、阿蘇の出入り口のインフラ整備の完成になる。写真は通行を再開した阿蘇長陽大橋と、崩壊した橋の下流800mで工事が進む阿蘇大橋の建設現場。（2017年10月4日撮影）

青い清流—— 阿部俊一

北海道の美瑛町にある「白ひげの滝」と美瑛川。白金温泉郷にあり、温泉成分の水酸化アルミニウムが川の水と混ざり一種のコロイドが生成され、太陽光がコロイド粒子と衝突錯乱して青色に見えると言われる。6月7月は雨量が少なく、水酸化アルミニウムの濃度が高いので水の色が一番青く見え、ブルーリバーが魅力的な時期となる。また、「白ひげの滝」は伏流水のため、冬に凍ることはなく雪景色の滝も魅力の一つだ。

サビールに集う少女たち。—— 平 寿夫

サビールとは、イスラームの喜捨による水飲み場のこと。イスラーム社会には沢山あります。特にイエメンのハドラマウト地方には、デザイン性に富んだカラフルな、それも一つとして同じものがサビールがあります。今回はそれらを紹介しつつ、彼らの生活的一面を撮影しました。この写真は、女の子たちが水飲み場で遊ぶ風景を撮ったものです。

DRY EARTH—— 桜井 秀

西部劇調の化粧品コマーシャル撮影でカリフォルニア州の映画「シェーン」を思い出すビショップの牧場でチャールズ・ブロンソンに出会い、アメリカ西部の虜になってしまった。毎度レンタカーを借りての2~3週間の撮影だが昨年で39回に及び、その間ルート66も一往復半走った。

この作品「DRY EARTH」はシェラネバダ山脈東部のデスバレー近く、ビーティと言う片田舎での作品だが、原住民の間で天使が住むと言ひ伝えのあるアメリカ西部はとても広く、乾いており静寂な空間である。

◆ FUJIFILM X ギャラリー

時空—— 小池キヨミチ

砂漠地帯に堆積された大地の歴史が地表に顔を出し、「今」の姿を目の前に広げ迫り寄る。雨、水の流れ、風、温度変動などがアンバランスな形状を作り出す中で、その不均等さが情景の中に何か有機的な強いエネルギーを感じさせる。

緒止め—— 太田 真

清水寺。舞台奥のお堂に銅鑼を鳴らすための緒があったが、鳴らすことを止めるためか、緒をロープで固定してあった。その白さが新しく、いかにも機械で綱われたロープ然として白々しい。麻で作られた年を経た緒とは対照的に見える。五色に染められて綱われた緒は五つの智慧を表すといわれている。幾多の老若男女が數いを求めて、その緒を握り締め銅鑼を鳴らしてきたことであろうか。緒の鈍く発する輝きが、その存在の歴史を表している。

レガシー村—— 夏目安男

中央区晴海に建設中のオリンピック選手村。オリンピックレガシー（遺産）として、選手村は高層マンション、住宅棟群になると。もとは、1940年開催の「紀元2600年記念万国博覧会会場」予定地だった。この東京万博は日中戦争激化で中止された。1959年に「東京国際見本市会場」として開場し、1996年まで東京モーターショーや企業イベントなどが行われてきた。見渡す限り続くフェンスの向こうはルーイン（遺跡）。今行われている選手村造りが、まるで「遺跡」の発掘現場のように見えた。

## セミナー研究会レポート

◆CP'2018 セミナー報告◆

### 過去から未来へのメッセージ 「後世に遺したい写真」

平成30年3月4日(日)

パシフィコ横浜 会議センター3F 303 参加者:150名  
飯沢耕太郎(写真評論家)・松本徳彦(JPS副会長)

セミナーは、みなとみらいギャラリーで同時開催中の写真展「後世に遺したい写真」に展示されている作品の解説を中心に、写真保存センターの意義と写真原板の収集の必要性についても説明された。

最初に松本副会長から、わが国における記録写真の保存・活用に関する状況と、日本写真保存センターを設立し写真原板の保存を開始した経緯などが説明された。

現在、公益社団法人日本写真家協会が文化庁の委嘱を受けて日本写真保存センターが活動を推進しており、この12年間で、明治以降の日本人の暮らしや住環境などを記録した写真等を、物故された写真家の遺族から、また現在も活躍されている写真家自身から、撮影してきた写真原板(ガラス乾版、フィルム等)を収集し、保存状態の良否、劣化の有無を調べ収集(寄贈、寄託)してきた。その数約30数万本以上を収藏してきた。これらから、撮影者を割り出し、いつ、どこで何が写されているか、を調査し記録している。整理の終わったものから遂次、相模原にある東京国立近代美術館所管のフィルムセンターの室温10℃、相対湿度40%に保たれた収蔵庫に移し長期保存を図っている。

今回みなとみらいギャラリーで展示しているプリントは、大正期から昭和期に至る激動した時代の約50年間の日本人の暮らしを捉えた写真と、文化財の記録を約100点展示している。作品の解説は、みなとみらいギャラリーで展示しているプリントについて、作品を年代別にスクリーンに映し出し、その時代の社会情勢や作品の客観的な感想を飯沢耕太郎氏が述べ、撮影した写真家の立場や撮影の状況、当時の苦労話などを松本徳彦が解説する、というスタイルで進められた。

写真には時代をあらわす様々な諸相が克明に記録されており、眼で見る日本人の歴史の断面と言える。写真のもつ記録性を具体的な形で知ることができ、過ぎ去った時代を写した画像を通して、歴史をひも解いてみることで、将来を考える手立てになればとの思いで、今回の展覧会は企画された。

(記・撮影／小池良幸)



### ◆第3回技術研究会報告◆

シリーズ:デジタル時代のモノクロプリント  
その2 デジタルネガモノクロプリント

平成30年3月26日(月)

JCIIビル6F会議室 参加者:62名  
講師:永嶋勝美(写真家、APA会員)

デジタル時代のモノクロプリントの2回目は印画紙を使う方法で、より深い黒と豊かな階調を得る研究会であった。

講師の永嶋勝美氏は1980年、デザイナー、アートディレクターを経て写真家に転向。ファッション、エディトリアル、静物を主とした広告写真を手掛ける。

1996年よりOHP  
フィルムを使った



デジタルネガの可能性を感じて研究開発に取り組み、2011年に「DGSM Print(以下DGSM)」として公開、2012年APIS国際シンポジウムで開発者として発表する。

永嶋氏はDGSMの開発意図を次のように語った。

「カラーでは色再現性やダイナミックレンジではフィルムを凌ぐほどに成長してきたが、モノクロに関してはフィルムおよび銀塩印画紙の階調表現や、シャドーの再現性に一歩及ばないところがある。モノクロで最も重要視される滑らかな階調表現とシャドー域の表現はデジタルで撮ったデータでも、最終プリントに銀塩印画紙を使うことでその足りないところを補うことができる。」そこでデジタル、銀塩の双方の特長を活かすことができるデジタルネガ制作技法をDGSMとして開発した。DGSMとはデジタルデータからインクジェットプリンターを使用して、必要なサイズと同サイズのDGSMネガを作り、印画紙に密着露光して仕上げる技法である。永嶋氏が異色なのは、DGSMの特許や実用新案ライセンスを取らなかったことにある。氏によればDGSMを世に広め、感材メーカー共々末永く共存していきたいからだという。

DGSM制作を行なうには、専用のプロファイルを使用してデジタルカメラのRGBカラー画像からネガ出力する。専用のプロファイルは、各社のネガ出力用フィルムと、各社のプリンターの出力特性に合わせて開発されている。

こうしてできたDGSMネガは密着露光で2号相当の印画紙に適した濃度となる。DGSMはフィルムからのプリントと異なり、引き伸ばしができない。従って印画紙サイズと同じサイズのフィルムが必要となるが、現在はA4サイズからB0サイズまでラインアップされており、作品制作上の成約はほぼないと言える。

さらに強調される重要なメリットは、一枚のネガから全く同一品質の作品、それも複数の作品が容易に得られることで、作家にとって画期的な生産性の向上が図れることにつながる。

(記／佐藤健治、撮影／藤井智弘)

## Topics

### “The 2nd Tsuneko Sasamoto Photographic Award, 2018”

Japan Photographers Society (JPS) awarded “The 2nd Tsuneko Sasamoto Photographic Award” to Mrs. Kimie Adachi. Mrs. Adachi had visited farm villages in Cambodia for 18 years. She photographed children who were shining their eyes and working in the villages that fallen into ruins by civil wars. She had impressed with the children who committed hopes to the future. Through holding her photo exhibitions and published photo books, she showed what she impressed by the children. JPS highly evaluated her achievements. The judges are Mr. Makoto Shiina, writer, Ms. Yoshino Oishi, photographer and a member of JPS, and Mr. Keisuke Kumakiri, photographer and the president of JPS. Mr. Shiina commented “Through the camera lenses, her eyes looked children who were rebuilding the muddy wounded country by young and new powers. Her achievement was the culmination of her works in Cambodia.” This award was founded in 2016 as the commemorating of long life, the 102 year old, with high photographic achievements of Ms. Tsuneko Sasamoto. The award has given and supported for the professional photographers over the 3 years’ carriers.

### “The 43th JPS Photo Exhibition, 2018” opened.

In this year, JPS photo exhibition travels starting in Tokyo, from May 19, at Tokyo Photographic Art Museum, in Nagoya, from June 19, at Nagoya Citizens Gallery Yada, and in Kyoto, from July 26, at the Annex of Kyoto Municipal Museum of Art. There were 6,104 photos from 1,841 applicants for the public photo contest section. From them, 491 photos were awarded. For the Young Eye section, that displays photos from 10 vocational photography schools, universities and colleges. The, JPS members’ section “Portfolio 2” consists of 106 photos from 53 members. The award of Culture, Sports, Science and Technology Minister’s Award, was given to Mr. Yasuyuki Tanaka’s “Life of the village”. The work consists a story by five pictures. The story shows old woman’s life, raising a cow, in the farm village in the city of Hitachiota, Ibaraki prefecture. The judge chairperson and the president of JPS, Mr. Kumakiri, commented “Recently, I read a book that wrote the Japanese was bound firmly by goods, time and information. By releasing from these three elements, we can have free and liberal lives. The work of Mr. Tanaka shows a hint for the simple life. Please see page 32 of this bulletin.

By Naoki Wada, Director, International Relations

## About the Japan Professional Photographers Society

The Japan Professional Photographers Society was established in 1950. Through its activities it strives to define the role of the professional photographer and secure copyright protection while working to develop photographic culture. In 2001 it received recognition as an Incorporated Body from the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, in March 2011 it was officially recognized as being a Public Interest Incorporated Association by the Prime Minister's office, and since April 1 of that year it has been active under the title, Japan Professional Photographers Society, Public Interest Incorporated Association.

Since its foundation, the society has succeeded in receiving an extension for the period of copyright protection (to 50 years after the death of the artist), held numerous exhibitions concerning photographic history and expression (A Century of Japanese Photography, History of Japanese Contemporary Photography, Sixty Years of Japanese Children, Women, etc.), and published numerous books on photographic history and collections of photographs. In order to contribute to the promotion and development of photographic culture, it holds the JPS Exhibition as an open exhibition, presents a nationwide Photography Study Pro-

gram for elementary school students, the Photo Forum that aims to develop photographic expression, Digital Photography Lectures for the advisors of high school photographic clubs, and presents the Yonosuke Natori Photographic Award to uncover and foster new talent. At the same time, it carries out a wide range of activities to contribute the development of photographic culture, such as: cultural exchange with overseas photographers, PR through publishing and information dissemination via the Internet.

Furthermore, it presents the Japan Professional Photographers Society Award in recognition of individuals or organizations who have achieved notable achievements in the development of photographic technology, education, or critique.

The Japan Professional Photographers Society has devoted itself to the establishment of photographic museums, such as the Tokyo Metropolitan Museum of Photography, and is currently actively working towards the creation of the ‘Japan Photographic Preservation Center’ (archive) for the collection and preservation of original photographs.

### Japan Professional Photographers Society

JCII Bldg. #303, Ichibancho 25, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082

Tel: +81-3-3265-7451 Fax: +81-3-3265-7460

E-mail: info@jps.gr.jp Web site: <http://jps.gr.jp/int/index-e.html>



### 中尾 たかし 正会員

平成 28 年 5 月 28 日、大腸ガンのため逝去。67 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(昭和 51 年入会)

#### 「我ら写真学友」

親友・中尾孝くんの葬儀が徳川将軍ゆかりの大本山・増上寺で彼が取締役会長をしていた株式会社日東の社葬として厳かに執り行われた。写真専門学校を卒業した後、フリーカメラマンとなり、20代で日本写真家協会の会員になった彼は、週刊誌のエースカメラマンとして、当時の時勢や時の人を勢力的に取材した写真を発表しつづけていた。又、個展を催したりと、現役バリバリの写真家として活躍していた。そんな時、会社経営者でもあった父親が病に倒れ、父の跡を継ぐ運命となった。彼の心中を察すると、そこには葛藤があったであろうが、写真の才能のみならず、経営者としての手腕を發揮し、彼は先代の会社をさらに大きく発展させた。今後の会社をいざれ一部上場企業にしたいと意気込んでいた彼の目の輝きが忘れない。生前の本人の希望であったのである。葬儀会場の控えの間はまるで写真ギャラリー会場のよう。写真を志した写真学校の頃の作品から、フリー時代の代表作、社員との交流シーン、家族で旅した写真等で構成されており、それを見ると経営者となりながらも、写真家魂を持ち続けていたことがうかがえた。彼とは写真学校の同期として出会い、以来 50 年の付き合いとなる。思い起こせば、がむしゃらに写真も撮ったし、よく遊んだ。当時、保守的な写真表現の僕に対し、彼の写真は革新的。ふたりの事をよく知る先輩からは、「お前たちふたりで一人前だな。ふたりが一緒になったぐらいが丁度いい」と言っていたのが懐かしい。「林が写真をやってる限り、俺もやめないと」。そう言ってお互いを鼓舞していたのを思い出す。来世は写真家同志のライバルとしてまたやっていこう! 合掌

林 義勝



### 南川 三治郎 正会員

平成 30 年 2 月 6 日、急性心不全のため逝去。72 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(昭和 47 年入会)

#### 南川三治郎君を偲ぶ!

山口 勝廣

南川三治郎さんが 2 月 6 日、急性心不全で亡くなったとの知らせが入った。

「えっ、彼は写真家の仲間たちと 2 月 6 日からの『ギャラリー E&M 西麻布』の『monochrome XVI』に出演し、オープニングパーティーにも参加しているはずでは」と聞き返した。たまたま、小生は 6 日から紀伊和歌山取材に出たこともあり、突然の訓話を聞き思わず息をのみ込んだ。

彼は出版社時代の後輩であり、小生がフリーになる前の一周年、写真部と一緒に活動した。身体が大きく角刈りの頭でいつも快活に活動をしていた姿が浮かぶ。JPS や出版記念会などで会えば、「ああ、お元気ですか」と手を差し伸べ、力強く握手をしてくれたものだ。

当時、社は女性出版社が主流で、自分はマスコミ関係の仕事がしたいと大宅社一について熱く語り、「大宅社一東京マスコミ塾」の開講と、勤務と受講時間が重なり、「どうしたものか?」と相談を受けた。入社早々の彼の懶みと思え、出社時間など、直行取材に出てることにして対応し、応援をした記憶が蘇る。第一期生として出世し、その後の彼の作家活動が大きく飛躍した。

行動的な彼は、ヨーロッパを中心して写真作家活動を展開、「アトリエの巨匠たち」(朝日ソノラマ)、「ヨーロッパの窯業と焼きもの」・「景徳鎮窯の焼きもの」(美術出版社)、「アトリエの画家たち」(朝日新聞社)、「推理作家の発想工房」(文藝春秋)、「アートオルセ美術館と印象派の旅」(新潮社)、「聖地伊勢」(中日新聞社)等、多数の写真集や「日・欧巡礼の道」(辰巳編)・「熊野古道(鏡座和光)」・「日・欧巡礼の道」(辰巳編)・カミノ・デ・サンティアゴなど、国内外で多くの写真展を開催した。

また、仏灘在取材中に自動車事故に遭い大怪我、再起不能と思われたが不屈の精神で再起、毎年志賀高原で開催される「JPS スキーの集い」に参加、足を引きずる身体で、怪我以前より凄いスピードと見事なフォームで滑り降り、周囲を唸らしとさせたこともあった。今思えば、全て昨日のことのようであり冥福を祈るばかりである。

(合掌)



### 川村 越夫 正会員

平成 30 年 2 月 10 日、多臓器不全のため逝去。75 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(昭和 52 年入会)

#### 長いお付き合い、尽きない思い出…

永野 一晃

2 月 10 日の朝、奥様からの電話で計報を知りました。川村さんとは約 50 年近くのお付き合いです。当時日参していた出版社で知り合い、写真の事、そうでない事、いろいろ教えて貰いました。比叡山の回峰行の撮影に同行しながら、お寺の決まり事を知り、モノクロプリントの仕上げも御指導いただき、雑誌の取材もご一緒にいたしました。

JPS 展運営にかかるなど、積極的に活動され、京都よみうり写真クラブの創設時には故・井上隆雄さんとともに苦労され、講師も JPS 会員を中心に新しい写真クラブを目指し、優しくて厳しい講評は、昨年 9 月まで変わりなく続けておられました。23 年間、毎月 1 回はクラブの例会でお会いしていました。10 月に血管の手術を受けリハビリに励んでおられましたが、12 月に再び体調を崩されて、そのあと多臓器不全などに陥り、2 月の初旬に奥様から連絡をいたいでお見舞いに伺い、言葉は交わせませんでしたが目線はしっかりとおられました。

最後のお別れの時のお顔は本当に安らかでした。川村さんの教えや精神は忘れることなく触れ合った人たちの心には残っていくと思います。長いお付き合いに感謝いたします。合掌。



### 河合 肇 正会員

平成 30 年 2 月 4 日、脳梗塞のため逝去。85 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(昭和 36 年入会)

#### 河合肇先生を偲ぶ

足立 寛

2 月の連休後、河合肇先生が亡くなり家族葬が済んだ旨の知らせがあった。河合先生(以下先生)との出会いは 1972 年 9 月、アシスタントになるためにスタジオを訪れた時だった。当時先生は 30 後半で、既にファッショントレーナーとしてのトップクラスの地位にあり、アシスタントとして約 4 年半在籍した。

当時アシスタントは絶えず着用者や撮影スタッフが訪れ、売れっ子モデル、大女優、著名人等の撮影がほぼ毎日あり、多忙な日々が続いていた。先生は写真に対し自分の撮影意図に反することは一切の妥協を許さず、小道具なども自ら探し歩いて用意していた。撮影に対する厳しさであったが、その中に優しさも併せ持ち、アシスタントに対しては「写真を撮りなさい、機材やスタジオは自由に使って構わない」と声を掛けてくださった。

アシスタントとして私は絶えず怒られ、注意されることが多く心が折れそうになつた時もあった。そのような時、奥様から「先生は、見込みのない人は怒らないで頑張りなさい」と言葉を掛けられ、気持ちが解き放られたことも思い出す。

独立してフリーとなる際には先生自ら大手出版社編集部へ私を伴い、様々な雑誌の編集者の紹介や、挨拶文も書いて頂いた。

フリーの写真家になり、依頼される雑誌や広告の仕事をこなしていたが、そのうちに何も知らない人間が本物の写真家になるのか? という気持ちとなつた。それを先生に伝えたところ、「本物を見なさい、世界を見るといいよ、勉強を怠らないように」との言葉があり、後にニューヨークへ行くきっかけとなつた。帰国してからも大きな仕事を紹介していただくななど、私の写真人生に大きな道を示してくださったことには、感謝申し上げる以外の言葉は思い当たらない。

2 月下旬、兄弟子に当たる東京カラーワーク芸社の水谷氏を含め門下 5 人で弔問にご自宅を訪れたが、遺影を前にして先生に優しく接していただいた事柄ばかりが心に浮かび、感謝の気持ちを込めてご冥福を祈っていました。合掌



## 越間 誠 正会員

平成 30 年 3 月 2 日、逝去。  
79 歳。  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(昭和 49 年入会)

### 鹿児島写真界の巨星 越間先輩に捧ぐ

浜田 太

79 年の生涯の中で、60 余年に亘って奄美群島にこだわり定点記録されてこられた越間誠さんが、3 月 2 日逝去されました。

私が、越間さんのことを初めて知ったのは、高校生の頃。私の生まれ故郷の小さな村のおばさんや、手ぬぐいをかぶりカゴを担いで野良仕事に出かける日常の写真が、地元新聞に掲載された時の事です。小さな村は大騒ぎになったことが、写真家越間さんの作品との初めての出会いでした。奄美にもこのような写真を撮影する方がいることに、衝撃を受けた事を今でも覚えています。小さな村では、写真はまだまだ身内の記念写真として撮るものだという認識が定着していた時代です。

越間さんは、昭和 28 年奄美が日本復帰して間もない昭和 30 年代、人々の生活は貧しいながらも奄美らしさがまだ色濃く残っている時代、いち早く民俗写真に目覚め、失われゆく奄美らしさを撮影し始めたと、ご本人から伺ったことがあります。都会では高度経済成長期が始まり、カメラが庶民に普及し始めた頃ですが、地方ではカメラはまだまだ高価な時代です。

昭和 40 年代は、高度成長期真っ只中、カメラマンや写真家という職業は、当時の若者にとって憧れの職業の一つ。私もその一人で写真家を夢見ていたくち、越間さんへの憧れと、その背中を追いかけきました。このような私たち後輩にも暖かい眼差しで見守って下さいました。

60 余年という正に生涯を賭けた時間、一貫して奄美群島にこだわり定点撮影されて来られた著作は、2 冊の写真集「奄美静寂と怒濤の島」「奄美二十世紀の記録」として結実しています。これらの作品は昭和・平成の記録と記憶として永遠に残る事でしょう。越間さん、お疲れ様でした。そしてありがとうございました。

心からご冥福をお祈りします。合掌。

## 編集後記

◎大阪での定期会員総会が満りなく終了した。総会の書記は関西地区委員会の生原良幸会員、写真撮影は同じく関西地区委員会の二村海と後藤剛の両会員が担当してくれた。皆様に「有難う」と言いたい。8 年ぶりの関西での総会は記録として、また思い出として残る。

(桑原)

◎2020 年に JPS は創立 70 周年を迎える。節目毎の周年事業では、これまで様々な写真展の開催を行ってきたが、今回は懸案となっていた 1985 年以降の日本の現代写真史をまとめた歴史書「日本の現代写真」の発行と写真展の開催を決めた。今号の座談会では編纂委員の方々に、この事業の方向性についてお話を伺った。(小池)

◎6 月 1 日の新聞に「キヤノン、フィルム機終了」の見出しが出た。5 月 30 日にキヤノンで唯一のフィルムカメラの出荷を止めると書いてあった。富士の黑白フィルム販売終了と合わせて、フィルム写真でプロの道を歩み始めた私には、一抹の寂しさと共に 180 年の写真の歴史上、大きな転換点に立ち会っている臨場感を感じる。(飯塚)

◎小梅線を旅してきました。自宅から 3 時間で清里に到着。何故、学生時代はこれほど近い場所に夜行便車で出かけていたのか不思議な気持ちになったのですが、その頃はまだ遠くに行きたくて夜行に乗つていてのかもしれません。今の中里は、昔ながらの牧歌的な風景を再発見できます。久しぶりに無心にシャッターを切りました。

(池口)

◎先日写真好きが集まってワイワイガヤガヤと写真について話をしていた。最近は新しいカメラやアサヒサーなど新機種が色々発表される中、機材話ではなく写真についてとことん話ができる。写真についての話をできる仲間がいる事に感謝。また、横浜で行われる、「2018 年ねご写真展」に参加いたします。(川上)

◎2 月に開催された平昌五輪、スピードスケート 500m の小平奈緒さんの風格、団体バシュートを先導する高木美帆さんの強さ、澤藤五月さんからリング女子の健闘など、女子選手の活躍が印象に残る大会でした。それにしてもカーリングって奥が深そうな競技ですね。いつか、機会があれば生で観戦してみたい。(関)

◎所属する日本建築写真家協会では、「銀座通り」のパノラマ写真を再び撮影します。~ 8 丁目の街並みを昼景と夕景で撮影し、前回 2006 年の撮影では長さ 28m のパノラマ写真に仕上げ、東京・品川のキヤノンオーブンギャラリーで展示(2007 年)しました。はたして、10 年超えの時を経た「銀座通りはどうなったのでしょうか?」(小野)

◎高齢運転者による交通事故の報道が増えていますが、その一方で最近運転していく感じるのは、方向指示ナンバーに車線変更したり、まっすぐ走ることのできない運転者が増えていることです。21 世紀もまだなく 20 年になろうとっていますが、自動運転等のテクノロジーで解決できる日が早く来る事を願わざにはいられません。(小城)

◎春はカメラショーの季節、CP\*が終わると、4 月には韓国ソウルで P & I、5 月には北京で China P&E などが開催されている。そして来

## 経過報告(2018年2月～2018年4月)

◎2 月 7 日 page2018 オープン・イベント「日本写真保存センター」セミナー

PM1 : 30 ~ 4 : 30 池袋サンシャイン文化会館 参加者 67 名

◎劣化したフィルムへの対策 あなたのフィルムは大丈夫ですか! -

◎2 月 8 日 著作権研修会

PM1 : 30 ~ 3 : 30 JCII 会議室 参加者 15 名

◎インターネット上の著作権侵害 JNS 上の侵害について

◎2 月 16 日 第 2 回著作権研究会(関西)

PM2 : 00 ~ 4 : 30 大阪・メトライフ本町スクエア会議室 参加者 64 名

◎富士フィルムフォトサロン大阪 入場者 3,464 名

◎2 月 19 日 第 2 回技術研究会

PM2 : 30 ~ 4 : 30 JCII 会議室 参加者 84 名

◎シリーズ: デジタル時代のモノクロプリント その 1 インクジェットプリント

◎2 月 20 日 新入会員入会資料審査会

AM10 : 00 ~ 14 : 00 JPS 会議室 11 名

◎2 月 26 日 三団体懇談会

PM6 : 00 ~ 8 : 00 一般社団法人日本写真文化協会

◎2 月 27 日 第 2 回国際交流セミナー

PM2 : 00 ~ 4 : 00 JCII 会議室 参加者 43 名

◎写真家と AI の第一歩

◎3 月 1 日 ~ 4 日 「後世に遺したい写真」日本写真保存センター写真展

みなとみらいギャラリー 入場者 6,828 名

◎3 月 4 日 CP\*2018 セミナー

PM1 : 00 ~ 2 : 30 バシフィコ横浜会議センター 303 参加者 150 名

◎過去から未来へのメッセージ「後世に遺したい写真」

◎3 月 5 日 第 4 回公益社団法人日本写真家協会理事会

PM2 : 00 ~ 3 : 50 JCII 会議室 19 名、欠席 1 名、監事 2 名、欠席 1 名

◎第 1 号議案: 平成 30 年度事業計画案の件 第 2 号議案: 平成 30 年度取支予算案の件 第 3 号議案: 创立 70 周年記念事業積立金の件、第 4 号議案: 資金調達及び設備投資の見込みの件 第 5 号議案:「公益社団法人日本写真家協会定款」一部変更の件 第 6 号議案:「役員の報酬並びに費用に関する規程」等の一部変更の件 第 7 号議案: 平成 30 年度新入会員承認の件、他

◎3 月 26 日 第 3 回技術研究会

PM2 : 30 ~ 4 : 30 JCII 会議室 参加者 62 名

◎シリーズ: デジタル時代のモノクロプリント その 2 デジタルネガモノクロプリント

◎3 月 30 日 第 4 回技術研究会

PM2 : 30 ~ 4 : 30 大阪市立総合生涯学習センター第 1 研修室 参加者 43 名

◎動画も撮れる写真家になろう~写真家のための動画基礎講座~

◎4 月 2 日 平成 30 年度新入会員説明会

PM1 : 30 ~ 6 : 30 JCII 会議室 新入会員 31 名、役員 12 名、委員 15 名、賛助会員 22 社 40 名

◎4 月 11 日 第 1 回国際交流セミナー

PM2 : 00 ~ 4 : 00 JCII 会議室 参加者 46 名

◎香港の今、写真家アンドリュー・ウォン

年から、これにフォトキナが加わる。隔年開催だったフォトキナは今年が最後だ。毎年 5 月に開催されるフォトキナは、市場や他国のカメラショーにどんな影響を及ぼすのだろうか。(柴田)

◎早いもので、今年も半分過ぎました。

今年の後半の写真界の話題は、CANON と NIKON のフルサイズミラーレスの発売になるはずです。先日の大阪での総会懇親会で NIKON の某氏が、ミラーレス、今年中に発売と明言しました。デジタルカメラが一般化して数年、またまた新しい時代の始まりです。(伏見)

◎取材で数年使ったデジタル一眼レフを分解整備してもらおう。サービスマンのドライバーは躊躇することなく、一気にネジを緩めにかかり、三枚おろしのごとく、愛機はバラバラに。消耗品を交換して、組み上げていく過程はステーターや治具を使って慎重に進む。デジタル製品と言つても、ロボットが組み上げるのでなく、最後は指先一つで精度が決まる。その流れのような所作は、見ているだけで動きもなかつた。(桃井)

◎付度。仕方ないがこうしておけば相手は満足し、自分の立場も安泰だという心理や行動が下方に伝播していく。付度される側にその意識が薄いのが厄介だ。具体的な指示がなく物事が軋がり、保身のため誰も声を上げようがない。こうした風土をなくすには、物事を「真っ当に」判断できるトップを置き、背中を見せていくしかない。(山縣)

## 日本写真家協会会報 第168号(年3回発行) 2018年6月20日 印刷・発行 ◎編集・発行人 熊切圭介

URL <http://www.jps.gr.jp/> Email [info@jps.gr.jp](mailto:info@jps.gr.jp) 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

頒布 1カ年・3回 3,500円(消費税・送料共込)

出版広報委員 桑原史成(理事)、小池良幸(理事)、飯塚明夫(委員長)、池口英司(副委員長)、小野吉彦、川上卓也、小城崇史、柴田 誠、関 行宏、伏見行介、桃井一至、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会 (JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCIILビル303 電話 03(3265)7451(代表) FAX 03(3265)7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋 MKビル 電話 03(3265)0611(代表)

**RICOH**  
imagine. change.

# “フルサイズのK”は、 Mark IIへ。

高解像と高感度の高いレベルでの両立

- PRIME IV & アクセラレーターユニット
- 有効約3640万画素
- 最高ISO 819200
- リアル・レゾリューション・システムII

**PENTAX**

**K-1 II**

主な  
機能

- 35ミリフルサイズイメージセンサー
- ローパスセレクター
- 5軸5段のボディ内手ぶれ補正機構SR II
- 防塵・防滴構造
- アストロトレーサー
- フレキシブルチルト式液晶モニター 等

株式会社リコー

リコーアイメージング株式会社

お客様相談センター:0570-001313(ナビダイヤル) または03-6629-9220 [www.ricoh-imaging.co.jp](http://www.ricoh-imaging.co.jp)



## 撮影した瞬間に、著作権は生まれます ～著作権は無方式主義～

クレジットを入れ忘れてしまったから、  
データをすべて渡してしまったから、  
そんなことで著作権が失われたと思っていませんか？

著作権は何の登録もなく、撮影した瞬間に生まれ、  
譲渡する契約がなければ、  
いつでもあなたに保持されています。  
そして、写真は時を経て、価値が上がる珍しい分野です。

写真家として一生をおくる時、  
著作権はあなたの**強い味方**になるでしょう。

## 写真著作権を大切に。

一般社団法人日本写真著作権協会(JPCA) 〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCIIビル3階

〔正会員団体〕 公益社団法人日本写真家協会／公益社団法人日本広告写真家協会／一般社団法人日本写真文化協会／日本肖像写真家協会  
一般社団法人日本写真作家協会／全日本写真連盟／一般社団法人日本スポーツプレス協会／日本自然科学写真協会  
日本風景写真協会／公益社団法人日本写真協会（以上、10団体）

この広告は、公益社団法人日本複製権センターからの分配金による公益事業の一環として制作されています。



**HORIUCHI COLOR  
FINE ART PRINT SERVICE**

## デジタル銀塩プリントを極める ネットdeザ・プリント

銀塩の表現力を最大限に活かしたラムダプリントで、作品表現に最適な組み合わせが選べ、ドライマウント・マットパネル・アルミフレームのパネル加工も同時に注文できます。

### プリント

- ペーパー：コダックプロ、メタリックの2タイプ
- サイズ：六ツ切～B1までの19タイプ
- フチ取り：白フチ、黒フチ、フチなしの3タイプ

### パネル加工

- 高級アルミフレーム  
(額縁/シルバー、ブラック)
- マットパネル（オフホワイト、ブラック）
- ドライマウント

## 銀塩フォトブックを極める ネットdeザ・フォトアルバム

多彩な編集機能と仕様でさまざまな用途に合わせ、表紙はハードとソフト、本文は高品質銀塩写真、見開きはフルフラット仕様の製本で高級感溢れる銀塩フォトブックができます。

### 《PRO》シリーズ

- 高級写真タイプ：銀塩光沢印画紙+液ラミ
- サイズ / ページ：160SQ、A5、197SQ、A4  
10～50p
- カバー：ソフト（ブックケース付）  
ハード（くるみ表紙）

### 《ENJOY》シリーズ

- 高級精細印刷タイプ：表紙 / マットPP加工
- サイズ / ページ：200SQ、A4 / 20～50p
- カバー：ソフト（並製本）、ハード（上製本）

## インクジェット・プリントを極める ファインアート・プリントサービス

作品イメージを極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数の7種類のアーティスト用紙でご提供します。

それぞれの個性と美しさをお楽しみください。

繊細さと優雅さが特長の

### 《ハーネミューレ・ファインアート》

- ファインアート・パライタ／フォトラグ

インクの重なりが表情豊かに仕上げる

### 《ヴァンヌーボ》

- ファインアート・ヴァンヌーボ SW

シャープネス、画像再現性に優れた

### 《イルフォード・ファインアート》

- ゴールドファイバーシルク／  
ゴールドコットンスムース

柔らかで優しい印象に仕上げる

### 《伊勢和紙 Photo》

- 雪色／芭蕉

個展・グループ展などの開催を受付けています



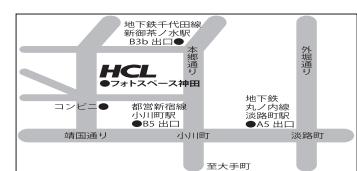
### HCL フォトスペース神田

- 東京都千代田区神田小川町2-6-14 ☎(03)3295-2191  
 ●平日=9:00～18:00 ●第1・3・5土曜=9:00～17:00  
 ●最終日=9:00～16:00  
 ●休館日=第2・4土曜・日曜・祝日・年末年始  
 ●都営新宿線「小川町駅」B5出口より徒歩5分



### HCL フォトギャラリー名古屋

- 名古屋市中区錦1-11-20 大永ビルディング 2F ☎(052)211-6151  
 ●平日=9:00～18:00 ●土曜=9:00～17:00  
 ●最終日=9:00～13:00 ●休館日=日曜・祝日・年末年始  
 ●地下鉄鶴舞線・東山線「伏見駅」10番出口より徒歩1分



## 株式会社 堀内カラー

- トイメーディングセンター（トイアート）  
 東京都千代田区神田小川町2-6-14 ☎(03)6854-9581  
 フォトイメーディングセンター  
 東京都渋谷区神宮前3-41-6 ☎(03)3479-5351

### 名古屋営業所

- 名古屋市中区錦1-11-20 ☎(052)211-6151  
 関西営業部  
 大阪市北区万歳町3-17 ☎(06)6313-2351

**Canon**  
make it possible with canon

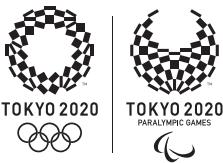
# POWER OF FIVE



## あなたの写真に新しい力を。

○[約3040万画素・35mmフルサイズCMOSセンサー]その場の空気感、臨場感まで描写。○[常用最高ISO感度32000(拡張ISO102400)]高画素化・高感度化、表現領域を拡大。○[61点高密度レティクルAF II]全点F8測距対応、AIサーボAF III、EOS iTR AFを採用。○[最高約7コマ/秒の高速連写]連續的な動きの中にある決定的瞬間を記録。○[4K対応のEOSムービー]フルHD・60P記録、HD・120Pハイフレーム動画も可能。○[デュアルピクセル CMOS AF/タッチパネル]快速かつ直感的なライブビュー撮影を実現。○[視野率約100%の新光学ファインダー/防塵・防滴性能]操作性と信頼性をさらに追求。○[Wi-Fi機能/NFC対応/GPS内蔵]撮影スタイルの可能性を拡大、多彩な通信機能を搭載。

# EOS 5D Mark IV



◎EOS 5D Mark IVスペシャルサイト  
[canon.jp/5dmk4](http://canon.jp/5dmk4)



◎キヤノンお客様相談センター

デジタルカメラ **050-555-90002**

[受付時間]

平日・土・日・祝日 9:00～18:00  
(1/1～3は休ませていただきます。)

※海外からご利用の方、または050からはじまるIP電話番号をご利用いただけない方は043-211-9556をご利用ください。※受付時間は予告なく変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

東京2020ゴールドパートナー  
(スチルカメラ)



# ミラーレスに新たな風を。

これまでにない美しさとやわらかなボケ味。

目指したのは高画質と小型軽量の両立。

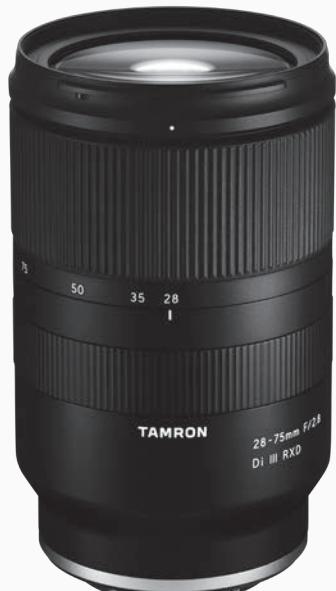
世界を鮮やかに写す。



28-75mm F/2.8 Di III RXD

for SONY full-frame mirrorless (Model A036)

ソニーEマウント用 Di III:ミラーレス一眼カメラ専用レンズ



**TAMRON** [www.tamron.co.jp](http://www.tamron.co.jp)

## エプソンイメージングギャラリー エプサイトのご紹介

# GALLERY

Gallery For Photography Enthusiasts

### 写真好きが集い、作品を発表・販売できる公募型ギャラリー

写真愛好家の皆さんにより多くの活動の機会をご提供する「ギャラリー」。ここでは公募による作品展を主に開催します。  
毎年4月と10月に作品を募集し、選考は外部識者を加えた選考委員会によって行います。  
インクジェットプリントの作品であれば、応募資格は問いません。



# PRIVATE LAB

First-Class Digital Darkroom Rental

### デジタルプリントに最適なレンタル工房

最新のパソコン・プリンター・スキャナーがそろい、  
カラーマネジメント環境が整ったレンタル工房「プライベートラボ」を、  
2部屋ご用意。ゆったりとしたスペースで、最大1600mm幅の  
大判プリントが制作可能です。用紙ラインアップも充実。  
お客様ご自身によるプリント制作を存分にお楽しみいただけます。  
※JPS会員様向け特別価格をご用意しております。



# PHOTO SEMINAR

Training Seminars To Improve Your Inkjet Prints

### レベルやスタイルに応じて学べるプリント講座

デジタルプリントに関するさまざまなセミナーを開催しています。  
エプソン製品の使い方を知りたい、基礎から写真のレタッチを楽しみたい、  
撮影からプリントまでじっくり学びたいなど、  
皆さまの声に応じた多彩なカリキュラムをレベル別にご用意。  
あなたのスタイルにフィットする講座が見つかるはずです。



# SHOWROOM

See, Touch, And Try At Epson Showroom

### 「見る」「触れる」「試す」を可能にしたショールーム

エプソン製品の展示、ご相談スペースです。  
製品に触れ、サンプルプリントをじっくりご覧いただけます。  
デジタルプリントにまつわるさまざまな疑問を  
解決するためのイベントも開催しています。



「エプソンイメージングギャラリー エプサイト」は、写真プリントの楽しさを体験できるスペースです。  
ギャラリー、プライベートラボ、フォトセミナー、ショールームをご用意してお待ちしております。

### エプソンイメージングギャラリー エプサイト

〒163-0401

東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル1F

TEL : 03-3345-9881 FAX : 03-3345-9883

開館時間 10:30~18:00

休館日 日曜日・夏期・年末年始

入場無料 <http://www.epson.jp/epsite/>



東京メトロ丸の内線「西新宿駅」2番出口より徒歩4分  
都営大江戸線「都庁前駅」A1出口より徒歩2分  
JR・小田急線「新宿駅」西口より徒歩8分  
※JR新宿駅西口改札からは、ロータリー右斜め前方へ進み、都庁に向かう動く歩道を抜けた右側の黒い高層ビルが新宿三井ビルです。



## 光沢プリントに適した染料プリンター ～新開発のColorio V-editionシリーズ～

「染料インクは作品制作には適さない」。エプソンはそんな従来のイメージを覆す染料インク採用の「Colorio V-edition シリーズ」を開発しました。顔料インクで起こるブロンジング（用紙表面の質感の変化）のないプリントが可能で、とくに「写真用紙クリスピア＜高光沢＞」と組み合わせたときに光沢感の強い作品が得られます。もちろんモノクロ作品にも対応しています。

### ◆光沢作品に適した染料インク

インクジェットプリンターで使われるインクには「顔料インク」と「染料インク」の二つのタイプがあることはよく知られています。

顔料インクはエプソンのプロセレクションシリーズや大判プリンターシリーズなどでおなじみです。色材（顔料）が溶液に粒の状態で混ざっているのが顔料インクの特性で、プリンターヘッドから射出されたインク滴に含まれる色材は、用紙に染み込まずに表面にとどまる性質を持っています。顔料インクは耐オゾン性および耐光性に優れているため、長期展示やアーカイバルも含めた長期保存にも適します。

一方の染料インクは色材（染料）が溶液に溶け込んだインクで、発色が鮮やかという特徴があり、エプソンのカラリオシリーズで採用されています。インク滴は用紙の内部に染み込むため、普通紙などへのプリントでは滲みが発生することもあります。

表に示すように両者にはそれぞれ特徴がありますが、作品作りから見た大きな違いのひとつがプリントの光沢感です。顔料インクは色材粒子が用紙表面にとどまるため、インクが多く乗ったところと少ないところで用紙表面の質感に差が生じます（「ブロンジング」と呼びます）。エプソンではインクや用紙の改良を通じてブロンジングの低減に努めていますが、顔料インクでは原理的にどうしても発生する現象です。

対して染料インクは色材が用紙内部に染み込むため、用紙表面の質感が損なわれることはありません。エ

プソンの「写真用紙クリスピア＜高光沢＞」のような光沢用紙を使えば、銀塩時代におなじみだったフェロタイプ仕上げのような光沢プリントが得られます。

### ◆高画質なColorio V-editionシリーズを開発

光沢プリント作品を高画質で制作したいというニーズに応えて、エプソンが2017年8月に発売したのが、新たにColorio V-editionシリーズとしてラインアップした「EP-50V」（A3ノビ）、「EP-30VA」（A4多機能）、および「EP-10VA」（A3多機能）の3機種です。

搭載インクは染料タイプの「Epson ClearChrome K2インク」。シアン、マゼンタ、イエロー、ブラックに、レッドとグレーを追加した6色構成で、これまでのカラリオの中ではワンランク上の画質と色再現性を実現しました。ブラックインクとグレーインクを搭載して

**EP-50V**

●印字方式 / 最高解像度 MACH 方式 / 5760 × 1440dpi\*1 ●インク 6 色、染料、独立型インク（ブラック、シアン、マゼンタ、イエロー、グレー、レッド）●対応用紙 単葉紙（ASF）サイズ カード / 名刺 / 1/2 判 / 1/4 判 / KG / ハイビジョン / 六切 / 四切 / A6 縦～A3 ノビ縦 ●インターフェイス（ネットワーク含む）\*2 Hi-Speed USB × 1、10BASE-T/100BASE-TX、IEEE802.11b/g/n ●外形寸法(W×D×H)取扱時 476 × 369 × 159(mm)●質量（インクカートリッジ、電源ケーブル含まず）約 8.5kg\*1

\*1: 最小 1/5760 インチのドット間隔で印刷します。  
\*2: ネットワーク接続において、Wi-Fi Direct®と有線 LAN および、Wi-Fi Direct®と無線 LAN（インフラストラクチャ接続）については同時利用可能です。

いるため、プロセレクションシリーズに匹敵する色転びのないモノクロプリントの制作も可能です。

用紙は、光沢の「写真用紙クリスピア＜高光沢＞」や「写真用紙＜光沢＞」、落ちていた微粒面の「写真用紙＜絹目調＞」のほか、染料インクが一般に苦手とする「Velvet Fine Art Paper」などにも対応。

インク滴の大きさをきめ細かく制御する「Advanced-MSDT」(マルチ・サイズ・ドット・テクノロジー)や、最新の色生成テクノロジー「LCCS」(ロジカル・カラー・コンバージョン・システム)など、プロセレクションシリーズと同様のテクノロジーを搭載し、高品質な作品作りのニーズに応えています。

なお、これまでの染料インクには、褪色しやすい、水に弱い、といった課題がありましたが、弛まぬ改良によって、「Epson ClearChrome K2 インク」では耐光性 50 年、耐オゾン性 10 年、アルバム保存 300 年<sup>[\*]</sup>を謳っているほか、プリント後の耐水性も向上させています。

### ◆コンパクトかつ低成本も実現

Colorio V-edition シリーズの中で写真家の皆様にお勧めしているのが A3 ノビまでの作品制作が可能な「EP-50V」です。トレイ収納時のサイズは 476 × 369 × 159mm ときわめてコンパクトで、同じく A3 ノビに対応した SC-PX5V II に比べて収納時体積はおよそ半分になっています。



EP-50V でのプリント例（中央 2 枚は Velvet Fine Art Paper、そのほかは写真用紙クリスピア＜高光沢＞および写真用紙＜絹目調＞を使用）（作例提供：関 行宏氏）

また、インクの低コスト化によって、A4 判でのインク + 用紙コストを税別 12.7 円<sup>[\*]</sup>に抑えているのもポイントです (SC-PX5V II は税別 18.9 円<sup>[\*]</sup>)。

もちろん、カラリオシリーズならではの使いやすさも追求しており、置き場所に制約されない無線 LAN 搭載、2.4 型カラー液晶搭載のチルト可能な操作パネル、自動両面プリント(用紙が対応している場合)、印刷スタートに連動した自動電源オン、排紙トレイの自動オープンとクローズ、自動色補正の「オートフォトファイン！EX」や sRGB および AdobeRGB に対応したドライバーなど、さまざまな特長を備えています。

「染料インクは作品制作には適さない」という従来のイメージを覆す Colorio V-edition シリーズ。作品制作だけではなく、写真教室でのプリントやサムネールの出力などにも便利です。量販店の店頭や西新宿のエプサイトなどでプリントサンプルをご覧いただき、その実力をぜひお確かめください。

|              | 染料インク                            | 顔料インク                                     |
|--------------|----------------------------------|-------------------------------------------|
| インク滴と用紙表面の様子 |                                  |                                           |
| 光沢感          | 光沢感のある写真印刷が可能 <sup>*1</sup>      | 染料インクと比べた場合に、写真印刷の際は光沢感が少ない <sup>*2</sup> |
| 鮮やかさ         | 鮮やかな発色                           | 落ち着いた色合い                                  |
| 耐水性          | 色材が水の中に溶け込んでいるため、水で濡れた場合に、にじみやすい | 水に強い <sup>*3</sup>                        |
| にじみにくさ       | 顔料インクと比べた場合に、普通紙への文字印刷はにじみやすい    | 普通紙でもにじみにくく、文字印刷が得意                       |
| その他の特徴       | 写真などの中間色の表現が得意で、階調豊かに表現できる       | 耐オゾン性・耐光性に優れるため、変色・褪色しにくい                 |

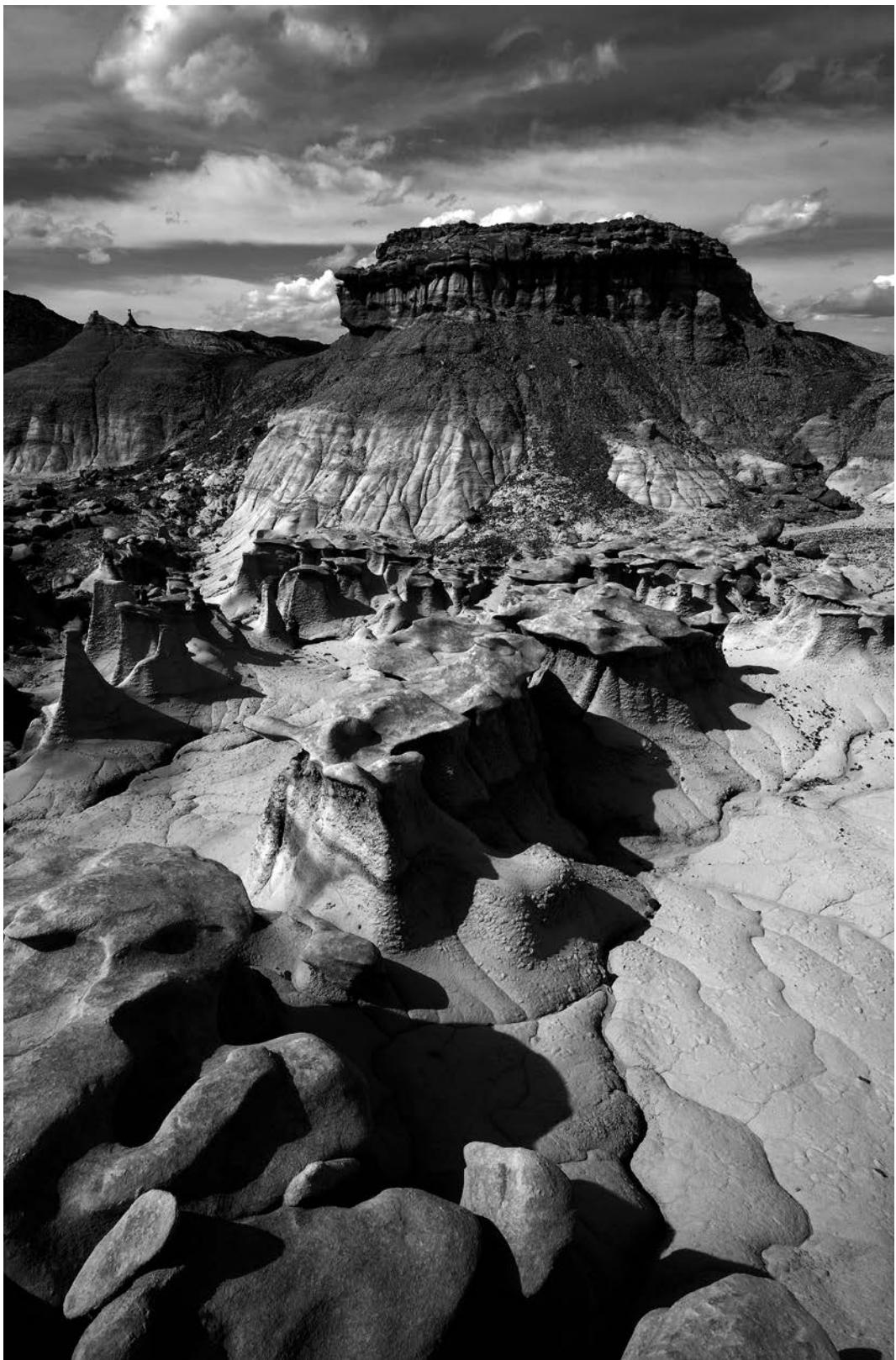
<sup>\*1</sup> : 染料インクは、色材が用紙内部に定着するため、用紙の質感がそのまま印刷結果となります。

<sup>\*2</sup> : 顔料インクは、色材が用紙の上に定着するため、印刷前の用紙の質感と印刷結果が異なる場合があります。

<sup>\*3</sup> : 必ずしも水ににじまないということではありません。

本比較は特定のモデルを対象にしたものではなく、一般的な傾向を表しています。

表. 染料インクと顔料インクのそれぞれの特徴



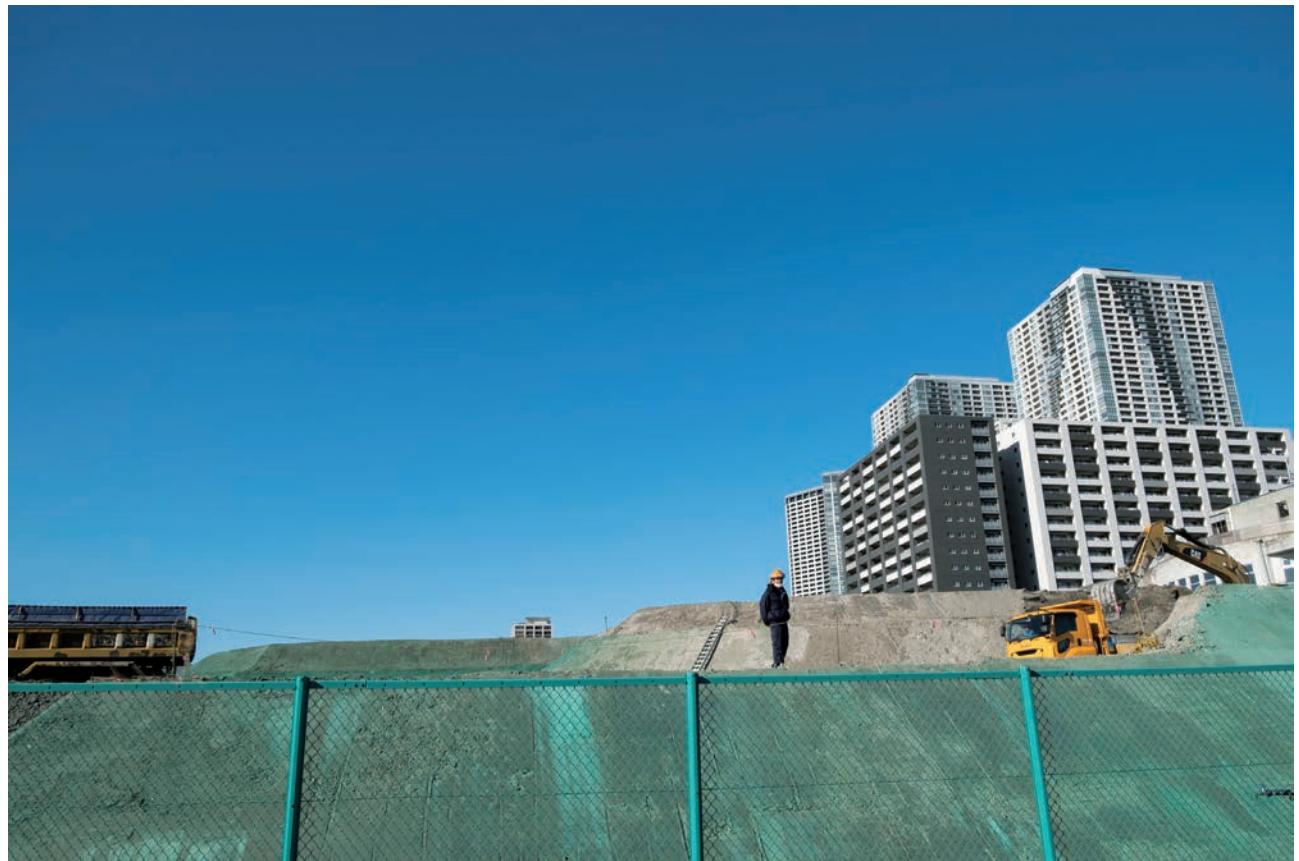
時空——小池キヨミチ  
FUJIFILM X-T1 XF14mmF2.8 R



緒止め——太田 真

FUJIFILM X-T1 XF18-135mm F3.5-5.6 R LM OIS WR

FUJIFILM



レガシー村——夏目安男

FUJIFILM X-Pro2 XF18-55mm F2.8-4 R LM OIS

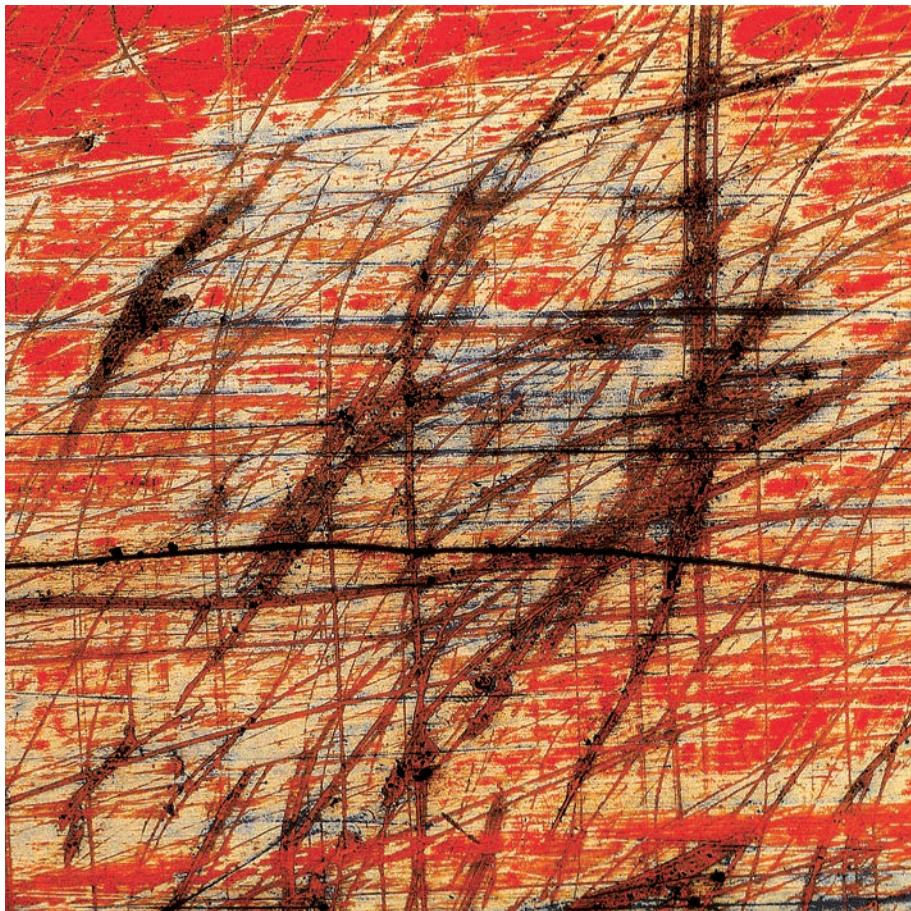


19世紀に誕生した銀塩写真は、芸術、報道など様々な分野で歴史を写し続けてきました。デジタルが中心の時代になっても、フィルムが描く独特な表現はその輝きを失いません。そして、富士フィルムが総合感材メーカーとしてフィルム開発のなかで培ってきた、独自の技術とアイディアによる高画質へのこだわりは、最新のデジタルカメラ「Xシリーズ」にも綿々と受け継がれています。伝統のフィルムと最先端のデジタル、その表現手法は違っても、製品の開発、製造にかける富士フィルムの情熱は同じです。



かけがえのない写真文化を伝えたい。  
富士フィルムのプロフェッショナル写真製品

**FUJIFILM**  
**Professional**  
**Photo Products**



*Photo* Takuma Kunihiro